緋文字

9
6
36

A

東京
東文館

96-364

SCARLET LETTER

BY

Nathaniel Hawthorne.

小說

緋文字

「ロマンス」著者 富永蕃江譯

東京 東文館

んるそーほ、るえにさな

小引

『緋文字』は米國の文士ナサニエル、ホーソルンの著はせし『スカアレット、レッタア』を譯したるものなり。

ホーソルンは千八百〇四年サレムに生れ、千八百二十五年ボードウイン大學を卒業し、其れより重に著作を事とし、千八百四十三年に至て妻を迎へ、マサチウセツツ州コンコルドに居を定めたり。後同窓の友たりしフランクリン、ピアルスが大統領に選ばるゝや、彼は擧げられて英國リヴアプールの領事に補せられしも、在職四年にして之を能め、千八百六十四年六十歳にして病歿したり。

彼の小說は平易通俗といふ種類のものに非ず。將た局面の複雜なるものにも非ず。然れども深く人間精神の中に探り入り、把攤剔抉よく心魂の底に徹し、讀む者をして悚然として身の震ふを禁ずる能はざらしむるの妙に至ては、蓋し稀世の才なりと

す。彼が血管には清教徒の血の流れるあり。義を愛し虚偽を悪み、薄志弱行を痛嘆し誇張妄説を厭忌せしこと甚だしく、其の筆鋒は南及の剣よりも利く、之に觸るゝものを雖き拂ひ刺し貫ぬき行くの概あり。而も亦謙遜にして禮を重んじ、敬虔にして神を畏れ、才を押へ筆を謹み、之がために譯して邦人に傳ふるも、終に其の意味を解する能はざるべく思はるゝ節甚だ多し。

『スカアレット、レッタア』は米國新英洲の英人殖民地たりし初代清教徒間にありし一悲劇を小説に結構したるものなり。其の序言に據れば、著者サレムの稅關に監査官として奉職せし際、或時雨日のつれ〴〵に署内に堆積せし古書類古遺物を點檢したり。然るに端なくも目に止まりしは十八世紀中マサチウセッツ灣英領サレム港稅關監査官たりしジョナザン、ピユーの遺文書なり。公務に關はるものならねば、彼の死後反古類と共に稅關の隅に葬り居られしものならん。其の包みを解けば中より現はれ出でしは、赤布にて製したるA字なり。脚の長さ三吋餘。既に色褪せ蝕い

て古色蒼然たれど、尚ほ美くしくして其の縫縫の巧みなる驚くべきものありき。而して文書の方を讀むにヘステル、プリンと云ふ一婦人の言行を詳記せり、彼は十七世紀の終末にありて、其の善行と其の汚名其の苦難とを以て時人に熟知せられしが如く、ピユーはヘステル、プリンを知りたりし故老に聞きて之を書きたるものなりと云ふ。著者は此の材料を經緯とし、之に自己の想像を潤色して此の著を作せるなりとあり。

抑も清教徒といふは、英國の基督信徒の一派にして、エリザベス女王治世の頃に起り、王權を以て宗教の事を左右せらるゝを厭ひて國教と分立し、儀式禮典の以上に宗教の精神を振興せんと勉めたるものなり。然れども迫害頻々として起り、彼等は至る所に捕へられ獄に投ぜられ、信仰の自由の甚だしく壓抑せらるゝを見るや、或者は慨然として萬里の波濤を凌いで人跡の未だ至らざる米國に渡り、或者は甞膽の苦を經過し終に英國の大革命を惹起するに及べり。

始めて米國に渡りたる清教徒は千六百二十年『メー、フラワア』號に乘り行きし者にて殖民地を新英洲プリマウスに定めしが、直ちに之に次で又一團の清教徒渡り行き、之は新英洲サレムとボストンとに分れ住みぬ。

當時の米國は唯だ森林のみ曠野のみ。此に見る人間の形とては唯だ赤銅色なせる印度人のみ。然も彼等が此に殖民せしは一に此の新世界に理想の國を造り、良心に從つて神を禮拜するの自由を得んために外ならざりしかば、殖民者は信仰至て篤く、道德至て嚴しく、一點の不敬不德を此新世界に容れざらんと勉めたり、

『スカアレット、レッタア』の中に記されたる話柄は、ボストン殖民地にて起りたること、なるが、一婦人過つて其の貞操を破りしため、赤色の布にて姦淫（Adultery）てふ語の首字Aを造り、終身之を胸に着けしめられたるを骨子とせり。スカアレット、レッタアは即ち緋文字てふ意なり。而して婦人は身を以て此の罰に當り、惡びられたる所なかりし爲、精神力を增し凡て遭遇する出來事、みな其の品性道德の敎育となりしが、其の罪行の對手たりし一青年は、性質高雅、心意優美のものなりしも、唯だ罪を告白して、雄々しく其の應報に衝るの心力を缺き居りしため、苦悶懊惱、風聲鶴唳にも輙く魂を飛ばすが如き樣に陷り、心身共に弱り衰へ、終に盛春の齡と有爲の才能とを齎らして危哉此土より消え失せんとせし間際に至り、再び親しく婦人に接し、其の言ふべからざる感化力に刺激せられ、終に遷延せる告白を決行して、長く己れを壓迫せし良心の呵責より救はれ、勝ち誇つたる心を以て世を去ることを得たり。此の精神の行徑を描寫し筆尖隱微にまで徹して些の遺憾なきは、讀者の齊しく感嘆措く能はざる所なり。

『スカーレット、レッタア』は十九世紀の英語小說中、ゴールドスミスの『ヴイカー、オヴ、ウェークフィールド』、ストー夫人の『アンクル、トムス、ケビン』等と共に、趣味高き社會に最も愛讀せらるゝものなるが、若し深刻痛切にして人心の底までも振盪するものを推さば、此書は隨一の傑作と稱せらるべきなり。

小引

明治卅六年十月金澤にて

譯者誌

緋文字

第一回

獄の前

富永蕃江譯

鬚生やしたる一群の人々はまた中に婦人をも雜へて木造の大厦の前、鐵の大鋲うてる嚴めしき樫木の門扉に面して集り居たり。男子は黯みたる色の衣を着、尖りたる鼠色の帽子を冠り、女子は頭巾かつげるもあり、かつがぬもありき。

新たに殖民地を新世界に立てし人々は、德義幸福の如何なる理想國を造らんと夢みしか知らねども、人住む處必ず死あり罪あり、未だ幾何も經ざる內、何所も言ひ合はせたらんやうに、早くも新墾の土地を割て、一部をば墓地に、一部をば獄の敷地

に用ひざるを得ざる事となりぬ。かくて勃頓の先祖たちも最初の墓地をアイザック、ジョンソンの地面、彼が墳墓の周園に定めて後に墳墓族立せるキングズ、チャペル墓地の基を成せる頃ともなれば、又コルンヒルに近き邊りに最初の獄舍を建てたりけむ。町を奠めてより十五年乃至二十年を過ぎぬれば、木造の獄舍は風雨の色を留めて古び、その突き出でたる玄關の始めより凄ごかりしも、一きは薄黑くなりまさり、樫の扉に施したる鐵工は既に赤く銹びて、新世界中何よりも古く見えわたりぬ。凡て罪惡に關するものには、若く新しき時代の決してなかりしやう思はるゝが常なるが、之も亦固より其例に洩るべくもあらざりき。この醜き建物の前、轍の跡を印したる路の此方には草原ありて、午蒡、藜、大千生など樣々の醜き草茫々と生ひ茂りて文明社會の黑き花たる獄舍をかくも早々より載する地面なれば、地味何となく相應はしきものあるが如し。然ど玄關の側殆ど闕の上には一株の野薔薇あり。頃しも六月のことて、寶玉の如き花咲き亂れ、此に入らむとする囚人、此より刑に赴く罪人に其馥郁たる芳香と艶麗なる色とを送り、之に由て『天然』の心はいと深くして彼を憐み愛することを示すが如く見えぬ。此薔薇株は不思議にも歷史に保存せられたり。昔は陰を四方に投げたる巨松老樫の枯倒したる後此凜厲たる荒野に唯だ何の理由もなく殘りたりしにか、將た或る人々の傳ふる如く、かの德高きアン、ハチンソンが此獄の戸口に入りしとき、其足の下より跳り出でたりしにか、そは我等の決すべきことにあらず。兎に角も此幸惡き扉の内に源を發するわが物語の入口に之を見いでしことなれば、著者はたゞ其花の一輪を摘みて讀者に呈せんのみ。或はこの後現はれ來る美くしき德の花に之をなぞらへむも可。或は人間の薄弱と悲哀との物語の黯然たる結局に多少の寬和を與ふる用に供するも可なり。

第二回　市場

二百餘年前の或る夏の朝、「牢屋町」なる此獄の前の草原には勃頓の民多勢出で來り

て、鐵の固めのいかめしき樫の扉を皆一心に見詰めたり。若しも他の國か又は新英洲にても後世のことならば、鬚ある面の屹として物凄くも嚴格なる人々の容貌に由て恐ろしき何事か將に行はれんとすることを推し測り得べし。即ち法廷が一般人民の感情を代表して宣告下したる或る大罪人のやがて所刑せられんとすと、見るより外には他の事としも思ひ難かるべけれど、初代清教徒の非常に嚴酷なりしを考ふれば、然かく容易には推測し難し。業を怠りし奴隷、親に訴へられし不孝の子が笞刑に處せらるゝとも見つべく、德則廢棄宗徒か圭哥兒か又は他の異端教徒が町より逐はれ、或は白人の酒精所謂「火の水」に醉狂して町を騷がし、印度人の鞭もて森林中にやらはるゝなるが。法官の寡婦ヒビンズ夫人の如き、巫女妖婆の匹、絞首臺にて殺さるゝならむか。何れにしても、人民は一向異らぬ嚴酷なる樣子して之を眺めたり。其れも道理。彼等の間には宗教は即ち法律ともいふべく、彼等の心の中には兩者全く一つとなりて織りこまれ居りしかば、社會を取り締るために刑罰を行ふときは、其の至て輕きものにても將た最も嚴酷なるものにても一樣に尊く且つ恐ろしきものなりしなり。されば處刑臺の上に立てる罪人に對しては冷酷極まる情を抱くと共に、刑罰をば非常に尊び、今日にては唯だ恥辱嘲笑に價する刑罰も死刑同樣に嚴かに見られたり。

偖此物語の始まれる夏の朝、注意すべきは婦人等が特に興味を以て、刑罰の成行如何と待ち望みしことなり。此時代、文華尙美はしからず、巾幗の人公けの場所に差し出づるを似合はしからずと思ひて、控ふることなく、あまり細くもあらぬ體を群衆の中に突き入れて處刑臺に近づき進むことを敢てしたり。當時の妻や處女たちは、六七代後の婦等よりも心も體も荒々しきものなりき。何となればそれより後の母たちの代々承け傳へたる色も形も母よりは子が、子よりは孫が次第に淡く次第に品やかになりまさりたればなり。然るに今しも獄の前に群れ居たる婦人等は彼の男優りの女王エリザベスが婦人の善き見本と言て差支へなかりし時代を距ること五十年に

満たぬ頃に在りて、而も女王の國の民なれば、よしや亞米利加へ渡り住みしにせよ、故國の食物をそのまゝに用ひしが如く、道德の養分も亦同じやうに未だ精美ならずして、本國の婦人と寸分違はぬ心と體とを有せり。今しも麗かなる朝日は、廣き肩、善く發達せる上體部を照し、遙けき嶋國に熟したる圓く赤き頰は、新英洲の風土の中に在ても、昔より蒼からず、痩たらず。互に語合ふ言葉も、至てきはどく聲高にして、之をして今日ならしめば、其意味其調子、大に人を駭かすものあるなるべし。

群衆の中にて五十ばかりの頑丈なる老媼は、言ひ出でぬ。『諸夫人よ、我が心を少しく語らんとす。齡も熟し、名譽ある教會員にてもある我等をして、この希士帖、弗蘭の如き罪人を自由に處分せしめば、社會のため大いに幸福なりしならん。如何に思ひ玉ふ。かの惡女をして此所なる我等五人の前に立たしめば、彼は今回法官等の宣告せし如き判決を受けて出で來るべきか。あゝ我これを信ぜざるなり』。次いで他の一人、『弗蘭の牧師、神の如き田墾底師は、其會衆の中より斯かる汚辱の出で來りしを甚だしく傷み玉へりと聞く』と言へば、又他のすがれたる婦人は言ふ、『法官たちは何れも神を畏るゝ方々なれど、これは餘りに慈悲に過ぎたり、如何に輕く罪すとも希士帖、弗蘭の額に烙印すべかりしを。之には流石の希士帖夫人も縮みこまん。されどかの賣女の事なれば、被服の胸に着けられし物ぐらゐ何とか思はん、胸飾の針などにて之を隱して今までと變ることなく公道を濶歩せん』と。年若き女の幼兒を抱けるが、之を遮りて少しく優しげに、『然れども徽章を隱さんとならは隱さしむるも可ならずや。其痛み、心の中には常にあらん』と言へば、今一人此等自任判官中の最も憎さげに最も無情なるは言ふ、『徽章の如何を論ずることかは。被服に着けらるゝと額に印せらるゝとは問ふを要せず。此女は我等凡てに耻を蒙らせたり。死なざるべからず。其法律なしと言ふか。否之あり、聖書にも國法書にも歴然たれど、判官等は之を用ふる能はざる也。かくては此後彼等の妻や娘が邪道に迷うても自業自得と云はざる可からず』と。群衆中に在りし一人の男は聞き難ねて『こりや堪らぬ。

婦人と云ふものには絞刑臺を恐れて慎む外に德義といふものなきにや。餘りと云へば酷なる言なり。靜かにせよ、門扉の錠は開かれんとす。弗蘭夫人は出で來りぬ』と。牢舍の扉は內より開かれ、先づ黑影の如くに光の中に現はれしは、典獄の怖しげなる姿にして、腰には劍を佩き、左の手に節仗を持ちたり、この人、其容貌に於て暗憺峻酷なる淸敎徒の法律を表彰し、代表し、又之を罪人に對つて厲行するを職とせり。節杖もてる左手を伸ばして、右の手を後に續ける若き婦人の肩に置き、之を曳き出でたるに婦人は門の閾に來るや、一種天性の威嚴を以て典獄の手をば振り拂ひ、己が自由にて步むかの如くして廣場に出で來れり。腕には生れて三月ばかりと思しき嬰兒を抱き居たるが、嬰兒は餘りに明らけき日光の中に出でしことゝて、眼を瞬きて顏を側けんとしたり。これまで薄暗き牢舍の內にて育てられ、之に慣れ居たればなり。母なる若き婦人は群衆の前に出で來るや、何よりも先に嬰兒を胸高く抱き緊めんとしたり。此は母の愛情に由てに非ず、胸に縫ひ込めたる一の徽章を隱さん心に外ならざれど一つの耻の徽章を隱さん爲めに他の耻の徽章を用ふるに過ぎざるを直ちに心付き、嬰兒をば抱へて、火の如く面を赤くしながらも、氣高げなる微笑と鼻白まぬ眼光とを以て人々を見回しぬ。被服の胸の上には、燃ゆるが如き赤き布もて切り出だされ、金糸いと賑やかに周圍を飾りたる『A』の一字こそ現はれたれ。手際如何にも巧みに、如何にも趣向を凝らしありて身に纏ひたる衣服に善くも似合たる最後の飾となりぬ。服裝も亦此時好を逐ひたれど奢侈を禁じたる殖民地の規定をば遠く逸し居たるなり。

婦人は丈高く姿いと大きやかに艶なりき。總々したる黑髮は、日光に映して光るまでに澤あり、顏は條目正しく色澤よきのみならず、寬き額、黑き眼のおのづから凜然たるものありて、彼は此時代の高尙に適る一貴女の風采を具へたれど、今人が貴女の標とするよりも、寧ろ氣高かき一種の品格を有せり。而も希士帖、弗蘭の最も氣高く見えしは此牢舍より出で來りし刹那を以て第一とす。これまで彼を知り居て、

此度こそは彼れ不幸の雲に曇り痩れて出で來らめと思ひ居たる人々は、彼の轉た美くしく、己れを包みし不幸と耻とを後光として、益々照り增さる趣あるに一方ならず驚きて愕然たりき。流石に心ある者は之を見て、其中にいひ知らず苦しきものゝ存するを感じたるならん。弗蘭の着けし衣服も實に此の場合に用ひんため獄中にて彼の自ら縫ひしもの、己が意匠を凝らして特に仕立てたるものなるが、其並外れにて目醒ましきはよく其自暴自棄なる心情を顯はしたりと謂つ可し。されど人々の目を惹き、又本人を全く別人の如く見えしめ、これまで希士帖、弗蘭を熟知せし男女をして始めて彼を見たる感あらしめたるものは實に其の胸に花の如く輝ける『緋文字』にぞありける。あゝ是こそ之れ彼を普通の人間界より外に拉し去つて、一個獨特の境に閉ぢこむる魔力を有したるなれ。

婦人傍觀者中の一人は言ひぬ。『實に彼な裁縫には熟達せり、されど斯く花やかに徽章を示さんとしたる者は此恥知らずの女を以て始めとす。これ偏に法官等を侮蔑するものならずや、刑罰と思へるものを以て誇りの種とするものならずや。』いと慈無悲なる顏附の一老女之に次で『あの立派なる外被を彼奴めが意氣な肩より引剝ぎ、美々しく飾りたる緋文字の代には我が倭麻質に當てる毛布の襤褸を與へて似合ひのもの造らせたし。』と言へば、此一群の最も若が『あゝ靜かにし玉へ、聞えては惡しからん。あの刺繍の一針〳〵が、一々胸にひし〳〵と當たるなるべし』と言ふ。

典獄は節仗にて人々を制しつゝ『陛下の名に由て命ず、途を開けよ人々、途を開けよ。余諸君に約す、希士帖、弗蘭は今より午後まで老若男女明かに彼を見得る所に立たざるべからず。正しきマサチウセッツ殖民地に祝福あれ。此地にては罪惡日光に露さるればなり。來れ希士帖、進みて汝が緋文字を市場に示せ』と叫びければ、群衆は途を開きたり。典獄は先づ進み、後よりは酷しき顏せる男、無情の面せる女たちの不規則なる行列續き、希士帖は其中に圍まれて指定の場所へと歩を運びたり。學校兒童等はたゞ半日の休暇を得たる外、何事なりとも解せざれど、たゞ物珍らし

く面白きことに思ひて、前に走りては屢々見回りて弗蘭の顔、眼瞬く幼兒、胸なる耻の文字を眺めたり。其頃は獄より市場までの途程もさまで、長からざりしが、弗蘭に取ては餘程の旅をする心地せられ、姿こそは思ひ上りたれ、周圍に蹈み鳴らす人々の跫音に、苦痛を感じ胸うち割りて心を擲ち他の蹂躙に委したる思ひやありけむ。されど人の天性は不思議にも幸幅に造られ居るものにて、後に至ては堪へ難く思ひ出ださるゝ事も、苦み受くる刹那には、自らその如何ばかり手痛きを感ぜぬものなれど、弗蘭も殆ど靜然なる有樣にて苛責の此部分を過ぎて市場の西端なる處刑臺まで到りけり。臺は勃頓最古の寺院の軒下に立ちて、常設の物たるが如し。

此の處刑臺今は唯だ歴史となり傳說となりたれど、當時は市民の德を奬勵するに甚だ力ありしこと、宛も、斷頭機が佛蘭西暴政黨に於けるが如くなりしなり。其構造と云へば、小高き方臺ありて、其の上に首枠臺立ち、罪人は堅乎と此枠に首を挾まれ、公衆の視る中に立ちしなり。罪人をして其顔を隱す能はざらしむるほど酷しき處刑はあらざるべきに、此鐵と木との刑具は即ち之を主眼とするものなりき。然れど希士帖弗蘭の場合には、首を枠に入るゝことは免され、一定の時間、方臺の上に立つやう宣告されしなり。希士帖は其爲す可き事を知るものから、木の段より登り行き、かくて街造よりは人の肩ほど高くなれる臺上にて、圍める群衆に露されたり。その光景は眞の畫の如く、若し是等淸教徒の群衆中に羅馬教徒のありしならば、容貌服裝兩つながら繪にて見まほしき一人の美女、胸に幼兒を抱けるを見て、幾多の名畫工が互に競ひて畫きたりし聖母の圖を想起せしならん、而も唯想起するのみ、世の罪を贖ひし『幼兒』の罪無き母と對照して之に思ひ當るならむ。こゝには人間天性の最も神聖なるもの、極めて深き罪に汚がされ、なまじひに此女の美なるが爲め、此幼兒のあるが爲めにいとゞ世界の暗黑にして、罪障なるを思はしむ。

此光景は又恐ろしき色を帶びたり。社會未だ罪惡に慣れず、罪に對して戰慄するも、決して笑つて之を見ること無かりし世に於ては、罪惡と汚辱とに陷りたる同胞の姿

こそ畏ろしきものなりけれ。かゝる質樸の狀態を脱せざるの公衆はたとひ弗蘭死刑に處せられむとするを觀るとも、彼等は刑の酷なるを訴へずして、其死を傍觀したるべきなり。然かのみならず、處刑場に接近せる集會堂の物見臺には總督、參政官、裁判官、將官、及び宗教家等の列坐して處刑を瞰下したれば、たとひ冷嘲の心起りぬとも此光景に壓倒されて眞面目に返らざるを得ざりしなり。位職の尊嚴を傷くることなくして、かゝる人士もなほ觀覽者の中に加はり得可くば、其頃の處刑といふものゝこは極めて重大なる意味ありしこと、想見するに足らむ。群衆は肅然として嚴そかなりき。薄倖の受刑者は己が身に懸り、己が胸に集まれる千百の無情なる目に射られつゝ、女心を張りつめて、其重荷を忍びたる心や眞に忍び難かりけん。素より意氣地の強くして、情に激する性なりければ、公衆の侮蔑は刺となり毒刃となりて、たとひ如何なる侮蔑を加へむとも必らず堪らへ凌がむと意は夙に固めたれど、大群衆の肅然たるに、いとど恐ろしき心地ぞせられて、これならば、寧ろ己が矢表に立つとも、嚴そかなる人々の顏色動きて、嘲笑罵詈の出で來らむこそ望ましけれと思ひぬ。若し群衆の中より、笑聲の起りて、男も女も聲細き幼兒もおのがじゝ叫びたらんか弗蘭は苦き賤みの笑みを以て之に報ふべかりしなり。されど彼等は此に出でず忍ばざる可からざる重荷の下に弗蘭は時々聲有らん限りに叫び出でんかと思ひ、あるは、方臺より飛び下らんか、然らずば直ちに發狂せんと覺えぬ。

然れどもまた折節は己が著るく目立ちたる眼前の光景ふと消え失するが如く、又面影にして朧ろげにほのめき、ふつゝかなる幽靈の影の集りかと思做るゝことあり。心の働きもさることながら記憶は殊に怪しきまで鋭くして、西の荒野の片端、敗石さへもこゞしかる此一小都會の街路より離れ、尖がれる帽の緣より覗くむつくけき顏を忘れて、異なる景、異なる人を忍ばしむ。極めて瑣細なる昔の思出、幼き時、學校通ひの時、あるは戲遊し、あるは物爭ひしたる折の事より、處女になりて、家事を營みしすさびなど、皆心頭に沖り來て、後年の悲愁を錯綜す。何れの記憶も皆同

じやうに鮮かなれば、皆すべて大事なる如く、またすべて戯なる如し。謂ふに、これ自からなる心の方便にして、様々の幻影を眼に浮べ、今の現の辛さ、悲さを和らげむとするものなるか。

そは兎も角も、この處刑臺に在りて、弗蘭は、幸多かりし幼年の時より、けふの今まで蹈み來し方の路を眺めたり、彼今この悲しき高みにありて、再び故里の英國を見、父母の家を見ぬ。其家は灰色なせる石造の頽屋にて、頗る貧しげなれども、由緒の正しきことを示せる紋章は玄關の上に懸り居たり。彼は又父の顏を見ぬ。額は禿げて白髯蓬々と垂れ、處女王朝の時花なりし綸領を蔽ふ。又母の顏を見ぬ。心遣ひ多き慈愛の色は常に記憶する所にして、其亡き後も、娘のゆくてを遮りて、物靜かにも諫め戒めたるものなり。彼ほ又己が顏を見ぬ。光り榮そふ花の色は、古鏡の曇りも照したり、彼は更に一つ他の顏を見ぬ。老い痩れて色蒼白く痩せ細りたる學者の姿、萬卷に曝らしたるその目はくもりて燈火のために爛れたれど、人の心を讀まんと欲するときには、不思議なる視力を有したり。此讀書人の姿を偲ぶに付けて、其少しく不具にして左の肩が右より高かりしことを想出でるはさすがに弗蘭も女なりけり、次に現はれたる追憶の畫堂の圖は歐羅巴大陸の一都市にして、街路は狹く家高く、寺院、公廳兩つながら、舊くして、物寂びたり。弗蘭は此處になほ彼の學者と共に移りて、新らしき生活を營まむとせしなれど、此新生活はたゞ廢頽の材を基とせしのみなれば宛も古壁に倚れる靑苔の鬚の如くなりき。而して此等の思ひ走馬燈の如く回りて、最後に淸教徒殖民地と、其の人民の酷しき顏して希士帖弗蘭の周圍に集れる光景とは返り來れり。而も其の希士帖は彼れ自らなりき。身は處刑臺の上に立ち、腕に嬰兒を抱き、胸には赤にて『A』字かゝれり。あゝ此れ眞なるか。彼は嬰兒を抱き緊めぬ。其の餘りに烈しかりしため嬰兒は泣き出だしたり、彼は目を下に注いで緋文字を見、之を爪繰つて此の恥この嬰兒果して現なりやと試みり。然りこれ實在なりき。他は悉く消え失せてけり。

第三回　認知

斯かる所に弗蘭をして、其の現在を忘れて今受くる苦より暫し脱れ出でしめし人影こそ、群衆の後方に現はれたれ。弗蘭は二人の來るを見たり。其の一人は印度人にして、印度人服を着けたるが、此は珍らしくもあらぬものなり。されど今一人。其の印度人と伴ひ、一人の白人立てり。身には文明服と野蠻服とを不調和に着け居たるが其の體格は小さく、其の顔はまだ老いたりとは言はれねど、皺多かりき。其の姿には心の修養到れること現はれ居たり。其の無造作なる服裝に由て隱さんと勉めても、希士帖弗蘭には彼の一方の肩一方より高きこと一見して知られたり。其の姿を見るや弗蘭は嬰兒を抱きすくめぬ。嬰兒は之に由て復た泣き出だせり。然れど母は之を聞かざるもの丶如かりき。

件の旅人市場に達するや、彼は目を留めて希士帖弗蘭を見しが、初は何をも意に介

せぬ樣なりき。此は已が心をのみ見るに慣れて、其精神と關係なき外界の事物を價値なく意味なしとせる人の常なり。されど彼の眼光は直ちに鋭く射はじめたり。其の容貌には悽味一面に覆ひぬ。顔は烈しき感に因て曇りしが、意を勵まして抑へたれば、唯一瞬時の外は平靜なる常態を呈して激動の樣殆ど辨別し難く終に心の奥に潜みぬ。希士帖弗蘭の眼已れに注いて己れを認めしと見るや、彼は徐ろに其の指を上げ、空中に手樣をなし、之を自已の唇にあてぬ。

斯くて傍に立てる町の人を顧み、至て禮儀正しく問ひ出づるやう『君よ、此の女は何者なるや。又何のために公衆に恥を曝して此に在るや』と問はれし男は訝しげに問ひし人と士人とを見て『君は必定此の地方は始てなる旅人なるべし。然らざれば希士帖弗蘭夫人と其の非行と聞きし筈なり。彼は甚だしき汚辱を惹き起せり、田墨底師の教會に在りながら』と告ぐれば『君の言ひ玉ふ如く我は旅人なり而して又た心ならずも流寓したる者なり。海と陸とにて種々の禁難に遭ひ、長く南方異教徒の

中に捕へられ居りしが、今回此の土人に由りて、捕虜の中より贖ひ出だされんため、此に携へ來られしなり。されば此の希士帖弗蘭――希士帖弗蘭とやら――のこと、此の婦人の罪と此の臺上に曳かるゝに至りし所以とを、苦しからずば告げ玉はずや。』

『實に然り、君も長き困苦と流寓との後に、此の新英洲の如き、罪惡隅なく探され、有司と人民との目前にて罰せらるゝ地に、到りしことを喜び玉ふならん。彼の女は或る學者の妻なりき。其の學者は元英人にして、長く和蘭のアムステルダムに住みしが、後このマサチウセッツに渡り來らんと思ひ立ち、先づ妻を送り、已れは暫く止まつて殘務を見たり。然るに其の後二年ほど妻は此の勃頓に來り住み居れども、君よ其の學者弗蘭氏の音づれとては絶て聞えざるなり。面して其の若き妻は君の見る如く惡き方に導かるゝに委されしなり』旅人は之を聞て苦笑して遮り、『善く理解せり。而して其學者もし君の言ふ如く學問ある人ならば、斯る事は書中にて學びてある可きに。さて被の生れて二三月許の嬰兒の父は何人なるや、』と問へば『さればなり。其事は尚ほ謎の中にあり。之を解く預言者ダニエルは未だ現はれず。希士帖夫人は如何にしても之を告ぐるを肯んせず。判官等は空しく頭を鳩めたり。此の群中に其の罪人は立てるならむ。人は知らねども、神の見玉ふことを忘れて』と町人は答へぬ。旅人はまた苦笑ひし『其の學者こそ自ら來つて其の秘密を探るべきなれ』と言へば、町人も『然なり、彼れもし生きて在らば然かすべきなり。君よ此のマサチウセッツの法官等は、此婦人が若く美しくして墮落に强烈しく誘はれしことを察する上に、夫も既に死して海底に在らむと思ひ、正義の法律を勵行して之れに充つるに忍びざりき。罰はもと死に當る。然れども判官等は之れを憫み、此の臺上に立ち、且つ今後世を終るまで恥辱の徽號を胸に看け居るべきことを判決したり。』旅人は重々しげに頷づき、『賢き宣告なるかな。斯くて此の婦人は罪行を責むる生ける說教となり、死しての後も汚辱の文字を墓石へ彫まるゝなるべし。唯だ遺憾なるは彼の罪行の對手が彼と相並んで臺上に立たざることなり。されど其者は必らず顯はれむ、

顯はれむ、顯はれむ』と言ひ放ち、町人に一禮し、從者の士人に何事をか叫きたる後、群中より去り行きぬ。

希士帖弗蘭は後影を見送りて全く我を忘るゝまで心を奪はれたり。彼の心には餘のものは皆消えて唯だ己れと旅人とのみ殘れり。若し此の時の幻想の如く實際に二人にて會見せしならば、其の恐ろしさや却つて甚だしかりけむ。よしや灼々たる白日の下、胸には徽號を着け、碗には罪の果たる嬰兒を抱き、爐邊の靜光に、家庭の多幸なる室隅に又は寺院に刀自めいたる面帕看けて眺めらる可き顏を祭日の如く群れ來れる人々の眼に見詰られて、彼に邂逅しにせよ、此方が却つて二人のみにて相會ひしよりは幸なりしなり。弗蘭は數千の立證者の前を隱れ家なる如く感じ、此の保護を取り去られて二人にて會ふ時を思ひて恐れたり。此等の思ひに奪はれ居りければ、弗蘭は已れを叫びし聲あるにも殆ど氣付ざりき、されど其の聲は再三彼を呼べり。其の調子は高く嚴格にして、凡ての群衆の耳に入るほどなりき。

『希士帖蘭弗よ、我が言ふ所を聞け』と其の聲は呼はれり。前にも言へる如く、弗蘭が立てる方臺の上には、集會堂より差し出でたる開樓あり。此は法官列席の上、此時代の公事に伴ふ種々の儀式をもて宣告をなすために用ひらるゝ處なるが、此の時この樓上には總督伯林俄四人の警吏を左右に侍らしめ、節斧を持ちて臨み居れり。彼は黑き鳥毛を看けたる帽子を冠り、緣を縫ひ看けたる上衣を被、黑天鵞絨の下衣を穿ちしが、苦勞の印を皺に留めたる高齡の士なりき。彼は斯かる社會の頭首たり代表者たるに決して不適當なる人に非らず。之を創立し進歩せしめて今日の發達あらしめしは、少年客氣の能くする所にあらで、堅固にして錬熟せる成年の精力と、深沈なる老者の智慮とに俟つ所多かりしなり、されど今希士帖弗蘭が仰き見たる嚴肅の長老の如く、女人の蹉跌を裁き善惡の紛糾を解結するに不適當なる賢にして德ある同數の人々は、全人類中に求むることなかゝに難かるべし。彼を圍める人々も、權勢に教法の神聖を認めたる當時のことゝて各々其の顏に威嚴を保ちて皆義し

く、且つ賢こき人々ならむ。弗蘭は却つて方臺の下なる群衆の寛にして、温かなる心にこそ、寧ろ同情を求め得べけれと感じたるが如く、樓上を仰ぎて色若ざめ打ち震ひぬ。

弗蘭を呼しは勃頓の最年長教師慈温維遜なりき。當時の宗教家は大抵學者なりしが彼も亦大學者なりき。且つ親切にして寛大なる人なりしも、自らは知力の方を尊びて、此親切寛大の天性あるをば、却て恥と思ひ居たり。其時彼は立ち居りしが、其の小帽子の緣より灰色の頭髪を挾み出だし、書齋の柔かき光に馴れたる眼をば、弗蘭の兒のそれの如く明らけき日光の中にて瞬たきつゝ、宛も古記教集の口繪にある肖像のやうに、かゝる場處へ脫け出たるも不思議なる心地す。『希士帖弗蘭と、我れ此の若き兄弟に』と言て、傍に在りし色蒼白き青年の肩に手を置き、『我れ此の兄弟に促じたり。御身は常に此の兄弟の會堂にて神の言を聽きたればなり。我れ此の青年教師に向ひ、此上天の照覽する所、賢明公正なる有司諸公の前、凡ての人民の聽く所にて、御身の罪に付て究むる所あらんことを勸めたり。此の人は我よりも御身の性質を善く知り居れば、如何にして御身を罪に服せしめ得べきかを考へ、御身をして已れを此の墮落に誘ひし者の名を白狀せしむるを得べきなり。然るに青年に有り勝ちなること、て年に似合はず賢明なる彼も此事につきては優しきに過ぎ、婦人の心の秘密を斯かる白日の下公衆の前に露すことを迫るは、其の天性その物を賊する所以なりとて、余に反對したり。されども恥は罪を露すに在らずして、罪を行ふに在るぞかし。何と思ひ玉ふ田墨底君。今一たび問ふべし君こそ罪人を取り調べ玉ふべきか。我れ之に當るべきか』と言ひ終れば、肅然たる閣樓上の人士間にも私語の聲さゝやぎ渡りぬ。此時總督は青年教師に向ひて、尊敬の意を含みたれど威嚴ある聲を以て『田墨底君。此の女の靈魂に關する責任は大いに足下にあり。されば彼に懺悔と白狀とをなさしめ、これが證を立て果を結ばしむるは、當然足下の務めに屬す』と言ふ。人々は一齊に眼を青年牧師に轉じぬ。田墨底は英國の大いなる大學より出

で、當代の凡ての學問を齎らして、未開の米國に來りたる人なるが、其の能辯と熱信とは、後年教職の高位に登る可きを豫め約するに似たり。彼の顏貌は頗る目際立ちて。額白く高く、眼大きく鳶色にして悲哀を宿し、其口は强く引き締むるに非らざれば常に震へ勝ちにして、神經敏捷なること丶又自制力の强きとを併せ示せり、然れど天性高貴にして學者の實あるに拘はらず、彼れは一種おど〳〵したる所ありて、驚きたる如く、半恐れたる如く、宛も人生の途に迷ひて彷徨する者の如く、自ら世を避けて隱る丶にあらずむば心の平和を得離きさまなり。されば職務の許す限は平生、人陰の小經を蹈みしがいざといふ場合には現はれ來て、其の若々しく匂やかに清らかなる露の色四邊を拂へり。人々は常に天の使の談話に觸る丶心地すと之を稱へ居たり。

青年牧師は斯かる地位に立ちしこと丶て全く血色を失ひ其の唇を戰かせ居りしが、またも維遜に促がされ、靜かに首を低れて默禱したる後、前に歩み出で丶、開樓より身を差し出だし、希士帖の眼を緊乎と見下しつ丶『希士帖弗蘭よ。御身維遜教師の言ふ所を聞き、我れの爲さざるべからざるを見たるならん。御身もし御身の靈魂の平安のためとなり、又御身が受くる此世の刑罰は更に救拯に助けあるものとなれることを思はゞ、御身の罪の對手また罰の對手たる者の名を白狀せよ。誤れる慈悲心や柔和のために口を噤む勿れ。希士帖よ、其者たとひ高き地位より下り來つて御身の傍に恥辱の臺上に立たんとも、一生涯罪ある心を隱すよりは優れるぞかし。汝默して止むとも彼の罪に更に僞善を加へしむる外何の益する所かある。上天は御身に公然の恥辱を賜へり。此れ御身をして心中の惡と外より來る悲しみとに全勝せしめんがためなり。心せよ、御身は御身の口にあてられし盃を彼に與へざること丶なるぞかし。其の盃はよしや極めて苦きにせよ良藥なるに』と言し聲は震ひて、美くしく豐かに深くして又微かなりき。聽きし人々は一樣に其の聲の心中に震ひ入るを覺え、同情の念齊しく湧き出でたり。希士帖の懷にありし嬰兒も又同じ力に感じて

か、其れまでは見定めなかりし瞳を注いで田墨底を目守り、半ば喜ばしげに半ば苦しげに呟きつゝ其小さき腕を差し上げたり。人々は思ふやう、斯くまで強き情をこめて牧師に説かれしからには、希士帖弗蘭必ずその罪人の名を言ひ顯はすならん、然らざれば其の罪人如何なる地位に在る身なりとも、心に責め立てられて自ら名告り出づるならんと。

然も希士帖は頭を掉りぬ。維遜は前よりも酷しく『希士帖、上天の恵みを外るゝまで罪を犯す勿れ。其の兒の聲も白狀を促せるぞかし。其の名を告げよ。而して悔い改めなば胸の緋文字をば取り去て得さすも知れず』と叫びしが、希士帖は其方を見ず、田墨底の沈みたる眼と見合はして、『如何にしても言ふまじ、緋文字は餘りに深く烙きつけられて閣下も之を取り去り得ず。妾は己れの苦みと共に彼の苦みをも忍ばんと欲す』と言へば、處刑臺の下より『白狀せよ婦人。而して其の兒の父を告るべし』と冷かに無情に呼ぶ者あり。紛れもなき知れる聲なるに希士帖は死人の如く蒼くなりつゝも『妾は言はじ。而して我兒は天の父を求めざるべからず。我兒には決して此世の父を知らしむべからざるなり』と之に答へぬ。

田墨底は己が胸に手を當て、開樓より差し覗きて、希士帖の答へ如何にと待ち居りしが、此に至て『彼は白狀せざるべし。驚くべきかな、婦人の心の力と心の大いさとは。彼は白狀せざるべし』と言ひ、大息つきて身を退けたり。維遜は豫め之を期せざるに非ざりしかば、群衆に向つて罪に關する一場の演説をなしぬ。幾度となく緋文字を引て語りしが、言ふ所激烈にして、人々の心は之がために恐れを生じ、緋文字の色は地獄の穴に燃ゆる火より取り來りしものゝ如く思はしめたり。希士帖弗蘭の身体は何の變ることもなく立ち居りしが、心をば自ら勉めて石のやうに無感覺にせしかば、教師の烈しき説教も空鳴の雷の如く徒らに過ぎしのみ。嬰兒は處刑の終りに近づくや凄まじく泣き叫びしが、母は唯だ器械的に之をあひしらひ居たり。軈て時滿ちて希士帖弗蘭は再び牢屋に引き入れられぬ。

第三回　會見

希士帖弗蘭獄に歸りて後は、神經いたく激搖せし樣見えて、若し注意せずば自らの身か嬰兒の身に、如何なる珍事を仕出來すも知れずと思はれたり、夜の近づくに至り、看守プラッケトは迚も叱りや脅しにて希士帖の心を鎭め得ざるを考へ、一人の醫士を遣るに如かずと思ひ付きたり。彼は其の醫士を以て、基督敎的の醫術に熟達せる上、更に野蠻人等に敎へられて、深林の草根木皮の用を熟知せる人なりとしたるなり。眞に希士帖の上のみならず、嬰兒に取りては此時更に醫士の力を要するものありき。實に嬰兒は母の胸より出づる乳を吸ひて生くるものなれば、また母の心の亂れ苦しみ絕望をも凡て飲み入みしにや、今はいたく苦しみ悶え居たり。看守の後に踵で此の室に入りしは晝間に群衆の中より希士帖の注意を奪ひ取りし彼の男なりき。彼は獄の中に宿れり。されど罪の嫌疑を受けてに非ず。彼の身受に付て法官等は今しも印度人と談判中なりければ、其間此所に在るを最も便宜適當のことゝしければなり。彼は老日、知輪沒といふ名にて人々に名告りたり。彼れ入り來るや希士帖は一目見て忽ち死の如く靜かになりぬ。看守は之を怪しみて暫く佇み居りしに、醫士は言ひ出でぬ『友よ我に任せよ。君は歸つて休み玉へ。我れ必ず弗蘭夫人を今までよりは取り扱ひ善き者となすべければ』看守は答へて『其れが出來なば閣下は實に熟錬の人なり。眞に此の女は鬼に憑かれたる者の如かりき、小官は之を逐ひ出たす力足らざるなり』と言て去りぬ。知輪沒は如何にも醫士らしく落ち着き拂ひたる樣子を持ち續けて入り來りしが、先づ嬰兒に注意せり。嬰兒は泣き呼びて弗蘭は唯だ之を和むるの外何もなす能はざりし程なりき。醫士は熟ら嬰兒を診察したる後、被服の下より藥箱取り出でゝ之を開き、藥を撰びて之を水を以てコップ內に溶き、さて言ふやう、『我れもと錬金術を研究し、又一年あまり藥草を熟知せる蠻民の中に在りしを以て、今は彼の學士博士號を請求する人々よりは善き醫士とな

りぬ。婦人よ、此兒は御身の兒なり。我兒に非ず。我聲我顏を父の聲父の顏と認めはすまじ。然れば此の藥をば御身自ら之に飲ませよ』希士帖は其の藥を突き返し、異樣なる顏色して醫士を見入り『御身は此の罪無き赤子に復讐せんとし玉ふか』と低語すれば、『醫士は半ばは冷かに半は和めて『愚なる女なる哉。我何ぞ此の誤て生れたる不幸の赤子に害を加へんと思はんや。藥は善き効能あり。たとひ此兒我が子たりとも此の上に善く療すること能はざるなり』と答へしが、希士帖の尙逡巡するを見て、自ら嬰兒を抱き上げ、藥を之に與へたり。効能は直ちに現はれて嬰兒は泣き止み體のしやくりも鎭まり、やがて深き眠に入りぬ。醫士は此度は母に向ひ、其の脈搏を檢し、其の目を見入りぬ。此時希士帖は縮み上りて身震ひしたり。あゝ醫士の眼光は善く見馴れ居りて然も甚だ奇異に甚だ冷かなるものなりければなり。見了りて又藥を盛り『是れは我等の古より知れる、藥に換へて印度人より學びたる藥なり。之を飲めかし。固より罪なき良心を與ふるほどに御身を和めることも出來さじけれど、御身の感情をば靜め得べし』と言ふ。希士帖は彼の顏を熱心に見入りて之を受けたり。希士帖はもはや恐れず、されど醫士の目的那邊に在るかを疑へるなり。嬰兒をも打ち見やり『我は死ぬることゝ思ひたり。死を願ひたり。之を祈りまでしたり。然も此の杯の中に死を盛れるならば、我が飲み了る前今一度考へ直し玉へ』と言へば、相も變らず冷かに『飲め御身は其れ程まで我を知らぬにや。我が目的さる淺きものならんや。若し復讐を企つるにせよ。御身を生かすに如くものあらんや。さすれば此の燃ゆる耻は御身の胸に長く在るに非ずや』と言て緋文字を指させしが、希士帖は之を胸中に燒きこまるゝ心地したるに、醫士は其色を見て『故に生きて此の罰を人々の見る所、御身の夫と呼びし者の見る所、御身の兒の見る所にて負ひ行け。今は生きて可なり。其の藥を飲めかし』希士帖今は疑はず、藥を飲み干して嬰兒の眠れる床に腰かくれば、醫士は其の傍に椅子を引き寄せて腰かけたり。希士帖は醫士の仕打ち我が今までの事に付て考へ、身震ひせざるを得ざりき。

醫士は言へり『希士帖よ。我は御身が何故に如何にして此の穴に陷りしか、否寧ろ不名譽の處刑臺に登りしかを尋ねざるべし、其の理由は尋ぬるまでもなき事なり。即ち我が愚にあり御身の弱きにあり。我れ思想の人、書物の蠹、老衰の人、知識を渇望して盛年を費したるもの、如何で御身の如き若き美くしきものと相副はんや。初めより我は考へ違へし居たり。學者常に賢き者ならば、我は之を先見したるべきなり。森より出で來りし時、彼の如き樣にて立てる御身を眞先に見るべきを知りたるべかりしなり。否結婚の當夜古き教會の段を携へ下りし時、前途に燃ゆる緋文字を見るべかりしなり。』希士帖は最後の一句を忍び得ず『御身は知れり。我が御身を愛せざりしことを、否愛を裝ひさへもせざりしことを』と言へば『然り、前に言へる如く其は我が愚なりき。然れども我れ生れて其の時まで徒らに世に生きたり世界は空漠なる所なりき。我が心は廣き家の如くにして、而も之には何者も住はず、淋しく冷かくして家庭の火燃えざりしなり。我れ之を燃やさんと切望したり。老いて衰へて失意なりしかば、唯だ一つ人並みの幸福を世界より拾ひ集めんとしたり。之もさほど淺墓なる夢とは思はれざりき。かゝりしかば希士帖よ。我れ御身を我が心の奥座敷に引き入れ、御身の在るに由て我に生ずる温まりに由り御身を温めんとしたり。』希士帖『眞に我は御身を害したり』と言へば『互ひに相害ひたり。我れ先づ御身に惡をなしたり。御身の蕾の如き齡を碎きたればなり。されば思想もなく哲學觀念もなき者どもの如く、我れ御身に對して何等の復讐も害も企てず。御身と我とは五分〳〵の身なればなり。されど希士帖よ。我等二人に惡を加へたる者は存す。何者ぞや』と醫士言ふ。希士帖は彼の顏を緊乎と見て『乞ふ其を問ふ勿れ。御身は決して之を知るべからず』と言へば『決して知らじと言ふか。』と氣味惡く且つ自信の色を帶べる笑みをなし『希士帖よ、外部の事は愚か、たとひ心の中の事なりとも其の秘密を究めんとて、一意專心に勉むる者の眼に隱れて了る物は殆ど無きぞかし御身は人々より此の秘密を隱し得もせん。又敎師や法官等よりも隱し得もせん。今

口も然かしたり。然れど我は彼等とは異れる意味にて穿窄するために來れり。我は書中に眞理を探し化金術にて金を求むる如く此男を求むべし。我には之を知るの直覺あり。早晩彼は我物なり』と言へる眼には無量の力あり。希士帖は手を組み合はせて胸を蔽ひぬ。其の心を讀み貫かれんことを恐れしなり『御身は其の名を言はざるべし。されど其者の我物たるには少しも障りとならず。彼は衣服に文字を着け居らねど、我は心に在る同じ文字を讀むべし。さりとて彼のために恐るゝを要せず。我は天の報いに關渉もせざるべく、又人間の法律に彼を渡すこともせざるべし。又彼の生命を奪はんともせねば、たとひ名譽の人たりとも。彼の名譽を落さんともせざるべし。彼をして生きしめよ。隱すならば外見にては隱さしめよ、但我物たるには障りなし』希士帖は之を聞きて、心亂れ色蒼ざめ『御身の行ひは惠みに似たり。然れど言は御身を恐怖の化身と言ひ顯はすぞかし』と言へば『御身は一たび我妻たりき。今は一事を御身に命ず。御身は情夫の秘密を保てり。又我秘密をも保て。此地にて我を知れる者一人もなし。何人にも御身が曾て我を夫と呼びしと告ぐる勿れ。此の邊僻にて我は我が幕屋を樹てん。他の所にては我は全く人事に無關係の流寓者なるに、此所にては一人の女、一人の男、一人の小兒ありて、其れが我と密接の關係あることを知りたればなり。愛と憎と正と邪とを問ふことかは。御身と御身の男とは我物なり。我は御身と彼の在る所に己が家を立てん。然れど我を人に知らしむる勿れ』希士帖は此の戒めの意味を知り難ね、『御身は何故之を願ひ玉ふか、何ぞ自ら名告り出で、我を立どころに除かざる』と問へば『不貞の女の夫たる者が受くる不名譽を受くるを欲せざればなり。知られずして終るが我が願ひなり。されば御身の夫は既に死たる者、音づれなき者としたるまゝにてあれ。言にても合圖にても顏色にても我を夫なりと見せしむべからず。特に御身の情夫に我を知らしむべからず。之にて御身が我を失敗せしめば、彼の名譽も地位も生命も我が手にあり。心せよ』希士帖は諾ひ、醫士の迫るにまかせて神に誓ひをなしぬ。老日、知輪沒は『今

は別れん。御身はまた嬰兒と緋文字をのみ友とすべし。御身は夜も惡夢に歷はれずや』と言ふを希士帖は其の目を見て『何故笑ひ玉ふか。御身は森に出沒する黑人の如きか。我を惑はせて我が靈魂を亡ぼすべき誓を立てしめしなるか』と怪しめば、老人は再び笑みつゝ、『否御身の靈魂に非ず、御身のにはあらず』と答へぬ。

第四回　針仕事

さて希士帖弗蘭も滿期となりて獄を出で、婆婆の光を仰ぐ身とはなりけるが、其の光も己れに取りては胸の文字を人々の目に示すためにのみ照るかとばかり思はれけり。獄を出で行く時は後より踵き來る人々も無かりしかど、先に群衆の前に恥を露したる時よりも、尙つらく覺えしならん。彼の恥露しの時には、心を態と石の如くしたる上に、希士帖は根が不負魂の女なりければ、勝ち誇つて其の場を過ごしたり。然かのみならず其れは一生に唯だ一度の事。希士帖は其れまで養ひ來りし根氣を精一杯に引搾つて其れを忍び通したるなり。且又法律にて定められたる事にもありければ、かた〳〵忍び易かりしが、今放免されて唯だ獨り獄を出て行けば、之より又平常の日を送らざるを得ず、されば又平常の鎭まれる心にて恥をも忍ばざるを得ず、其れも一日や二日や一月や一年のことならず、いつまでも同じ恥をいつまでも同じ樣に忍び行かざるべからず。年の重なるにつれて辛さはます〳〵加はり、說敎家や君子たちは希士帖を指しては、女の弱きと罪念との生ける見本と稱へ、若者や操ある人を敎ふるためには、弗蘭を見よやと謂ふなるべく、墓に入りてまでも此の汚名は留まるべし。

勃頓殖民地は至て邊僻の所なりければ、希士帖もし此所を脫れて故鄕に歸るか、又は歐羅巴の何地へかへ渡り行きて、這度の事を知らぬ顏に過さんとせば容易く之をなし得べく、或は林の中の途を辿りて、勃頓のやうなる法律なき他の殖民地に走り行かば、其れも出來べかりしなり。然るに然ることをせず、罪を犯せし所に留りて、

いつまでも生恥をさらせしは訝かしく思はるゝならんが、然れど人は何等か大事件の起りたる土地には、心何となくあこがれて踟躕低徊去り難く覺ゆるものなり。其の事件が悲きことなれば尚ほ〳〵去り難し。希士帖の罪と恥とは希士帖を其の地に縛り着くる根にして、此の面白からぬ土地を希士帖に取りての一生涯の住所となし了り、懷かしき故郷も之に比ぶれば尚ほ心を引くに足らぬ思ひせられたり。

今一つ希士帖弗爾此地を去り難く思ひし故は、此には一人の人の居を思ひてなり。其の人と己れとは此世にて許されざる關係を結び、之がため世の末の神の審判のときには、二人共に審判かれて、共に限りなく罰せらるべきものなるに、其人此に在り、心を引き止められしも無理ならず。希士帖は物に觸れ事に接しては此の人と己れの關係を思ひ出でんとするを、押へつ殺しつして思はじとすれど、尚ほ穴より出づる蛇の如く、心の中に此の思ひの蜒くり出でしぞ是非なかりける。希士帖終に思ふやう、此地は我が罪を犯せし所なれば、又我が此世の罰を受くる所ならざるべからず。かくて日毎に受くる恥は我が靈を清め、此の忍耐に由て（此所適當の譯字なきを憾む忍耐の原語はマートルダム）我を聖徒らしくなすべしと。希士帖が斯く思ひしは、半ば道理にして半ば自ら欺くものにてありき。

斯くて希士帖弗爾は土地を脱れざりき。町の外れ海近き濱邊、他の人家とは懸け離れて小さく苫き成したる藁小屋あり、もと或る移住者の建てしものなれど、四邊の土地瘠せて耕作に適せぬより、今は棄てられて荒れ居たり、西の方は小さき入海にして、其の對ふには木にて蔽はれし岡あり、家の附近には灌木繁り居れど、家を隱すまでには至らず、宛から此所に隱さんとするも得ざるもの、又隱すべからざるものあるぞと言はぬばかりに見えたり。此の小さくわびしき住居をば、希士帖程よく手に入れ、身は尚ほ官の監視中にあれば、その準允をも得つ、嬰兒を携へて之に入りぬ、不思議の陰影は此所にも忽ち襲ひ來て頑是なき子供等は希士帖の常人と異れる所あるを訝かしみ、ひそかに其の起居を窮ふことも多かりき。

希士帖には此世に友もなし。ありても名告り出で得ぬ次第なれば、いとゞ淋しくはあるものゝ、尙ほ生活には差支ふることなかりき。女に取りて唯一の仕事とも言ふべき裁縫に熟練せしかば、割合に其の手並を示すべきものゝ多からぬ殖民地にても、尙ほ十分糊口の途とはなりたり。其の胸の文字も希士帖が自ら縫ひ飾りしものなり。此の地は質素の服を尊ぶにも拘はらず、尙希士帖の手練を要することなかりしにあらず。其の時代は凡て手數のかゝりたるものを好む世なりしかば、清教徒等といへども又此の氣風を受け、公の式、例へば牧師の按手禮、官吏の任職式の如きは、成るべく之を盛んに嚴かにして新政府の威嚴を民に示さんとしたり。されば服裝もなか〳〵奢りたりしなり。葬式用の裝束も又しば〳〵希士帖の手を要し、嬰兒服もまた其の一つなりき。其の頃は嬰兒の服は官より給されしなり。

幾程もなく希士帖の仕立物は流行物となりぬ。不幸の女を憐んでなるか、或は好奇心よりして此の女の手に成る物を喜んでなるか、或は其他に何等かの善き事情ありてなるか、其れとも實際に此の女に他の人の出來ぬ能力ありてなるか、其は何れにせよ兎に角希士帖は暫も針置く暇なきまでとなり、此の罪深き女の仕立物を晴れの儀式に着くることは、一種の虛榮とは成り行きぬ。希士帖の仕立てし物は、斯くて政府の官服にも現はるれば、軍人の肩懸にも見られ、牧師等の掛紐にも、子供等の帽子にも、將た死人の棺にも出で來たりたり。然れど唯だ一つ花嫁の花の顏覆ふべき白復面を、希士帖の手を煩はして縫箔せしてふことは絶えて聞かざりし所なり。希士帖は唯だ口を糊りて滿足したり、己れの衣服には至て粗末の品にして地味なる物を用ひ彼の緋文字は唯だ一の飾りなりき。嬰兒は全く之と異りて最も華美に裝はれ、早くも人目を惹くの美くしきを備へたり。嬰兒の仕着せに奢る外、希士帖は儲くる所の金を慈善の途に費し、己れよりも不幸の輕き者共に施せしが、恩知らぬ者共は却て希士帖に仇を返すこともありき。又時間をかけては粗末の衣を仕立てゝ、貧しき者に與へなどしたり、斯かることにて其の罪の懺悔せん心なり。實に希士帖

は針仕事に一心不亂なりき。これ又其のせめてもの心遣なりき。希士帖は元來思ひ切つて美華なる物を好む質なり。されば、自ら針仕事に手並を示して此の情を滿足せしめたり。かゝることは女には有り勝ちなり。かくて希士帖は餘の慰み事をば凡て罪として遠けぬ。

希士帖弗爾も今は世界に用ある身とはなりぬ。とはいへ世間と交際して見れば、己れは全く世間より閉ぢ出され居るを感せざるを得ざりき。手樣口樣何にても自分は人間外の物として取り扱はれ、道德世界よりは全く逐ひ出され居たり。然も希士帖は全を之を離るゝこと能はずして其の戸の外に立ち、宛から幽靈の我家に歸り來れるにも似たりけり。もはや我が其所に在ることを人に知らせも得せず、團欒の喜びに和して笑ひも出來ず、一家の悲みに同して泣かれもせず、若し我が心を言ひ顯はしもせば、却て恐ろしがらせ激しく厭がらするのみ、何方に向きても意地惡き辱めばかり、賤しき者には施しをすれど、却つて差し出す我手を嚙まれ、尊き女たちの門に職業の用向きにて出入すれば、苦々しき事を言はれて胸を刺さる。然も希士帖は善く忍びたり。紅の色その白き頰に衝き上りても彼は之をまた胸の中に押し沈め、絶えて受け答へなどなさゞりき。

裁判所の宣告は眞に思ひ付き善かりしものにて、希士帖に取りて何時も利目あるものなりければ、之がために絶え間なく苦まざるを得ず。牧師たち途にて會へば、希士帖に勸めをなし之がため意地惡き群衆集り來る。萬民の父なる神の笑顏拜せんと日曜に敎會に入れば、己れの事が說敎の題として取られ居れることも多し。子供等は父母より朦氣に學びて、此の町を物言はで忍びやかに歩み、一人の幼兒の外には何人とも相伴はざる女には、何等か恐ろしき物のあることを知りしかば、希士帖をやり過ごして、遠き後より罵り叫ぶ。子供等自分にては深く考へて言ふにもあらねど其の聲は意味ありて言ふ大人の言と一樣に恐ろしく希士帖の耳を貫けり。希士帖の恥は到る所に言ひ弘められて知られぬ隈もなき如し、尙其れのみならず知らぬ

他國より來る人に緋文字を訝り見らるゝ苦しさは又格別なりき。此を以て彼は手にて此の徽章を隱さんとしては辛うじて思ひ止まること屢次なりき。此の外又一對の見知れる目に見らるゝ苦しさよ。其の冷かにして射る如きは殆ど耐へ難く思はしむ。あゝ凡ての眼は悉く己が胸に注ぐ。其の胸は日を經るに從つて感じ鈍くならざるなり。否ます〳〵痛みを增し來れり。されど又幾日目に一度か、幾月目に一度かは、希士帖また己が胸の徽號に注ぐ一對の眼を見て、其の刹那己が苦みは分たれて輕くなりし如く覺ゆれど、彼は直ちに此の心を突き退けて、却つて苦さを加ふるを覺えたり。これ何故ぞ。希士帖は其の間に新たに罪を重ぬればなり。あゝ罪を犯す者は唯希士帖のみなるか。

希希士は己が受くる苦しみのため、心も少しは以前と異れる思ひを抱くに至れり、唯一人淋しけに彼方此方に歩みては、緋文字に由て今まで思ひ付かざりしことを敎へらゝる心地したり。何れを何ぞと言ふに、他人の心にも隱れたる罪の潛めるを思ふことなり。希士帖は之を信ぜざらんと欲すれども得ざりき。希士帖は之を思ふ每に身震ひしぬ。是れ惡天使の叫きか、其れとも眞と信ずべきものか。あゝ今まで是れほど恐ろしき思ひせしことはなかりしなり。實際人々を見て、此の人も亦罪を包むかと思ひやり、希士帖は心も亂れ戰きぬ。牧師及高官等は信仰あり德ある人の見本にして人々が尊敬を盡したるものなれど、希士帖は此の人等に對しても時として彼等の心の罪を思ひやりぬ。或は又信仰厚き婦人ありて、人々の噂によれば一生涯心の中に清く冷き雪を抱くとのことなりしも、希士帖は此婦人に出會ひてさへ同じ樣に思ひたり。あゝ緋文字を呪符として用ふる惡魔の手をば老いたるも若きも一人として脫るゝ能はず、此の憐れむべき罪人希士帖をして世に敬ふべきものは一人もなしと思はしむるにや。罪を犯す者は斯くの如く人を信ぜざるに至るが常なり。希士帖も然かりしが、然かも自ら勉めて己れほど罪深き者は他になしと信ぜんとせしは、まだ彼は全く墮落し果てぬ證據なりしなり。

人知の進まぬ世なりしかば、人々は其の想像を逞うして恐ろしき噂せり。希士帖の徽章は唯だ此世の染壺より得たる緋の布のみにあらず、地獄の火にて赤く燒かれしものなれば、希士帖が夜間出で歩く時には、其の胸に燃えて見らると言ひ囃しぬ。此の噂には道理のあるものゝ如く、希士帖の胸は實に此の徽章に由て深く爛らされたり。

第五回　眞珠

さて幼兒の事は是まで殆ど記す所なかりしが、此の幼兒こそ神の不可思議なる攝理に由て、罪深き情慾の中より出で來りし可憐の花又不死の花なりしなれ。悲みに沈める希士帖、幼兒の生ひ立ち行く樣、いや輝き增さる美くしさ、全身に溢るゝ悧潑を見ては、唯だ奇異の思ひをするのみ。希士帖は之を眞珠子と名づけぬ。眞珠の如く靜かにして白く熱なき光りを帶ぶるといふ意味を以て名づけしにはあらで、幼兒は大いなる寶、希士帖が凡ての所有を盡くして買ひしもの、母の唯一の財産なりければ、斯くは名づけしなり。人は希士帖の罪を露はさんとて之に緋文字を着けぬ。之ありては希士帖と同樣の罪人ならぬ限り、何人も同情を寄する能はざるなり。神は罪の結ぶ果として希士帖に可憐の幼兒を與へぬ。此の幼兒も亦緋文字を着けられし胸に抱かれて、其の母をいつまでも人間の世界に引き止め、斯くて終には天にて善なる魂たらしめんとす。されど希士帖は斯く思ひて强く希望を抱くこと能はざりき。我が行ひの惡なりしことを知れば、其の成る果の善ならんとは信ずる能はざりしなり。日ましに大きくなり行く幼兒の姿を眺め、其の中に暗く荒き所の出で來りはせぬかと、絶へず戰々兢々たる有樣なりき。

其の形を以て言はゞ、眞珠子は確に無瑾の兒なりき。其の圓滿なる貌、其の生きゝしたること、其の手足の運動の活潑なること、當にエデンの園に生れ出でゝ、人類の始祖が逐ひ出だされたる後の其の園にて、天の使等の玩具とさるべき價ありた

り。生れついての愛嬌あるが上に、其の衣服も奢れるにあらねど人目には打ち上りて見られたり。其れも理り母が得意の意匠を凝らして仕立てしものなればなり。されば之を纏ふときには、衣服の華美なる中より幼兒の美くしさ益す強く照り出でゝ、室内ために輝くほどなりき。されど此兒は唯だ斯く美くしき一方の兒に非ず。其の花の如き衣は又いたく破れ汚れ居れり。此兒は幾人もの子供を合せて出來上りたらんが如く、野の花に似たる賤夫の子の美くしさもあれば、雲の上人の姫君の華やかさもあり、何よりも情熱は此の兒の中に鮮かに其の色を留め、如何なる變化ありても之のみは少しも褪せ行かず、否此の色にして褪せ行かば早眞珠子の眞珠子たる所は無くなるべしと思はしめたり。

此の外面の容貌は善くも幼兒の心の中を表はせり。幼兒の性質は奥行も深く色取りも多かりしかど、唯だ此の世に適合る性質を缺き居たり。彼は此世の法則にあてはまり行くこと出來ざりき。其の生れしが大法を破つてなりければにや、其の結果たる幼兒は美くしく冴え〳〵しかりしにせよ凡て亂調子なりき。希士帖は幼兒の氣質を見てはこの兒の世に出で來らんとしつゝありし間に、希士帖自らが在りし樣を思ひ出づるを禁じ能はざりき。母の情に熱したる心は、媒介となりて幼兒の生れぬ先より之に汚れの色を帶びたる道德を移したり。何よりも其の頃に於ける希士帖の精神の戰爭は、明かに眞珠子の性質に再現し、荒々しき事、自棄なること、人を人とも思はぬ事、輕卒なること、乃至打ち沈みて全く絶望せる風までも、希士帖は明かに幼兒の中に之を認めざるを得ざりき。

當時家庭の敎育は頗ぶる嚴しきものなりき。痛く叱り懲らし、しば〳〵笞まで的つるを常とせしが、之は唯だ過ちを罰するためにするのみならず、小兒の德の成長奬勵のためにせり。されど希士帖弗茵は唯だ一人の此の兒の母なれば、あまり嚴重に躾け過ぎる憂はなかりしが、己れの過ちと不幸とを思ひては、我が支配の下に在る幼兒を敎ふるに早くより柔しさと嚴しさを併せ用ゐんとしたり。されど此は希士帖

に取りて全く出來ざることのやうに思はれぬ。脅して見ても笑顔を見せても、何れも何の利目のあらぬことを見て、希士帖は終に全く打ち棄てゝ幼兒自らのなすまゝに任するに如かずと思ひたり。身体を抑ふることは其の間は効能ありしが、其他の躾けは其の場合に心の向き方一つに由て功あると無きとありき。希士帖は次第に幼兒が母に向ひて意地張り又は強請り又は訴ふる心を其の一種特別の目樣に現はさんとするを見て取るに至りぬ。其の目樣は眞に賢く何とも言へぬ趣あり、又剛情にして時には意地惡き目樣なりしが、兎に角常に精神を客氣もなく溢らせたるものにて、希士帖は斯かる時には我兒の人間なるやを疑ふ位なりき。然り幼兒は寧ろ風の如き精靈の如く見え、暫く茅屋の中にて面白く戯れ遊ふ後、忽然一聲高く笑つて飛び去るにはあらぬかと思はしめたり。何時にても此の奇妙なる目樣が幼兒の眼に現はるゝや、幼兒はもはや人間界とは懸け離れて、宛ら空中に羽ばたき廻り、去往の定まらぬ光の如く消え去らんかとばかり見えたり。希士帖は之を見ては我兒に駈け寄りて之を捕へ、我胸に緊乎と搔い抱きて熱き接吻をなしぬ。是は我が愛情の溢れ出づるがために爲すに非ず、眞珠子は眞に肉あり血あるもの決して影にはあらずと云ふ事を確かめんがために爲すと言て可なりしなり。されど眞珠子捕へられて高く笑へば、其の聲は無量に樂しげに且音樂の如く響くと雖も、尙々母をして我兒の眞人間なるやを疑はしめたり。

希士帖は之に由て時々せぐり來る涙を抑へかぬれば、眞珠子は之を面白からず思ひて己が拳を握り緊め、其の小さき身を左も不滿足げに硬ばらせたるが如し。或は却て人間の悲みてふことを知らず又之を悲しむこと能はざるものゝ如く、幼兒は忽ち笑ひ出で前よりも高く笑ふに至ることも少からざりしなるべし。稀には惱みを以て怒り出で片言雜りに母を愛する心を訴へ、母の泣き止まんことを願ふ意を示すこともありしならん。されど希士帖は此の一時の優しさに心を許すこと能はざりき。忽ちに消えて跡なくなればなり。是等の事を思ひ回らせて母は魂を失ひたる人の如く

感じたり。彼が唯だ一つの眞の慰めは幼兒の熟睡の時にぞありける。其の時彼は獨り自ら顧み、靜に悲しく又奥ゆかしき愉快を味ひ、かくて幼兒が目を開き强ねたる色を之に浮べて輝く瞳にて母を打ち守る時にまで及ぶなり。

第六回　誰が子

月日に關守なく何時の間にか眞珠子は子供同士の交際の出來べき齡に達しぬ。若し大勢の子供等の罵り笑ふ聲に雜りて、眞珠子の凉しく樂しげなる聲の聞ゆることもありせば、母は如何にか嬉しかりしならんを、あゝ然ることは夢にも在り得ず、眞珠子は生れながらにして子供の世界の除け物なりき。惡の小鬼、罪の子たるものなれば、素性正しき子供等と肩を比ぶるの權利なかりしなり。幼兒自らもおのづと我は唯だ獨りにて在るもの他人とは全く異れる世界に住むものと悟れる如き樣明かに見えにける。希士帖は獄を出でし日より、未だ幼兒と共ならずして家を出で行きしことあらず。初め赤兒として母の懷にありし眞珠子は、今は母の傍に沿ひ、母に手を牽かれ、母の一歩を運ばす間に己れは數歩を刻みて伴ひ行きぬ。草茂る街道や家の門口にて子供等が種々の遊戯して騷げるを見れども、眞珠子は彼等と親しまんともせず、たまさか言を懸けられても之に答ふることをせず、子供等己が周圍に集り來るときには、眞珠子は怒りて石を拾ひ、金切聲にて叫びつゝ彼等に投げ着くる風なりき。母は之を見て常に身震ひしぬ。

此は何故なりしかと云ふに、少しも人を赦さぬ淸教徒の血統承けし子供等は、希士帖母子の人とは異れる所あるを朦げに悟り、心の中に母子を賤しめ折々は之を口にも出せしかば、眞珠子も之を感付き、小さき胸に溢るゝ憎しみを以て彼等に報いしなり。希士帖は眞珠子の此の過激なる有樣を見て、其の中に眞面目に熱する心のあるを愛でもせしが、又己れが欠點の我子に繼がれたるを見ては色を靑くしたり。されど家の中にては眞珠子なか〳〵多くの友を有したり。幼く想像强き心に取りて

は様々の物みな友となり、棒片も繿褸切も花英も其れ〳〵眞珠子が心中の芝居の役を勤め、己れが一色の幼き聲は様々の人物の擬聲色となりぬ。古く煤けて嚴めしき松木、吹く風に呻るものあれば、之は容易く清教徒の父老に化し、庭に生ふる醜き草は其の子供等となり、眞珠子は容赦なく之を撲ち之を根こぎにして嬉べり。今活潑に跳ね廻るかと思へば、忽然として沈むが如く靜まるが眞珠子の常なりき。宛ら北光の乍ち現れて乍ち消ゆるにも似たりけり。人間の遊び友達なかりしかば、眞珠子はます〳〵想像に長じて幻の遊び相手を造りしが、其の遊び相手には友人といふは一人も出て來らず、敵の軍勢攻め來りて眞珠子は常に之と戰ふが如く見えぬ。斯かる幼き者にして既に世界を敵と見なし、終始之と抗爭する力を養ふの情の激しきを見るにつけ、母は非常に悲しく思ひたり。

眞珠子を打ち見やりて希士帖弗蘭は屢々縫物もつ手を膝に置き、隱しも果せで叫び出づることあり。『あゝ天の神よ、我が此の世に生じたる此のものは抑も何物なるや』

其の聲は半ば語をなし半ば呻吟なり。眞珠子は之を聞きつけて、其の生き〳〵して美くしく小さなる顏を母に向け、さも悧發らしく打ち笑みて復た遊びに取りかゝりたり。

今一つ此兒の獨特の仕草に付て言ひ遺したることこそあれ。眞珠子が此の世にて始めて見覺えたるは、母の笑顏に非ず。凡ての嬰兒は何よりも先に母の笑顏を見知り、己が口元にまた微けき笑を寄せて之に報ゆれど眞珠子は然らざりき。彼が何よりも先に知りしは母の胸の緋文字なり。或日の事、母は搖籃の上に身を差し出し居りしが、幼兒は一心に輝ける緋文字を見入り、やがて小さき手を擧げて之を握り、年よりは頗る大人びたる笑みを浮べたり。希士帖は息も塞がる心地し、覺えず徽章を攫つて之を引放せしが、非常なる痛傷を幼兒の手にて負はされし心地せり。然るに幼兒の方は母の悶えし容子を可笑しく思ひ、再び母野眼を見入りて打ち笑みたり。其の時より後は希士帖は幼兒の眠れる間の外は暫くも心の安けきことなかりき。幼兒

は幾週間か全く忘れしかの如く母の緋文字に眼を注がで過せども、不圖笑みて何とも言へぬ色とを浮べて之を見入ることあり、こは實に死の打擊の襲ふが如く思はれき。

或時希士帖は我兒の眼を見入り、多くの母の樂しむが如く、幼兒の眼に在る己が肖顔を眺め居りしに、其の刹那眞珠子の眼には前に述べたる閃めき出で來りぬ。之と共に希士帖は思はずも眞珠子の眼の黑き鏡には、己が肖像ならで却て他の一人の顔の映れるを認めし心地せり。其の顔は意地惡くして惡さげに笑めり。されど又希士帖の善く〳〵知れる顔に似ても居たり。此の善く知れる顔は餘り多く笑みこそせね。其の中に惡さげなる所とてはなかりしものを。あゝ惡靈の幼兒に憑きて其れが時々覗き出でゝは嘲るにやと思はれ、其後は希士帖此の妄想のため苦しむこと屢次なりき。

眞珠子今は走り廻るまでに成長せしが、或る夏の日の午後、彼は野の花を一握り折り來り、室內を踊り廻りては花を一つづゝ母の胸に投げ、緋文字を目がけて打ち着けたり。希士帖は手を組み合はせて胸を庇はんとせしが、我が罰も此の無量の苦痛に由りて我ために最も益あるものとなるべしと思ひかへし、死の如く靑くなり、悲しげに眞珠子の目を見て端坐し居れば、花の礫はます〳〵飛び、いつも緋文字を打ち。終に花も盡きければ幼兒は靜かに立ちしまゝ希士帖を見やりしが、彼の目よりは此の時また例の肖像のそぎ出で居しやう思はれたり。

『眞珠子、御身は何者ぞ』と母言へば『我は母上の小さき眞珠子なり』と幼兒は答へしが、答へて打ち笑ひさま、其所等を踊り廻り、宛から小さき精靈のごとく煙突より飛び去りもせんかと思はるゝばかり、輕やかに樂しげなり。母は唯だ苟且に問ひたるに非ず。眞面目の心もありたるなり。其は何故ぞ。眞珠子は驚くべく悧發なりければ、希士帖は眞珠子が自ら其の生れし秘密を知り、今之を言ひ出でもせぬかと疑へるなり。幼兒は尙踊りつゝ『然り我は小さき眞珠子なり』と繰り返せしに『御身は

我兒に非ず、御身は我れの眞珠子に非ず』と母は半ば戯れて言ふ。希士帖は深き苦痛の中にも屢斯かる戯れの心起ることありき。『されば我に語れ。御身は何ものぞ。誰が御身を此所へは遣りし』と續くれば、幼兒は『我に告げ玉へ母上』と眞面目になりて希士帖に寄り添ひ、母の膝に身を押し着けつゝ、『母上こそ我に告げ玉へ』と言ふ。希士帖は『御身の天の父御身を遣り玉へり』と答へはせしが、其の語は淀みありしにぞ、鋭き幼兒は之を看のがさず、其の細き指にて緋文字を爪繰りつゝ、『天の父我を遣り玉はず、我には天の父あることなし』と判然と叫び出でぬ。母は呻きも出つべきを押へて『止めよ眞珠子、御身さる事を言ふべからず。天の父は凡ての人を此の世に遣り玉へり。我をさへも遣り玉へり。御身の母をさへも。況て御身をや。若し然らずば御身そも何處より來りしぞ』と言へば『我に告げ玉へ。我に告げ玉へ、之を我に告げざるべからざるは母上なるに』と幼兒はもはや眞面目ならず笑つて床を跳ね廻りつゝ叫びぬ。

然れど希士帖は此の問を解き明さゞりき。自らさへ面白からぬ八幡の藪中に在る心地せるなり。町の人々は徒らに幼兒の父を探し、眞珠子の性質の常人と異れる所あるを見ては、彼は惡魔の胤なりなど語り合ふを聞き、希士帖は笑みもされねば戰きもされぬ心にて之を耳に藏め居たればなり。

第七回　總督の館

希士帖弗蘭は或日伯林俄の館を訪ひぬ。伯林俄は先頃の選擧にて政府最高の地位よりは退きしも、其の勢力は今も變らず、人民の首の地位に立ち居たり、希士帖が此日訪ひ行きしは豫て總督より誂へられ居りし手套をわたさんためなりしも、今一つ此外の目的ありてなり。町の重立てる人々は宗教を嚴重にし政府の威嚴を張らんとして眞珠子を希士帖の手より取り上げんとせり。彼等謂へらく、眞珠子は父の分ら

ぬ子、惡魔の落胤なり、されば希士帖の靈魂のため斯かる者を其の手より引き離し、

其の靈魂の進歩の障碍を除かざるべからず。然かのみならず眞珠子のためより考ふるも、眞珠子もし善き人間として生ひ立つこと出來るものとすれば、之を希士帖如き母の手に任せて育つるよりも今少しく善き人に托するに如かずと。而して此の計劃を賛成し奬勵したる人の中に總督伯林俄もありと聞きしかば、希士帖は此日此の高貴にして勢力ある人の門を訪ひしなり。實に其の時代はいと小さき事件も公の議に上り政治家の頭を惱ます風なりし也。

希士帖は心配に充たされつゝも、又一方には己れに十分の權利あることを感じながら、我家を出でゝ總督邸へと急ぎぬ。眞珠子は勿論その伴なりき、眞珠子今は母に伴なはれて大分の途程をも歩み得る年頃とはなりぬ。然れど氣の向きやうにて、時には母に抱かれて歩まんことを乞ひしが、其れも暫し、又下さんことを求めて、母の行く前に途を跳ね躍り行きけり。眞珠子は眞に美くしかりき。其の美くしさは深くして生々せり。顔は冴え〳〵と輝き、目には無量の深さと熱さと籠り、髪はゝや黑みかゝれり、全身に熱火ありて、眞に情の燃えたる時の產物と見られたり。母は己が華美を好む心遣りにとて飽くまで派手に眞珠子を裝ひ、紅の天鵞絨の下着の、金糸にて非常に賑かに縫箔したるを着せしかば、花の如き顔も之に反襯して白く見え、善くも眞珠子の美くしさと似合ひ、眞珠子は宛から輝ける一點の火の地上にてちらつくが如く見えたり。

然れど眞珠子の此の裝ひを見ては、如何にしても希士帖弗蘭の胸の徽章を思ひ出さゞるを得ぬやうになるなり。實に眞珠子の裝ひは亦別種の緋文字なりき。生きたる緋文字なりき。然り希士帖自らさへ我が愛する者(眞珠子)と罪苦みの目標(緋文字)とは同じ樣なる物なりと思ひて、考へに打ち沈むこと多かりしなり。されど實を言は眞珠子は希士帖の愛する者にして亦罪と苦みの標にてもありしなり。かゝればこそ希士帖は眞珠子の姿に緋文字の意義をも現はさしめんとて勉めしなり。

母子が町の外れに來るや、其所に遊び居りし子供等は遊びを止めて二人を見上げ、

少しの恐れ氣もなく『彼所に緋文字の女行けり。其の傍には緋文字のやうなるもの走れり。いざ來よ、共に泥を投げかけん』と言ひ合へり。恐れ知らぬ眞珠子は顏を蹙めて立ち止まり、手樣にて彼等を脅しさま、不意に敵を目がけて突貫せしかば、流石の灣泊者ども、皆な逃げ出づるを、眞珠子は激しく氣味惡き聲搾り立てつゝ追ひ行き、彼等の遠きを見て靜かに母の許に歸り來り、母を見上げて一笑しぬ。

やがて總督伯林俄の邸へは着けり。館は大いなる木造の建物にして、外面もまだ新しき色鮮かに、窓よりは人の住へる樂しき氣合流れ出で居たり、壁は美くしき土にて上塗りせられ、之に硝子の片を塗りこみありしかば、日の光にて金剛石の如く輝き、其上に神秘的の異樣なる姿を畫けり。されば甚だ賑かにして嚴重なる清教徒の支配者たる人の住居には、少しく不似合のやうに思はれたり。眞珠子は此の樂しき光景を見て喜び躍りぬ。

兩方に角の如く差し出でたる細き塔の間に弓形せる戸口あり。母子近づきて此に至り、玄關に備へられし鐵槌にて音なへば、青色の上衣着たる男出て來りぬ。青色の上衣は其の頃の僕の服たりしが、特に此の男は總督の奴隷なりき。彼はもと自由の英人なれども今は七年間の奴隷となり、其の間は全く主人の財產として取り扱はれ、身の賣買まで主人の權內にありしなり、『總督閣下は在宅にか』と希希士問へば、『然り』と答へて目を見張りて緋文字を見入りぬ。彼は此の國にて新參者なりしなり。『然り閣下は在宅なれど今は牧師先生等一兩人と醫師と面談中なれば、御身は今閣下に會見れまじ』と言ふを、希希士は『然れど我は上り行かん』と言ふにぞ、奴隷は此の女の果斷の樣と胸に輝く徽章とにて、此は土地にて由緒ある貴女ならんと推し、強て爭ふことなかりき。

母子は導かれて入口の廣き客間に入れり。元來此の館は伯林俄が故國の豪族の家に模して設計したるものなれば、萬事なか〳〵數奇を盡せり。この客間は屋根まで打ち拔きの室にして、周圍の何れの間にも通じ、二つの明り取りと二つの窓より光を

容れ、窓の前には座席を備へて、大冊の文學書を置けり。室内の什器としては其の頃の嗜好に適したる樫木製の椅子と卓子と、又總督が故郷より持ち來れる手道具とあり。卓子の上には盞盃置かれたり。壁には伯林俄家代々の祖先の肖像幷び懸れるが、衣冠東帯正しきもあれば、鎧きたるもあり、何れも嚴しき面して、宛ら子孫の動作を批評せんために睨まへ居る如かりき。又客間を仕切れる嵌板の中ごろに鎖帷子一着かけられ居たり。されど此は古物には非ず、總督が此國に來るとき、堪能の武器工に命じて造らせしものなり。此の鎖帷子と共に鋼鐵の兜、腹卷、喉鎧、籠手あり、脛當と劍も吊されたり。此の武器は唯だ人見せのためのみならず、觀兵式の時、演習の時には總督の實際着用するものにて、ビーコト戰爭の際には實に聯隊の先頭に輝きたるものなり。伯林俄は自ら法律家の一人として居ると雖も、新造國に於ける必要は彼をして政治家統治者たらしむると共に又一個の軍人たらしめたり。眞珠子は此の輝きわたる武器を見て大いに喜び、胸鎧の研ぎ磨きたる鏡を暫し見入りたる後、『母上、此所に母上在す、見玉へ〳〵』と叫ぶにぞ希士帖も愛想よく打ち見やれば、凹面の鏡には緋文字著しく大きく且つ華やかに映りて、己れは其の背後に隱され了れる如く見られたり、眞珠子はまた仰いで兜にうつれる同樣の影を指さし、母を見やりてさも怜しげに打ち笑みぬ。其の童氣なき仕打ちは復た鏡に映りしが、希士帖には甚だ異樣に感ぜられ、是れ果して我子の影なりや、否々、眞珠子の形を取らんと勉むる鬼靈の影にこそとまで思ひなしぬ。

眞珠子を引き立て丶『來よ眞珠子、來て此の美くしき庭を見よ、花もあらん、我等が林にて見るより美くしきが』と言へば眞珠子は窓に走せ寄つて、庭の方を打ち眺めぬ。庭は一面に短く刈れる草にて蔽はれ、其の極はまだ出來上らぬ灌木の藪なり。されど如何に庭を數奇に造らんとしても、此の新世界にては故國の邸の如く風流にのみ凝ることの出來ぬものから、甘藍も植ゑられ居れば冬瓜も蔓れり。然れどまた薔薇の藪もあり幾株の林檎もありき。

眞珠子は赤薔薇の花を求めて泣き出だし、中々靜まるべくも見えぬにぞ、母は心を籠めて『靜かにせよ我が子、泣きな〳〵、人の聲聞ゆ、總督來玉へるなり。紳士等も共に在り』と言ふ。實に庭の大通りの彼方より一群の人々家の方に來つゝあり。眞珠子は母の和むるをば聞かばこそ、一聲消魂ましく叫びを揚げ、而して後靜かになりぬ。母の心に從ひしに非ず、出て來れる人々の樣子知りたさに心の向き變りしなり

第八回　幼兒と牧師

總督伯林俄は弛やかなる外被と安樂帽子といふ老紳士の室內扮裝にて眞先に出で來れり。其の服裝といひ又その容貌といひ、四圍に盡したる贅澤とは鈎り合はぬ心地せしむれど、米國の先祖等たりとて、人生を以て試驗と戰爭のみと思ひ取らば、取り得べき幸福奢侈をも、全く見向きもせざりしといふものに非ず。然ることは決して敎へられざりしなり。今しも總督の背後より來れるは牧師維遜氏にて、其の髯は雪よりも白きことなるが、此の新英洲の風土は梨や桃や葡萄の栽培に適し、必ず善く實らんと敎へしは實に此の人なりしなり。彼は長く英國々敎會の万事福々しき中に養はれしかば、世の幸福てふことをばよく味ひ知れり。講壇の上や人の大罪を責むる場合に於てこそ嚴しくはあれ、一個人としては刧々慈悲深く、其の時代の牧師の中に一際異れる人なりき。總督と維遜氏との後より來りしは、彼の希士帖の恥露しの時、人蔭より一寸現はれし青年牧師亞撒、田墨底と熟練の醫師　老日知輪沒　となり。醫師ははや二三年此の町に住ひ居れるが、牧師田墨底の主治醫となり且つ親友ともなれり。同牧師は近來その牧會の事業にあまり過勞するため、いたく健康を損ひ居れり。

總督は人々に先だち進み、階段を一つ二つ登つて大窓の板戸を開きしに、其所には眞珠子ありき。希士帖は幕の陰になりて半ば隱れ居たり。伯林俄は驚いて『此は何

物ならん。我れ若き時、ゼームス王陛下の宮廷の假裝に許し入れらるゝを無上の愉快と思ひしが、其の時には斯かる裝ひの子供多勢出でゝ、之は遊戯長の子供と呼ばれたり。されど其の後は絶えて斯かる華美の子を見ず。其は兎に角、斯かる客人如何にして我が客間には入り來りけん』と言へば、維遜も叫ぶやう『實に〳〵。此は緋色の羽毛の小鳥なり。余は入り日が窓の幾色にも彩れる硝子より差しこみて、床の上は金や紅の形を現はすとき。斯かる物を見たりしが、其は故國にての事なりき。さて小さき者よ。御身の母は何に苦みて御身を斯かる異樣の風には裝ひしぞ。御身は基督教の子なるか。信仰問答を知れるや。但しは彼の頑是なき精靈の匹なるか。さる精靈ならば面白き英國には在ると言ひしも、此の國へは伴ひ來ざりし筈なるが』。問はれて緋色の影は『我は母上の子なり、名をば眞珠子と言ひて』と答ふ。『眞珠とや、寧ろ紅玉こそ善けれ、さなくば珊瑚か、さなくば赤薔薇にこそ。御身の色より言はゞ』と老牧師は答へ、眞珠子の頰を手の掌にて叩かんとすれど及はず『其れは兎に角御身の母は何所に在るぞ』と續け、『居たり居たり』とて總督に向ひ『此れ今我等の相談中の彼の子なり。見玉へ此所に不幸の女、希士帖弗蘭、此の子の母あり』と言へば總督は叫びて『彼を不幸の女と言ひ玉ふか。斯かる幼兒の母親ならば、必ず緋色の女たり、不品行の善き標本ならんと、見ぬ先より鑑定し得べき位なるを。其れは兎に角、彼は善き折りに來りたり。此の相談を運ばせん』と言て三人に先だちて客間に入り行き、其の嚴しき目を緋文字の主に射向けつゝ『希士帖弗蘭よ。我等は近頃御身のことに付て相談中なり、彼所に在る幼兒の如き一個の人間を、御身の如く此の世の井底に躓き落ちし者の手に委せ置きては、我等權威あり勢力ある者の責任果されしと言はれまじと評議しつゝあり。御身如何に思ふや。幼兒を御身の手より離して、衣裳も眞面目なるを着せ、嚴重に躾け、天と地との眞理を教育するやうにするは、幼兒の現世及び未來の永き幸福にあるまじきか』と言へば希士帖は胸の徽章を指さしつゝ『妾は此物より學びし所を以て眞珠子を教育し得べし』

と答ふ。『其は恥の章ならずや、幼兒を他人に委せんと我等か言ふも其の文字に現はれたる汚れを思へばなり』と總督言へば、希士帖は蒼くなり增さりつゝもいと靜かに『さは言へ此の章は妾を敎へ何時も敎ふ。其の敎は此兒を賢くし善くし得べきものなり。妾自らに取りては何の益もなけれど』と答ふ。總督は『尙よく考へ遣はさん。維遜師よ、願はくは此兒を試驗し玉はれ。此兒は同じ年頃の子供位に基督敎の敎育を受け居るや否や』

老牧師は腕附椅子に腰かけ、眞珠子を膝の間に引き寄せんとせしが、母の外には人に馴れぬ幼兒は開ける窓より逃げ出だし、上り段の上に立ちて熱帶國の鳥の將に舞ひ立たんとする如き風情なりければ、祖父じみて又非常に子供好きなる維遜はいたく打ち驚きつゝも、其の取り調べにかゝらんとし、いと嚴かに『眞珠子、御身は敎をよく〳〵守り、時に及んで御身の胸に價高き眞珠を着けずんばあるべからず。御身今我に答へ得べきか。誰が御身を造りしかを』。眞珠子今は誰が己れを造りしかをよく知れり。何となれば希士帖は心をこめて如何に幼き者も神より靈を與へられしことを敎へ置きければなり。もはや新英洲初學やウエストミンストル信仰問答の初めをば形通りにこそ無けれ十分呑みこみ居りしなり。されど剛情は左なきだに幼兒に有り勝ちなるに、特に剛情なる眞珠子のことゝて、今かくも當突の場合に答ふることを厭ひ、維遜の問に答ふることを肯かざりしが、終に己れは曾て造られしことなく、唯だ母が獄舍の前の野薔薇の藪より摘み取りたるなりと言ひ出でぬ。其の想像は窓の外の赤薔薇と此に來る途中に見し獄の前の薔薇の花とに由て喚び起されたるものなるべし。

老日、知輪沒は微笑しつゝ傍の青年牧師に呼く所ありたり、希士帖醫師を見やれば、驚く可し其の容貌はいたく變化し居れり、いつぞや獄にて會見せし時よりも更に〳〵醜くなり、顏は更に黑く姿は更にやつれ居れり。互ひに一寸目を見かはせしが、直ちに他の方に心を奪はれたり。そは何ぞ。

眞珠子の言に全く呆れて言なかりし總督は、此の時心付いて叫び出づるやう『此は怪しからぬ事なり。三歳にもなりて誰に造られしかを語り得ぬ幼兒あり。其の魂の今も後も同じく暗の中に在るは疑ひを容れず。最早詮議の要もなきに非ずや』と。希士帖は眞珠子を捉へて抱きしめ、猛しと言ふほどの面して總督に向き直りぬ。世界よりは全く棄てられ、我心を活かすものは唯だ此の寶のみなれば、全世界に敵しても爭ふの權利ありと感じ、死に至るまで防がんと心構へせり。叫んで曰く『神妾に幼兒を與へ玉へり。此は閣下等が妾より奪ひし凡ての物の代りに神の與へ玉へるものなり。彼は我樂みなり、又我が苦みなり。眞珠子は妾を世界に引き止め、眞珠子は妾を罰す。閣下見玉はずや彼は緋文字なり。唯だ愛せらるゝより外には何の能もなきものなり。されば我罪を罰するに幾萬倍の力を有ち居れり。乞ふ彼を奪ふ勿れ。妾先づ死ぬべし』牧師は言ひぬ。『哀れむべき女よ、幼兒はよく保護せらるべし。御身の保護し得るよりも善く』希士帖は殆ど泣き聲となりて『神は妾をして辛抱せしめんため彼を與へたり。妾は之を離さゞるべし』と言ひ、不圖思ひつきて、其時まで殆ど我が見向きもせざりし青年牧師田墨底の方に向ひ『我がために言ふ所あれ。閣下は我牧師なりき。我靈に付て責任を有し、他の諸閣下よりも妾を知り玉へり。妾は幼兒を失ふを欲せず。我ために言ふ所あれ。君は知り玉ふ。他の人々の缺ける同情を有し玉へば。君は知り玉ふ我心の中を。母たる者の權利を。特に其の母は幼兒と緋文字の外に何も有たぬものなれば其の權利の如何に強きかを。君之を護り玉へ。妾は幼兒を失ふを欲せず。之を護り玉へ』希士帖弗蘭は早心も常ならぬ如く見えたり。青年牧師は進み出でしが、手をば胸の上に按き居たり。精神の激動する時は斯くするが常なりき。彼の容貌は一きはやつれ疲れ、其の黑き眼には苦痛深く蟠れり。『彼の言ふことには道理あり。希士帖の言ふ所、其の感ずの所には道理あり。神は彼に幼兒を與へ、又斯かる一種特別なる幼兒の性質と要求とを知に當りて他人には有り得ざる智慧を與たり。且つ夫れ此の子と此の母との間には犯すべからざる

神聖なる關係あるに非ずや』と言ひし聲は美はしく震ひて而も力あり、客間に響き凹れる武器に鳴れり。『此は何といふ意にや。乞ふ之を明瞭に言ひ玉へ』と總督言へば、田墨底は再び『然か考へざるを得ざるに非ずや、若し然りとせずんば我等は天の父を以て罪の行を輕視する者、不潔の情と神聖なる愛とを混同するものとなし了るに非ずや。父の罪母の耻より生じたる此子は、母の心を化せんとて神の御手より出で來れり。母に取りての福祉にてもあれば、又彼の言ふ如く報いにてもあり。此の女は此の意を幼兒の衣に於て示し居れるに非ずや。幼兒を見るものは直ちに胸の赤き徽章を思ひ出だすまで强く之を示し居れるに非ずや』。維遜は此に於て叫ひぬ。『是れも善く出來たり。余は此の女は其子に付て言ひ前を造ることのみを考ふるに非ざるかを恐れたりしなり。』田墨底は續けて『決して〳〵然らず、彼は此兒の在るに由て神の爲し玉へる奇跡を認め居れりと思ふ。又此の賜ものは母の靈魂の生命を引き留め、母をして此上惡魔が引き落さんとする穴に陷らざらしめんためなり、されば一人の幼兒を打ち委され、いつも〳〵己が墮落を思ひ出でつゝも、尙之を敎育せざるべからざることは、此の女に取りて益なるべし。而して彼れもし其の子を天に行かしめ得ば、其の子は又親を天に行かしむべし。此點に於て罪ある此の母は罪ある父より幸福なり。希士帖弗爾のため、將た幼兒のため、乞ふ神が母子を置きしまゝになし置けかし』言ひ終るや『友よ、君は不思議の熱心を以て論じ玉ふかな』と老日、知輪沒は笑みつゝ言ひぬ。

維遜も田墨底の言に理あることを述べて總督の意を質せば、總督も之に感じ、希士帖に此上惡事あるまでは兎も角も今のまゝに棄て置く心となれりと答へ『さはいへ幼兒は維遜師か田墨底氏か其他の人の手にて信仰問答に由て適當に敎育せざるべからす、又時至らば組長は注意して幼兒を學校及び集會に出でしむべし』と結びぬ。

青年牧師は言終るや數歩退りて垂れ疊まりたる窓の幕陰に半ば顏を隱して立ちしが、そが上床の投影は情の激したるため震ひ居たり。眞珠子は窃に牧師に忍び倚り、

己が兩手もて牧師の手を捕へ、頰を之に摺りつけぬ。其樣如何にも優しくいぢらしかりければ、之を見て居りし希士帖は『我が眞珠子とは別人に非ざるか』と獨り語ちしが、而も幼兒の心には愛のありしことを知りたり、固より其の愛が斯くまで優しく現はるゝことは今後再び有るべしとも思はれざりき、牧師は周圍を見まはし、幼兒の頭に手を按き、暫し躊躇して後幼兒の額に接吻すれば、早眞珠子の氣は變り、打ち笑ひさま左も身輕けに彼方に踊り去りぬ。

『此兒は自ら魔法が出來るやうなり。空を飛ぶに別に魔法婆の呪ひ杖も要せぬなり』と維遜幼兒の身輕なるに呆れて言へば、老日、知輪沒も『實に奇なる兒なり。母に似たる所を見るは容易なるが、此の兒を見て其の父を推し量るは哲學者にも出來まじきか』と言ふを『斯かることを不敬なる哲學の力にて究めんとするは罪なり。寧ろ祈と斷食にこそ由るべけれ。神の心にて此の秘密は露はすまで之を放棄するは更に善し。此哀れなる兒に對して父たるの親切を盡すは凡ての基督信者のなすべき事なり』と維遜は止め、斯くて話は纏まり、希士帖母子は館を出で行きぬ。

然るに母子が段を下りしとき、側の窓の格子、內より開かれ、顏さし出だしたる者こそあれ、必賓婦人とて總督の惡性なる姉にて、數年後に至り妖婆として處刑せられし女なり。希士帖に向ひ『今宵我等と共に森に行かずや。愉快なる一友人に會ふべし。我は希士帖弗蘭も我等の仲間の一人なるべしと其の黑人に殆ど約束し置きたり』と言ふ。希士帖は勝利の笑を浮べ、『其人によろしく斷りくれ玉へ。妾は今宵家に在りて眞珠子を護らざるべからず。若し人々眞珠子を奪ひしならば妾は喜んで森に行き、其の黑人の書物に署名し、我が血を以て印を押すべかりしなり』と言へば、『我等は此後直ちに御身を森に引き行くべし』と答へて身を引き入れぬ。實に田墨底の言ひし如く、幼兒は此時より早くも母を惡魔の罠より救ひしなり。

第九回　醫師

老日、知輪沒とは世を忍ぶ假の名にて、此の人の實名は其の下に隱れ居ることは讀者の記憶する所ならん。彼は危險多き森の中より出で來れば、己の慰めを得んと望み居りし希士帖は、所も市場の只中にて群がる人々に蔽はれて、此上もなき恥を露し居たり。斯くなり居ては希士帖と近しかりし者ほど面目を失ふことも甚だしき理なれば、希士帖と近しきどころか神聖なる關係(夫婦の關係)ありし老日、知輪沒は、自ら進み出て態々不面目を求むる筈もなく、希士帖と並んで恥辱の露し臺に立つまじと決心せり。希士帖の外には己れを知れる者もなく、又希士帖をば口止めさする鍵を握り居ることゝて、爾後は全く人間世界の名簿より己が名を拔き去て、其れまでの繫り合と緣を切り、其れまでの嗜みをも全く打ち消して、何の響もとゞかぬ大洋の底に橫たはるかの如く一生を終らんと思ひ立たり。いよ〳〵斯く目的を定むるや、此に又一つ新しき嗜みこそ出で來り、其れと共に新しき目論見も出で來りたれ。其はすさまじき嗜みと目論見なれど、全心全力を注いで盡すほどの張合ひありたり。」

此の決心を行はんため、彼は老日、知輪沒と名告つて住居を定め、唯だ並ならぬ學問知識の人とばかり世に示しぬ。もと歐羅巴にて研究せし所により、當時の醫學には精しく通ぜしものから、今回は醫師として現はれ、人々も之を敬ひ信じたり。醫師てふものは其の人體を研究するが故を以て、其の精神の力も物質化せられ、物事を精神的に見ること能はざるに至る。さればにや宗教の熱心に驅られて他の人々と共に大西洋を渡つて殖民するなどいふものは、醫師の中には稀有のことなりしかば、醫術に長けたる人は殖民地には殆どなかりしなり。此を以て勃頓の人々は教會の執事にして藥劑師たる一老人と、剃刀振ふ傍ら外科術を行ふ理髮師とに、其の生命の綱を托し居りしなり。其の中に老日、知輪沒來りしなれば、彼等にとりては之れ大いなる獲物なりき。彼は其の時代の醫藥の術に通じ、且つ印度人の藥方をも知れることを着々明かになしぬ。

さて此の新來の學者は、來りて後直ちに教師田墨底を己が精神の導師となしぬ。聖

なる使徒等に人々の渇仰せし如く、田墨底も人々に心服せられ、其の世に生き居る間は、まだ幼稚なる此の新英洲の教會のため、大いなる働きをなすべきこと、彼の昔の幼稚なる基督教會に、初代の師父等が盡せし如くなるべしと思はれ居たり。然るに此の頃より田墨底の健康は著しく弱りかゝりぬ。親しき人々は牧師の頰の蒼きは、あまりに學問に凝り、牧會に忠實なると、何よりも其の斷食及び通夜に基すと考へたり。牧師は其の靈魂の光を益す明かならしめんため、屢々斷食及び通夜をなしたるなり。或人は牧師もし果して死なんとしつゝあるならば、其の此世がもはや彼の蹈むに價せぬものとなりしなりと言へり。牧師自らは其の謙遜なる性質に由り、神もし己れを取り去るを善しとし玉ふならば、其は我が此の世にて賤しき使命を果すに足らぬものなるを以てなりと言ひぬ。兎に角健康の衰へたるは事實にて、姿は次第に痩せ、聲も其の豐けく美はしき中に、一種悲哀の調子を含み來りて、何でもなき事に手を胸に置き、先づ色を赤くし而して後青くなる樣、苦痛の存することを證したり。

老日、知輪沒が町に天降りしは青年牧師の斯かる有樣に在りて、其の黃昏の光りあはや全く地より消え失せんと思はれし時なりき。知輪沒が町に入りしは天より舞ひ下りしか地より湧きしか、殆ど何人も語るを得ず。今や彼は熟煉の人として知られ、人々は彼が草や森の花を集め、木根を拔き、枝を折り取るを見る。彼は常人の目には何の價値もなきものゝ隱れたる價を知れるが如く見えぬ。知輪沒は又ケネルム、デグビーなどの、學問深く鬼神に通ずと言はるゝ人々と親しき旨言ひふらせり。あゝ斯かる人が大いなる都に其の地位を求めずして、斯かる荒野に來りしとは如何なる故ぞ。或人々は言ひ合へり。是れ天が十分の奇跡を行つて、日耳曼の大學より一個の大學者を空中を提げて齎らし來り、牧師田墨底の書齋の口に置けるなりと。今少しく理屈ある信仰もてる者どもゝ、老日、知輪沒の丁度善き時に來りしは、攝理の手に導かれてなりと思ひ合はしぬ。

果せる哉、醫師來りては青年牧師をめで、自ら其の教會の會員となり、控へ目なる牧師の友情と信用とを只管得んと勉めたり、彼は牧師の健康の憂ふべきを告げ、之を治療せんと苦心し、若し早く其の手を盡さば、必ずしも好結果の無きに非ざるべきを示せり、田墨底の教會の長老や執事や老刀自や將た若く美くしき處女たちは、打ち揃ひて醫師の手煉に賴るべきことを切に勸めしが、田墨底は頭をふりて『余は少も醫藥を要せず』と言へり。されど青年牧師如何に然か言ふとも、安息日ごとに其の頰はます〳〵蒼くます〳〵痩せ行き、其の聲は一層震ふに至り、胸に手を當つることは、今は暫くも斷間なき習慣になりしに非ずや。彼は其の勞に倦みしなるか。死を願へるなるかとは、勃頓の長老や、教會の執事などが、嚴かに問ひ出でし所にて、神が攝理もて明かに差し出だし玉へる助けの手を振り拂ふことは罪なりと田墨底を諫めたり。牧師は默して之を聽きしが、終に醫師に賴むことを約束せり。此の約束を實行して老日、知輪沒の助言を求めしとき、田墨底は言ふやう『神の御心ならば余は余の勞力、余の悲、余の罪および余の苦痛が、間もなく余と共に終るべきを滿足に思ふなり。而して其の此土に屬する肉体は余の墓に葬られ、其の靈に屬する方は余に從ひて永在の境に伴ひ行かざるべからず。之をして足下の手煉を證する用とならしむるには及ばざるべし』老日、知輪沒は落ち着き拂つて、『あゝ若き宗教家はさる事を言ふものなり。年若き人は未だ根を下し居らざるが故に、容易く其の生命擬める手を放すなり。且つ此世にて神と共に歩む人は、此を去て天の都の黄金舗の途を神と共に歩まんことを願ふ』と言へば、田墨底は額に苦痛の色を湧かせて、其の胸を手にて押へ、『否、余さる所を歩むに堪ふる者ならば、此世にて勞するを以て滿足するを得べきなり』と言ふを『善き人は自らを估ること常に低きに過ぐ』と醫師は言ひぬ。

斯くの如くして老日、知輪沒は田墨底のかゝり醫師となりぬ。彼は牧師の病を診ることを樂みとせしのみならず、又牧師の性質を察するを喜べり、牧師の健康のため

又醫師の植物採集のため、二人は携へて森や海邊を歩み、波の音風の聲の中に樣々なる談談をなし、或は互ひに訪づれ合ひもせり。牧師も科學の學者と交り、同僚間に望まれざる自由の思想に接するを喜びぬ。彼は固より醫師の自由思想に驚かされたり。田墨底は眞の宗教家、敬神の念の大いに發達したる人にして、信仰條文の鐵網の中に自ら籠れる一人なれば、何所より見るも自由思想家には非ざりしが、然も己が見馴れし方面とは異なれる方面より天地を見るは、時に取つての氣晴しにて、宛がら光暗く土臭き一室に籠れりし身が、窓を開いて自由の空氣を入るゝ如き心地せり。されど其の空氣は餘りに新らしく凛烈にして、喜んで長く呼吸するには適せざりければ、牧師は再びもとの如く、教會が正統信仰として限れるものに引き籠れば、醫師もまた之に伴ひ行きぬ。

老日、知輪沒は非常に念を入れて牧師を診察し、其の通常の樣に在るときと、其の心に變動の起りし時の樣とを研究せり。彼は人を癒すには先づ其の人を知るの要ありとなせるなり。心に物あれば身體の病氣は何時も其の色を帶ぶ。亞撒、田墨底は思想と想像とが非常に活潑に、感覺が非常に鋭敏なりしかば、身體の病も其の本を其所に發せるなりと思ひ、老日、知輪沒は此の患者の胸の中に入り行かんと勉め、宛がら財寶を探す者が暗き穴に入り行く如く田墨底の心に覗き入りては其中を窺ひたり。人もし秘密を有するときは醫師と親しくなることを避く。醫師怜悧にして直覺鋭く、而して押し强きことなく、患者の思へることを打ち明けしむるほど人を親しませ得るの力あり、且つ萬事は承知せりとの意をほのめかす如きものにして、之に醫師として有する便利を伴ひ居らば、何かの刹那に患者の心は融け、凡ての秘密は日光の中に流れ出でぬべし。

然るに老日、知輪沒は凡て此等の性質を具へ居たるなり。然れど時も進み、二人は益す親しくなり、樣樣の事を語り合ひ、一身上の立ち入りたることまで打ち明くるに至りたれど、始め醫師が想像せし如き秘密とては絶えて現はれ出づることなく、

醫師は牧師の病の性質さへも明かならぬに非ずやと疑へり。

暫くして後、醫師は人々に說きて田墨底と同じ家に住まふことゝなしぬ。是は牧師の一擧一動も凡て醫師の眼に洩れざらんがためなり。人々は大いに喜びぬ。是れ牧師に取て最も幸福なることなりければ也。何となれば或人々は屢々牧師に勸め、其の會員中にて精神にて牧師を崇め慕へる美くしき少女等の何れかを撰ぶべき旨言ひ出でしも、牧師は當分之を容るるの見込なく、かゝる勸めは凡て拒絕して、宛から獨身てふことが敎會の規則に定められ居れるかの如く見られたり。されば田墨底は自ら好んで他人の家の甘からざる飯を食ひ、他人の爐邊にて身を溫むる生活を撰みしかば、今彼の聲の屆く所に絕えず在る人間の顏とては、實に此の老醫師のみなりしなり。

二人の新住居は中流生活の敬虔なる寡婦の家にして、一方は墓地に接せり。主人の寡婦が母らしき心付けにより、田墨底は前の方の一室をあてがはれしが、是れは日あたり善く、窓には積多き幕かゝりて、いつでも日光を想ひのまゝに入れ得るやう出來、壁にはダビデ、バテシバ、ナタンを畫ける古畫煤けて懸れり。此室に弱れる牧師は古代師父の文書、猶太ラビの敎文、天主敎僧職の文書等を堆み立てゝ書齋を造れば、老日、知輪沒は他の室を其の醫術及び化金術の研究室又工場と定め、斯くて二人は別々に閉ぢ籠りて各々好む所の學問に耽るかと思へば、又互ひに一方の室に訪ひ行きて、人のすることを念を入れて窺ひ守ることもありき。

田墨底を思ふ友人等は之を以て攝理のせる所と信ぜしが、然も此頃に至ては牧師と醫師との關係を憂ふるに至りし向きもありき。彼等の中に三十年前トマス、オーヴアボリーの殺されし時代に倫敦に在りしてふ工人ありけるが、其の男の證明して其の時何とか言ふ醫師ありてオーヴアボリー事件に關係せし彼の大魔術師フオルマン等に與せしものありしと言へば、又或一二の人は老日、知輪沒は印度人に捕はれ居りし間に、印度人の妖僧等に交はりて、其の妖術を知り、醫術も之がために巧みに

なれるなりと言ひ、多くの人々は老日、知輪沒か此町に住みし以來、特に田墨底と共に住みて以來、其の容貌甚だしく變化せりと言へり。初め彼の容貌は落ち着きて考へ深く學者らしかりしが、今は顏に獰惡の相あり、其れが見る毎に度を增し居れり。無知の民どもは彼は其の工場の火を地獄より取り來り、地獄の薪にて燃やす故、其の顏煙を以て煤くるなりと思へり。一般の人々言ひ合へるには、人並ならず神聖なる人に何時の世にもある如く、サタン（惡魔）かサタンの使か老日、知輪沒の形を取りて、牧師亞撒田墨底をつけ居れるなり。此の物は暫く神の許しを受けて牧師の親みを得、其の靈性を覆さんとは企つるなり。されど牧師の勝利は危ぶむを要せず、彼は戰に勝ち榮光を以て出で來るべし。されば其れまでは苦み戰はざるべからざるべしと。爰んぞ知らん哀れむべき牧師の眼の底に潛む沈鬱と恐れとより判斷すれば、戰爭は至て手酷しきものにて、勝利は必すべしとも限られざりしなり。

第十回　醫士と患者

老日、知輪沒は固より情溫かなる方には非ざりしも、元來落ち着ける人にて、其の行ひはいつも淸く正しかりき。彼が其の詮窄に手を着けしときは、宛から裁判官の事件を究むるが如く、只管眞理を求むることをのみ思ひ、絕えて感情を挿さまず、己れの蒙りたる損害を思ふこと無かりき。然れど詮窄の進み行くに從つて不圖恐ろしき心起り、自ら如何にしても此の心を棄つる能はざるに至れり。今や彼は哀れむべき牧師の心に堀り入ること、金堀の金を求むるが如く、否寧ろ墓堀が死人の胸にある寶玉を得んとして墓を發くにも似たりけり。

時には醫士の眼より靑く鮮かなる光の閃めき出で、鍛爐の火の映りしか、將た『天路歷程』中の岡の邊の家の門より發せし火の映りしかと思はしめたり。而して彼が堀りつゝある土地は見込みあり。斯かる時に彼は獨り語つやう、『此の男は人々に淸

しと思はれ、甚だ精神的に見ゆれども、父か母かより強き獸性を受け繼げり。今少しく此の方向に堀り行かん』と。斯くて牧師の心の内に堀り入り見れば、人類の幸福を望む心、人の靈を愛する念、清き情、自然なる篤信、其等が自己の修養と神の啓示とに由て輝けるあるのみ。されど是等の金塊は此の金堀に取りて無用のものなれば、唯だ之をひつくり覆したるのみにて失望して向きかへり、又他の方向を堀り出づるなり。醫士は半睡せる人の室に忍び入りたる竊盜の如く拔き足差し足息を殺して其所か此所かと大事の寶を探し廻りしが、田墨底も神經鋭敏なること〻て之を氣取り、醫士との關係に由て己が平和を脅かすこと出で來りしを朦氣に覺りもせしが、其の心既に亂れ居りて、何人をも疑ひ居たる彼は、却て眞の敵の現はれしとき之を他の嫌疑者と識別るの明を失ひ居たりしかば、醫士の性格を看取すると能はず、彼と親しみ彼に訪はれ、或は此方より彼を訪ひ、時には氣晴しのため醫士の傍に座して、雜草の藥に化する途行を眺むることをせり。

或日のこと、老醫士は一把の草を試驗してありしに田墨底は墓地に向ひて開ける窓の闕に凭れ、手にて額を支へつ〻眼をば雜草の方に向けて何所より此草を得たるかを問ひぬ。牧師は何物によらず之を眞直に見ることなかりき、醫士は試驗をば止めずして『すぐ此所の墓地にもあり、余が始めて見たる草なるが墓の上にも生ひ居たり。其の墓には石碑も何もなく、唯だ此草のみが死人を紀念するために自然に生じ居たり。草は死人の心の中より出で來りしなり、彼と共に葬られし厭ふべき秘密を代表して。あゝ其の秘密をば生ける時に白狀すれば善かりしに』と答ふれば、田墨底は『思ふに彼は嬰に之を願しなり、然ど出來ざりしなり』と言ふ。『何故ぞ、何故に出來ざりしぞ。此の黑き草が其の言はざる罪を白狀せしむるために死人の心より出で來るほど、自然は力を盡して罪の告白を促すに』と醫士は又返しぬ。そは唯だ君の想像のみ。世には人の心と共に葬られたる秘密を發く可き力あるべからず。斯かる秘密を有する心は、世の終末すべての事の明かに暴はる〻日まで、其の秘密を

包み行かざるべからず。君の言ふ如き秘密を有する心は、必ず彼の終末の日に於て何の躊躇もなく言ひ難き喜びを以て之を告白するなるべし』と田墨底答ふるを、老日、知輪沒はしづかに其の顏を見そらしつゝ『然らば何故此世にて告白せざるか、何故その言ひ難き慰めを早く得んとはせざるか』と又問ふにぞ、牧師は胸を搔きむしりつゝ、多くは然か爲す、多くの哀れむべき人々は其の死ぬる時のみならず、生きて地位高き時にすら、余が人に語らぬを信じて己が罪を余に告白せり、而して之をなしたる後は實に生き返りて息を繼ぎし如くなるを見たり。此は道理に非ずや』と言へば、『されど或者は其の秘密を葬り去るなり』と醫士は言ふ。『然り斯かる人々あり。されど其の天性その物の組み立てが之を然らしむるなり。罪人ながらも神の榮をあらはし、人の幸福を增すために熱心なるより、人々の目に己が汚れを持ち出だすを恐るゝなり。何となれば斯くするも何の益なく、昔ありし惡は後に善をなせしとて贖はるべきものならねばなり。斯くて言ふべからざる苦痛を內に藏めて、表には雪の如き潔白を裝ひながら、心は汚れに染りて人々の中を徘徊す。』と答ふ。老日、知輪沒はやゝ言に力を入れ指にて手樣しつゝ『其等は自ら欺く者なり。己れに相當したる恥を受くるを恐る。其の人を愛する愛、神に事ふるの熱心は、心の中に入りし惡念と並び立つを得ず。其等の惡念は其人が罪を犯せしに由りて心の中に入り來り、其の種子を播き散らすなり。されど若し神の榮光を顯はさんと願ふならば彼等をして手を天の方に揚げしむる勿れ。若し人のために盡さんとならば彼等をして自ら賤しめ良心の在ることと其の力とを表はさせよ。僞りの裝ひが君よ神自身の眞實よりも善からん理のあるべき』と言ふ。青年牧師は話を他に轉ぜんとして、『或は、然らん』と冷淡に答へ『其れは兎に角醫士足下に問ひたきことあり。君の親切なる治療は余に益ありしや』と問ひ出でしが、醫士の答へぬ先墓地に當りて幼き聲あり。田墨底電氣にても感ぜし如く窓より見やれば、希士帖弗爾と眞珠子と墓地の通路を行けり。眞珠子は相變らず美くしけれど、餘りに愉快氣なるため人間外の物のやう

なり。彼は墓の間を彼方此方へ飛び廻りて、扁たく廣く、由緒ある人の墳墓と見ゆる石塔の上に來り、之に登りて踊りかゝりしが、母よりおとなしくすべく制せられ、こたびは墓の傍に生じたる毬毛草の毬毛を摘み取りて、其れが一握りとなるや、其れを母の胸の文字に並べて着けしが母は之を拂はんとせざりき。

老日、知輪沒は窓に身を寄せて冷やかに笑ひつゝ、『彼の子には法律とは上を敬ふとか、人の位や威權を尊ぶとかいふ心は少しもなし。先日の如きはレーンの泉にて總督其人に水をはねかけるを見たり。天の帳簿には彼は何といふ名にて記入せられ居ることならん。全くの惡靈にや。彼には情愛ありや。人として持つべきものを何か持てるにや』と言ふを、『破法の自由の外何もあるべからず。善をなし得べきかは余の知らざる所なり』と田墨底は靜に答へぬ。

幼兒は此の聲を聞きつけしと見え、窓を仰ぎてあどけなく且悧發なる笑を浮べ、毬毛の一を田墨底に投げ着けたり。感じ強き牧師は打ち震ふばかりになりて縮み入れば、眞珠子は手を柏て大笑ひに笑ひぬ。希士帖弗蘭も亦思はず見上げ、四人暫しは無言には見合ひしが、幼兒は終に笑つて叫び出でたり。『母上よ立ち退き玉へ。立ち退かずは彼の黑き人母上を捕ふべし。彼は既に牧師を捕へぬ。來玉へ母上。彼は母上を捕へん。されど此の小さき眞珠子をば捕へ得じ』かくて母を拉き、墓の間を踊りつ飛びつして去り行きぬ。

老日、知輪沒は暫く無言の後、『彼の女は其の非行は兎もあれ、君の所謂堪へ難き秘密を隱して抱かぬ者なり。希士帖、弗蘭は胸の緋文字のため其の不幸の輕きものにや』と言ふを『確に然り。されど余は彼に代つて答ふる能はず、彼の顏には苦痛の色あり。とはいへ希士帖の如く其の苦痛を明かに示すは、之を心に包むに勝れり』と牧師は答へ、再び言なかりしが、醫士は又植物を試驗し整理しかゝり、終に『君は先刻君の健康を如何に鑑定するかと問ひ玉へり』と言へば『然り之を知らんことを願ふ。乞ふ包まず語り玉へ。生くるや死ぬるやを』醫士『さらば明かに言はんが、

君の病は我が見る限りに於て甚だ奇なり。日毎に君を見て早幾月。余は君の病の甚だ重きを知る。されど良醫の見切るまでには甚だしからず。然れども病の何なるやは、余知るが如くにして知らず』と言はれ、牧師窓の方を見やりつゝ『君は謎にて語り玉ふ』と言へば『さらば今少しく明かに言はん、言の失禮に亘るをば赦し玉へよ。余は君の友人なり、神の攝理に由て君の生命と健康に付て任を負へる身なり。君に問はん君の病の作用は凡て余に打ち明かされたるべきか』と醫士は問ふ『何故其を問ひ玉ふや、醫士にかゝりつゝ其の病を隱すは兒戲に非ずや』と答ふれば、老日、知輪沒はまぢ〳〵と牧師の顏を見入り、至て徐かに『さらば余は凡てを知れりと言ひ玉ふか。或は然らん、然も醫士に身體の病を悉く打ち明かされしとて、醫士はまだ病の半分をも知れりと言ふべからず。元來身體の病は心の惱みの兆候にすぎず。此の言君に無禮であらば赦し玉へ。君は身體と精神とが最も密に結び着きたる人なり』と言ふ。牧師は激して椅子より身を起さんとし、『さらば其上を尋ぬるに及ばず、君は靈魂の藥を投ずる能はず』と言へば、老日、知輪沒も牧師の眞向に立ち上り言を續けて『斯かる病は直接に身體に形はれ來りしなり、君醫士が身體の病を癒さんことを望み玉ふか、君自ら靈魂の傷を打ち明けずして、如何で其れが叶はんや』と言ふを『否、君には打ち明かすべからず、此世の醫士には』と牧師は目を張りて醫士を見やりつゝ烈しく叫び『君には打ち明かすべからず、されど若し靈魂の病ならば神に之を告ぐべし。彼は靈魂の醫士なり。彼もし其の心によしとせば癒しもせん又殺しもせん。彼は義と智慧とを以て善きに計らはん。されど君は何者ぞや、神と患者との間に立ち入りて干渉するとは』言ひさま烈しく歩みて室を飛び出でたり。

後見送りて老日、知輪沒は鮮かに打ち笑みつゝ獨り語てり『此所まで話を進めしは結構なりき。何も之に由て損せし所なし。交情はまた善くならん。さはいへ彼の情の激することよ。實に我を忘るゝなり。かゝる事に情激すれば他の事にも然り。此

の敬虔なる田墨底氏は心の熱したるため曾て由々しき事を仕出來せしなり』と。

青年牧師は暫く人なき所にて考へたる後、己が心の亂れたりしに氣付き、老醫士の言には何の咎むべき所もなかりしを思ひ、斯かゝ事を助言するは醫師の務にして、牧師亦此方より求めしなるに、之を怒りて飛び出でし心を我ながら不思議に思ひ出で、斯くて暫しの躊躇もせずして醫師にわび、又舊の如く交り、よしや病を全癒する能はざるまでも、此の弱れる生命を時至るまで引き延ばすの役目を取らんことを乞へり。醫師も快く頷き、舊の如く心を盡せしが、然も牧師を診察して其の室を出で行く時には、いつも異樣なる笑を其の唇に浮べ、田墨底の前にては現はれざりし不思議の顏色、闕を出づるや忽ち現はるゝを常とせり。獨り語るやう『珍らしき事件なるかな。今少しく深く見究めざるべからず。身體と肉體とは斯くも密接せるか。之を單に醫術の研究のためとするも、底の底まで究めざるべからず』と。

其れより後幾程も經ざる時のことなりき。田墨底は或日大冊の書物を前なる卓子の上に開きたるまゝにて深き〳〵午睡の夢に入りぬ。田墨底は元來睡りの堅からぬ人にて、梢に羽たゝきする鳥の如き輕き夢を結ぶが常なりしに、此の時は全く熟睡して老日、知輪沒が音なひもせで入り來りしを知らざりき。然るに醫士はつか〳〵と進みより、田墨底の胸に手を置き、診察の時すら田墨底が厭ひて披かざる胸の衣を剝ぎて見たり、田墨底は實に身震ひし、やゝ激昂せり。醫士は暫く不言不動なりしが、やがて出で行けり。されど其の時の顏の凄さ。驚きと喜びと恐れとを一時に集めて、サタン(惡魔)が一個の人間を天より失ひて自己の國に取りこみたる時の樣も斯くやとばかり見えにける。されどサタンには驚きの色だけはあらざるべきに。

第十一　心の內

上に記したる事ありて後、牧師と醫士との間柄は、表面上別に異りたる風もなかりしも、實は甚だしく趣を異にし來りたり、老日、知輪沒は思ひ設けぬ所に途の

開きし心地するを禁ずる能はざりき。彼は沈着にして柔和に靜なる人のやうなりしも、尙ほ意地惡き所を包み居たりしが、其れが今や現はれ來りて、曾て世にあらざりし種類の復讐を試みんと欲するに至りぬ、いで是よりは田墨底が何もかもを打ち明かすべき腹心の友となりなんと、老醫士は決心せり。あゝ世界は隱れたる悲しき罪を露すを慘忍として、之を大目に見之を赦せとも、知輪沒には此は赦すべからざるものにてありき、斯くして我が心の中に貯へられたる苦き恨毒を、我が目指せる男に注ぎ盡してこそ、始めて復讐は帳消しとなるべけれと考へたり

牧師の引込み思案なると遠慮深きとは此の企てを果すに不便なりしが、老日、知輪沒は神の攝理が我に代つて罰を與ふるを傍觀するのみにては滿足出來ず、彼は默示を與へられしなりと思へり。其の天よりか地よりかは問ふを要せず、兎に角此の默示に助けられて其後は彼。牧師の外形のことを知るのみならず實に其の靈性の一擧一動をも着取るやうになり、其れまでは唯だ視察者なりしが、其れよりは牧師の心を我が意ふまゝに操つる者とはなりにける。彼は今や牧師の心の鍵を握れり、牧師をして激しく動悸を起さしめんとすれば、其の鍵も彼の手中にあり、牧師をして恐れおびえしめんとすれば、彼は無數の妖怪を牧師の周圍に出で來らしめ、之をして牧師の胸を指さしめ得しなり。

牧師は何となく惡しき力の己れを壓倒しつゝあるを感じたれど、事の眞相をば知る能はざりき。彼は疑ひと恐れと、時には憎惡の情を以て老醫士の醜き姿を打ち見やりしことあり。げに醫士の容貌擧動は牧師をして我れ知らず厭ふべきものたりとの感を抱かしめたるなり。されど牧師は其の故由を自ら覺ること能はぬものから是は我が心に包む傷あるより、我から僻みて起れる情なりと考へ、出來る限り此の情を去らんと勉め、其の去り難きを感じて、力めて老人と其の交情を舊の如くに溫め、斯くて老醫士に其の巧みに巧める復讐をなし遂ぐる機會を與へ居たり

斯く肉の病、靈の惱みに由て苦しめる間に、田墨底は其の神聖なる仕事にては非常

なる人望を得たり、實に彼は己が悲みあるに由て之を得しなり。彼の知力、道念、經驗は此の苦痛の中に活動すること人間業とは思はれぬまでに盛んなりき、其の名聲は多くの先輩を凌駕して尙止まらぬ勢あり。其の時の牧師等の中には或は學問の深きに於て、或は心力の强きに於て、或は聖徒らしきに於て、固より田墨底に優る人々あり。然れども彼等は何れも皆な一つのものを缺けり、何ぞや焰の舌是れなり。即ち人間の心の底より叫び出でゝ、同胞たる人間に語る所の言を缺けり。彼等は之を求めたり、されど得ざりき。彼等の聲は唯だ其の居る山の頂より人間界に下り來るものに外ならざりき

元來を言はゞ田墨底も其類に屬すべき人なりしなり、若し彼にして心の中に罪の惱みを抱き、此の重荷に由てよろめきつゝあるに非ずんば同じく人民の頭上を飛びはなれて、高き頂に攀ぢ登り居るべかりしなり。されど此の重荷あるが故に彼は最も低き人の平面に引き止められ、之に由て罪深き人類の心を其の底までも思ひやる

を得しかば、田墨底が心は其の人々の心と相通じ、彼等の罪を我罪と感じ、斯くて己が心の痛みをば深き雄辯もて萬人の心の中に突き入るゝなり。人々は何故牧師の言に力あるやを知らぬものから此は全く神の奇蹟にて、天に代りて言ふものなりと信じ、牧師の蹈める地は全く聖別されし地なりと思ひぬ。教會の處女たちは宗教と情とを別つこと能はざりければ牧師を思へる情も全く宗教なりと思ひなして之を供物として神に献げゝるが、彼等の顏色は何れも蒼くなり行けり、老いたる人々は牧師が却つて己れ等に先だつて天に上るべきを信じ、其の子供等に遺言して我れ死なば骨をば我が若き牧師の神聖なる墓の傍に埋めよと言へり。されど牧師の方にては先頃醫士の告げし草は我が墓の上に生ずべきか、咀はれたる物の葬らるべき所なればと窃に考へ居りしなり

彼は實に人民の此の尊敬のために轉た苦しみぬ、心を洗へば眞理は尊ばれざるべからず。凡て影の如きもの、全く重量もなく價もなきもの、其の生命の中に生命とい

ふほどの實のなさものは、その眞相を明かにせざるべからずと願へり、さらば己れは如何、實ある物か將た影の中の最も曚なるものか、彼は其の講壇の上より、聲一杯に張上げて、我が何者なるかを語り出でんと願ひたり、曰く『諸君が見る此の黑衣の宗教服を着けたる我れ、神聖なる講壇に上り、天の方に面を向け、諸君のために全知なる神と交はることを務むる我れ、諸君が昔のエノクの如き聖なる生活を日毎に送れりと認め居れる我れ、歩みし後には光輝殘り、從ひ來らんとする天の巡禮者を導きて、神の國へ到らしむると諸君等の想へる我れ、諸君等の小兒等に洗禮の手を置く我れ、諸君の牧師として諸君が敬し信ずる我れ、此の我れこそ全く一個の汚れ一個の僞りなれ』と

田墨底（デンメスデール）は之を語るに非ざれば再び下らじと思ひて講壇に上りしも一度や二度のことならず。己が咽を浚へ呼吸を引いて今こそ我靈の黑き秘密を吐き出さめとせしことも一度や二度ならず。實際には之を語りしことも亦一度や二度ならず。否幾百回に止まらず。されど何と語りしか。彼は其の聽衆に向ひ、己れの全く惡人なること、最も惡き者より更に惡人なること、罪人の中の最も甚だしきもの、厭ふべきもの、想像し難き科あるものなること、を告げ我が此の身が人々の前にて神の怒の火のために燒け盡きぬこそ不思議なれと語りぬ。之よりも明白なる物語りのあるべきや。其時人々は一齊に立ち上つて彼を其の汚せし講壇より引き下せしが。否々。彼等は之を聞けり。聞て益す彼を敬ひしのみ。其の意味を彼等は察する能はざりき。互に言ひ合へるやう『神の如き若人なるかな。地にての聖徒なるかな。彼れ己が潔白なる靈に於てすら斯く罪深きを見るからには、君や我の靈の罪とは如何に見るならん』と。牧師は斯く意味を取らるゝを知りぬ。彼は其の良心を明かして自ら心を賺さんとせしも一瞬間も自ら欺き果せはせで却て僞善といふ他の罪を重ね、自ら知れる恥辱を重ねぬ、然も其の性質は眞を愛し僞を賤しむ、されば彼は何よりも己れを賤し

心の中にかゝる惱みありければ田墨底はプロテスタントの中に生れて育ちしに拘らず却て舊く腐敗せる羅馬教の信仰に從つて行ひをなすやうになりけり、彼の密室には血に染みし一條の鞭錠おろして秘し置かれ居たり。牧師は屢々之を己が肩にあて、我と我身を笑ひつゝ、ます〳〵烈しく打ちあてぬ、彼は又斷食するを習ひとせり。他の篤信なる清教徒も斷食すれど、其は身を清くし天の光明の鮮かになりまさる方法としてなるに、田墨底は懺悔の行として斷食し膝の震ふまでに至るなり。尙又彼は幾夜つゞけて通夜をもなしぬ。全く光を消してすることもあれば硝燈の下にてすることもあり。時には光を強め鏡にて己が顏を見つゝすることもありき、斯くて深く我心に省みることをはすれど自ら清むるに由なし。斯く長く通夜すれば從つて腦を害し、樣々の幻眼の前に浮び出づるに至る。曚げに室の隅に出づることもあれば、近く鮮かに我身に副ふて現はるゝもあり。乍ちにして惡魔の群出でゝ牧師を揶揄するかと思へば、乍ちにして天の使の群あらはれて上り行き、乍ちにして少年時代の亡き友見え、乍ちにして白髮をいたゞき聖徒の如き澁り顏せる父來り、乍ちにして又母來り行き過ぎがてにふりかへり憐れましげに牧師を見て去り、乍ちにして希士帖弗茵眞珠子を從へて出で來り先づ己が胸の緋文字を指さし次で牧師の胸を指さす。」

是等の幻は一つとして僞りの影にはあらざりき。固より田墨底も之を室內の卓子や書物など、同じやうに實在するものなりとは思はず、されど或意味にては己が目下出くわし居れる物事の內にて何よりも根のあることゝ感じたり、凡て彼の如き僞れる生活をなす人に取りては其靈を養ひ之を喜ばしむべきあらゆる滋味は、絕えて殘され居らぬほど、此の世界より搾り取られ了れるなり、眞ならざる人には全天地僞りなり、其の何をも手に入るゝ能はざるなり、僞りて己れを裝へば己れは影となり、甚だしきは全く消へ失す。田墨底此世に眞に生くる一人たらんとせば唯だ心中に無量の苦惱をなすことゝ之を外貌に表はすことゝに由て得べきなり。たとひ彼れ笑顏を作りしことありとするも、是れ田墨底其人に非らず世に決して居らざる人な

り。

斯くの如き物苦しき一夜、牧師は椅子より起ち上れり。不圖思ひ出づることあり、暫くの平和を得んとしてなり。例の如く悠々たる態度を以て梯子を忍び下り戸を開きて外に出でぬ。

第十二回　牧師の通夜

睡遊の中に在る如き風情にて歩み來りしは、今は昔希士帖弗蘭が始めて恥を露せし所なりけり。彼の時の方台は七年の雨風に汚れ、其後之に登りし多くの罪人等の足跡にて蹈み減され居しが相も變らず集會堂の差し出し二階の下に立てり。牧師は其の段を上り行きぬ。

折しも五月初の暗夜にて、黒雲は天の全面を蔽へり。町は全く眠り居れば人に見らるゝ憂は絶えてなし、若し自ら善しとし病にかゝることを恐れずば牧師は東に白むまで其所に立ちもすべかりしなり。唯だ密室にて自ら鞭つときに見守れる眼は彼を見れど外には、一つの眼も彼を見ず。何故に彼は此所へは來りしか。唯だ懺悔の眞似か。然り眞似のみ。天の使をば、赤面して泣かしめ、惡魔をして喜んで喝采せしむる所の眞似のみ。彼は悔恨の情に逐ひやられて此所へは來れり。此の情は何所にも彼を尾け廻し行く、されど又此の情の後に卑怯の情てふ從者が伴ひ一方より白狀の崖まで突きやるものあるときに震ふ〳〵彼を捕へて引きかへすなり。哀れむべきかな、如何なれば彼の如き弱き心を罪は弄びけん。心の強くして誘はれても之に堪ふるか、將た自ら之を突き飛ばし、善をなすために其の力を傾け用ゐるか、斯かることをなし得るものにこそ罪は誘ひ來るべけれ。然るに是れは弱き心の人なり。堪へ得もせねば戰ひ得もせぬものを。さはいへ罪を悶え苦しむ心、徒らに悔い悲しむ心は片時も彼の胸を去らざりしなり。

斯くして台上に立てる間に、田墨底は心に無限の恐を感じ來り、全天地が我が裸な

る胸、心臓の眞上にある緋文字を注視しつゝあるかと覺えぬ。あゝ此の胸の上にこそ彼の身體を嚙みつゝある牙はあるなれ、彼は覺えずも一聲高く叫びぬ。聲は深夜の中に響きわたりて、家より家に應じ、岡より陰に震びて、惡魔の戲れしかと思はるゝばかり。すさまじさ言はん方なかりき。

牧師は手にて顏を掩ひ『終に成し果せり。全町は目を醒まして出で來り此所に在る我を見出すならん』と言ひきされど然かはあらざりき。叫び聲は己が耳に聞えしほど高くはなかりしなり。町は醒めざりき。よしや醒めても半醉の中に之を夢にうなされし人の聲か。さなくば其の時代植民地や茅屋にて折々聞えし妖婆が惡魔と合乘する時の聲ならんと思ひしならん。牧師は何の物音をも聞かぬものから、手を目より離して四周を見回しぬ。程遠からぬ所に立てる總督伯林俄の家にては一の窓より總督自身燈火を手にし、白き夜帽をかぶり、白きガオンを纏へる姿見え居たり。叫び聲に驚かされしものと見ゆ。同じ家の今一つの窓よりは同じく燈火を手にして總督の姉老必賓女の姿現はれ、遠目にも其の澁れる面見やられぬ。老女は頭を窓より出だして氣づかはしげに上の方を仰ぎ見たり。疑ひもなく彼は叫聲を聞きつけ、之を其の馴れ合へる惡鬼と妖婆等との聲なりと思ひしなり。

總督の燈火の光を認むるや老女は己れの燈火を消して影をかくしぬ。總督は暗の中を注目せしが、固より石よりも見透し難き暗のことゝて一寸の先も明かならず、やがて窓より身を退けぬ。

牧師の心はやゝ靜まりしが、此時目に入りしは一つの小さき光りの近づきつゝありしものなり、其の光りの發射にて其が來る途の傍にあるものは乍ち木のくえ、乍ち垣根、乍ち窓の戸、乍ち水槽、乍ち家の戸口と、現はれては消えしが、牧師は之れを打ち眺めつゝもいよ〳〵我が眞相の現はるゝ時迫れり、然り彼の光りの近づき、そが我が影を照す時ぞ其れなれと思ひたり、光は近づきぬ。見れば外ならぬ老敎師維遜氏なり。田墨底は此を以て維遜氏が死なんとする人の床の側にて祈りして居り

しなりと推しぬ。然り老牧師は總督ウインスロプの天に行きしを見送りて、今しも家路に歸り行く所なりしが、其の燈火の光りを見て、田墨底は維遜が古の聖徒等の如く後光にて圍まれて罪の暗夜の中を行くか、又は彼が仰ぎ望める天の門より遙かに光を受けつゝあるかと思ひ出でしが、忽ちにて微笑したり、否己が考へを自ら笑ひたり。而して又我は狂氣しかゝりしに非ずやと思ひぬ

維遜は隻手に其の着たるゼヲワ外套を引き合はせ隻手に硝燈をかざしつゝ過ぎ行きしが、其の時田墨底は『敬愛する維遜老よ。乞ふ此に登り來り我と共に暫く樂しませ玉へ』と叫び出づるを禁ずる能はざりき

あゝ田墨底は果して實際言を出だせしなるか。彼は暫くの間は之を口より出だせしと思ひぬ。然れども此は唯だ想像のみなりき。維遜は相も變らず、前の方の泥深き途を一心に見やり見向きもせで過ぎ行けり、提燈の火の全く見えずなりしとき、田墨底は眞に危ふき刹那を過したるものかなと思ひ出でぬ

更に又半ば面白く半ば恐ろしく感じながら思ひ出づるやう、夜寒に由て足もすくみかゝり、此の臺を下り得るや分らぬやうなり。夜明けても此まゝにてあらん。近所の者は起き出で、最も早く起きたるが、味爽の光の中に耻辱の臺上なる己れの影を見、警戒とも好奇心ともつかぬ情に驅られて、戸毎を叩き起し、何人か亡くなりし罪人の幽靈を見せんために凡ての人々を呼び集むるなるべし。其の時長者たちはフラヂルの外被にて、老刀自たちは夜寢衣のまゝにて大急ぎに起き上り、其れさでは愼み深くして髮一筋をも亂せしことなき人々すら、しどけなき樣にて人中に飛び出で來るべし。老總督伯林俄も出で來らん。心貧老女も出で來らん。維遜教師も出で來らん。其の時の各々の顏と姿とまで一々思ひやらるゝなり。己が教會の長老や執事も亦來らん。牧師を偶像のやうに崇めて、之を其の白き胸の中に祭れる處女たちも出で來り、急ぎあわてし餘り其の頭飾をも着けおほせであらん、誰も彼も闕に躓くばかりにして來り、怪しげに又恐ろしげに露し臺の上を見るならん。あゝ其所に

彼等は誰をか見る。東の方よりさす光に顔を照されて立てるは何人ぞ。牧師亞撒、田墨底の外に誰にかあらん、彼は氷りて半死となり、耻を以て蔽はれ、希士帖、弗蘭の曾て立ちし所に立てりと

斯かることを想像して彼は覺えず高笑ひし、はつと思ひ付きしが、忽ち之に應じて暗中輕快にあどけなき笑ひ聲あり、牧師は心に一震ひして是れを眞珠子の聲なりと知りぬ

彼は『眞珠子、眞珠子』と叫び暫くして又聲を押へ『希士帖、希士帖、弗蘭、御身其所に在りや』と言ひ出でぬ。『然り、希士帖弗蘭なり』と驚いて答へ下なる途より足音して近づき『妾と眞珠子となり』と加ふれば『何處より來りしぞ希士帖、何故此所へは』と牧師問ふ。『妾は死なんとする人を看病し居たり。總督ウインスロプ氏を看病し居たり。而して彼の衣を仕立つるため身の長を計りしが、今家に歸る所なり』と答ふ『此所に上れ希士帖。御身も眞珠子も。御身等は二人とも曾て此所に在りき然も我は共に在らざりき、今一度上れかし。我等三人して共に立たん』と牧師言へば、希士帖は段を登り、眞珠子の手を引きて臺の上に立てり。牧師は幼兒の一方の手を取りぬ。此の刹那、牧師は一の新しき生命、彼自らの生命ならぬ生命が、潮の如くに押寄せ來て、我が心臓の中に突き入り、我が凡ての血管を走り流れ始めしを覺え、母と幼兒とが己れの半ば枯れし身体に彼等の生き〳〵せる温まりを注ぎこむかと感じたり。三人は電氣の通ふ鎖を造りぬ

『牧師よ』低語せしは眞珠子なり。『何を言はんとするや兒よ』と田墨底言へば『大人は明日日中母上及び我と共に此所に立ち玉はざるべきか』と眞珠子は問ひぬ。『否、然かはせじ眞珠子』と牧師は答ふ。彼は今しも新しき力を受けしにより人々の前に罪を露すことを恐るゝの念、再び湧き起り、今此に表はれたる三人の關係には、よし何とも言へぬ喜び共の中にあるにせよ、彼は之を思ひて既に震ひ居れるなり『然かはせじ我が兒よ。我は實に御身の母と御身といつか共に立たざるべからず。されど

明日は然かせじ』と言へば、眞珠子は笑つて己が手を引き去らんとするを牧師は放さず『今暫く』と言へは『大人は我手と母上の手を取ることを約束し玉ふべきか。明日日中に』と眞珠子は問ふ。『明日にてはなく、何日か』。と牧師言へば『何時ぞ』と幼兒は漆膠し、宗教家たる牧師は此に至て已むなく『大なる審判の日に』と低語し『其の時其所にて審判の御座の前に御身の母と御身と我とは共に立たざるべからず。されど此の世の晝の光は我等の會ふことを見るべからず』と言ひしに、眞珠子はまた笑ひぬ

此の時雲に閉ぢたる空に一道の光輝現はれ、それが瞬く間に光を添えて擴がり行きぬ。空氣の稀薄なる地方には屢々夜間に現はるゝ空光の作用とに知られけるが其の光り非常に強く、瀰ぎる雲を射透して、大空は一面に無限の硝燈を點したる如く、街上の物はみな日中のやうに鮮かに見え、而もそれが恐ろしき色を帶べり。木造の家も其の高樓及び三角壁も、側に若草生へる戸口も、土を鋤き反したる草床も、綠にて兩側を縁とられし轍の跡も、みな明らかに見らん、今までとは異れる說き明しを世界の物事に與ふるやうに見えぬ。其の光の中に牧師は胸に手を當て、希士帖弗蘭は輝く緋文字をつけ、幼兒は二人の間の鎖になりて立ち居たり。されば此の光りはさながら凡ての秘密を照り出だすの光、夫婦親子の關係あるものを結びつくるの夜明なるかの如く見えにける。

眞珠子の眼には可笑しき光あり、彼は仰いで牧師の顏を一瞥せしときにはあどけなき微笑を堪へたり。之に由て例の如く精靈のやうなる面影ありき、彼は我手を牧師の手より引き放して街道の方を指しゝが、牧師は唯だ兩手を組んで胸にあて遙に天邊を見やりしのみ。

其時代には日と月との出入りほど規則正しく起らぬ天の現象や其他自然の出來事をば、みな神よりの示しの籠れることゝ信じたり。かくて燃え立つ鉾や、焰の劍や弓や又矢の束など夜中に現はるれば之は印度人との戰爭起るなりと思はれ、疫病起る

前には紅の光雨の如く注ぎ下ると言はれたり、殖民の始めより革命時代に至るまで、新英洲に起りたる著しき出來事は、みなかゝる兆候ありしとせられしなり。

此等の兆候は屢々多數の人々の見し所なるも、又何人か一人にて見て之を樣々なる己が想像を以て眺め、己が考へを以て一通りの思想に造り成したるも少からず、國民の運命は天の表に文字にて示さるとは當時の思想にして、天の表如何に廣しと雖も、神が民の前途を書き付けるには決して廣きに過ぎずと思はれたり。米國の祖先たちは其の幼稚なる共和政治は特に近く特に密なる天の導きの下にありと信じぬ。されど其は廣く國民にかゝはることなるが、唯だ一人が此の同じ廣大なる天の帳面に己れ一人に向つて表はされし示しを見たるときは何と言ふべきか。若し或人が其の長く且つ深く且つ隱れたる苦痛に由て激しく己れのことのみを考へすぎ、全天地は宛から我一人のためにあるかの如く思ひ、大空も唯だ我が靈の履歷と前途とを表はす紙面に過ぎざるが如く感ずるに至ることあるときには、此は實に其の人の心が狂ひたる兆候と見るの外なからん

牧師は今しも斯かる心となり居たり。天邊を仰ぎ見れば極知れぬ空一面に亘りて『A』字淡赤き光りの線にて畫き出され居れり。されど實は唯だ夫れ空光が雲を貫いて燃ゆるのみ。牧師の心から見出だせし如き定まれる形とてはあることなし、他の罪ある人が見ば又他の字に見えもすべかりしなり

田墨底が天邊を見やり居りし間に、眞珠子は程遠からぬ所に老日、知輪沒の立てるを認めて、之を指し居たりしが、田墨底は一方には天の文字を眺めながら、一方には又老日、知輪沒をも善く見とめ居たり。老人の姿は他の物と一樣に空光のため異れる色を呈せり。彼れ此の時は牧師に對する惡しみの情を隱すことをせざりき。若し此の空光が、世界の大審判の時、希士帖と牧師とを隱るゝ所なく照す光を豫表するものならば、老日、知輪沒は笑ひと嘲りとを以て自己の得物を受取らんとて、其所に立てる惡魔長の役を務め居りしなり。彼の姿は生き〳〵して牧師の眼に鮮かに

見え、空光は消えて、街道や其他の物の影失せし後も、暗の中にあり〳〵と殘り居たり。

牧師は恐怖に心を奪はれ呼吸を押へて『彼は何者ぞや希士帖。我は彼を見て震ふなり、御身は彼の男を知れりや、我は彼を憎むなり希士帖』と言ひぬ。希士帖は老日知輪沒と誓ひしことを思ひ出で、默してあれば、牧師はまた私語きぬ『我れ御身に語らん、我靈は彼を見て震ふぞかし。彼は何人ぞ。彼は何人ぞ。御身我爲に計る所なきか。我は彼男に就て何となき恐怖を有す』眞珠子は言ひぬ『牧師よ、我は彼の何人なるかを告げ得べし』牧師は眞珠子の口に耳をよせて『さらば速に言へ速かに、出來るだけ低く』と言へば、眞珠子は何とか言らしきを響かせはせしが、實は言の眞似なりければ、牧師ます〳〵惑へば幼兒は打ち笑ひぬ『御身我を欺くにや』と牧師言へば、幼兒は答へて『大人は先に大膽ならず、眞實ならざりき、大人は明日日中我手と母上の手を取ることを約束し玉はざりしに非ずや』と言ふ。

此の時醫士は方台の下に來り居りしが『田墨底氏、君なりしか。實に危ふし〳〵。我等學問に耽り、頭は書物の中にのみ埋め居る者は、餘程注意が大切なり、醒めたる時に夢を見、睡れる時に歩む者なれば。來玉へ〳〵。我れ御身を家路に案内せん』と言ひ出でぬ。『如何にして君は我が此所に在るを知りしや』と牧師恐れに充ちて問へば『我は全く何をも知らざりしが、總督ウインスロプ氏の病床に侍し、彼の病を和むるために我が手を盡し居しに、總督は天の家に歸り行きしにより、我も我家路に向へば、折しも奇しき光照り出でたりしなり。兎も角も我と共に來玉へ。さらずば明日の安息日の務めを盡すこと出來ざらん、あゝ此等のために、此等の書物のために、如何に頭腦を惱まされつることぞ。君は勉强を少くし、すこしく休まざるべからず、然らずんば此の種の夜の妄想がますます增長すべし』と老日、知輪沒は言ふにぞ『我れ君と共に歸るべし』と牧師も答へつゝ、苦しき夢より醒めたる者の如く氣の無き風にて醫士の言に從ひ、伴はれて去り行きぬ。

明る日は安息日にて、田墨底は一の説教をなせしが其の説教は其れまでになかりしほど大いにして力あり、又天よりの感化に充たされ居たり。之に感じて其後永く田墨底氏を導師と仰がんと心に誓ひし者も一二人に止まらざりき。されど彼れ講壇より降り來るや、老いたる會堂小使は牧師の前に進み、其の手にせる手套を差し出だして『これは今朝處刑臺の上にて見出だしたるものなり。サタン（惡魔）が先生に惡戯を試みんとて之を彼所に攫ひ行きしなり。されど惡魔はどこまでも盲目なり愚鈍なるかな。清き手は之を蔽ふに手套を要せぬものを』と言ひぬ、牧師は何氣なき体に『有難し』と言ひしが、胸には大いに驚き、昨夜のことをあり〳〵と思ひ出づるまでに心亂れぬ『然り此は我が手套と見ゆ』と言へば『サタンは之を盗みても構はずと思ひしことなれば師は此後手套をつけざるまゝサタンの手を握らざるべからず』と小使は氣味惡く笑み『それは兎に角、師は昨夜現はれし異象のことを聞き玉ひしか。空に赤き文字の現はれしなり、Aといふ文字なりけるが我等は之をAngel（天使）といふ意味ならんと言ひ合へり。何となれば我等の善良なる總督ウインスロップ氏昨夜天使とせられたればなり。此れは必ず何等かの知らせあるべき筈なりき』と言ふ『否、余は之を聞かざりき』と牧師は答へぬ。

第十二章　またも希士帖について

希士帖は此度田墨底と會合して、牧師の變れる樣にいたく心を打たれぬ、牧師は神經全く亂れ、其の知力は却つて病のために鋭くなれる傾き見ゆるに、道德の力は子供よりも弱くなり居れり、希士帖より見れば、田墨底は唯だ良心の責苦のために斯くなれるのみならず、其れよりも外の恐ろしき力のために心を斯く傷つけられつゝあること明かなりき、牧師また何故とは悟らねどおのづと敵と知れる老醫士の手より、自ら救ひ出されんと願ふの餘り、世に棄てられし希士帖にさへも助を求め出でしかと思ひて心の底より牧師に同情を寄せ來り、彼は我が及ぶ限りの助を受くべき

權利、あり、我は彼に對してのみは他人との間に在らざる責任ありと感じぬ。人間世界に在る他の人との間の鎖は悉く打ち切られ居たれど、唯だ一つ互ひの罪の鎖こそ殘り居れ。こは牧師も希士帖も打ち切り得ぬ鎖なりき。されば關係のある所には義務存したりし也

希士帖、弗蘭の社會に於ける地位は此頃は昔と甚だしく異れり。春去り夏ゆきて眞珠子今は七歳なり、母は胸に燃え立つ緋文字を着け居ることゝて、凡ての町民の久しく熟知せる物となりぬ。誰にても人目に立ちながら差し出でゝ人々の利害に手を出ださぬときは、人々は之を尊敬するに至るを常とす。希士帖、弗蘭も亦終に此に至りぬ。何か特別の私のあることなくば、憎むよりも愛するに急なるが人情なり。憎みの情も新たに油を添ふる如き事起らずば、いつしか變つて却つて愛の情とまでなるものなり。希士帖の場合には人々の憎しみに油を續ぎ添ゆる如きことなかりき。彼は少しも世間と戰はず、世間の慣例にも默して從ひ、己が苦みぞ受けたればとて世間に仕返へしすることなく、世間の同情を催促することもなかりき。然かのみならず、其の後絶えて不面目のことなき清き生活は大いに人々の愛を呼びたり。今は人間の前にて失ふべきものもなければ又得んと望み得んと欲するものもなきを以て、彼の德義には名譽心利慾心など少しも雜り居らず、全く清き心を以てせしものなり。

希士帖は全く世間より除け物とせられ居りし時にも、同胞人類のために盡さゞるべからずといふ念を抱き居たり。我が豐かならぬ物を分けては常に貧しき者に施せしが、恩知らぬ者どもは、彼が持ち行く食物や衣服に報ゆるに罵りを以てしたり。全町が疫病にあらされし時希士帖ほど打ちかゝりて之に盡力せし者はあらず。災害起るときは一人のことにせよ一般のことにせよ、希士帖は直ちに我が力を盡し、不幸の家に入り行きては親身の者の如く振る舞ひ、彼が人間界の事に携はるを得るは唯だ此の場合に於てのみ求むべきかと思はしめぬ。外の所にては罪の徽章たる緋文字

は病床にては天の光りある燈明なりき、其の光りは病人の臨終の際にも影をさし、病人の此の世の光りの見納めとして霞める眼に見やらるゝものとなりぬ。希士帖の胸には無量の柔和こもり居て、其れが何時にても求めらるゝまゝ流れ出でゝ盡きざることあらはれ、耻の徽章ある胸は助を要する者に枕せしめて十分快く感ぜしむべきものなりき。彼は自ら慈恵の童貞となりぬ。否己れも世間もかゝる結果を生せんとは期せざりしが、實は世間の重き手が彼を然かく任命せり。緋文字は彼の招命の徽章なりき。人々は希士帖が人を助くること多きよりAてふ文字を元の意味に說き明かすことを厭ひ、之はAble（能力ある）てふ意味なりと言ふに至りぬ。

夜の間は斯く哀れなるものゝ家に留まれども、夜明くれば禮言はるゝをも顧みずして斯所を辭し去り、途にては人々の挨拶受けんためにも頭さへ上げず、若し彼等にして希士帖に物言はんとすれば我指を緋文字に置きて過ぎ去りぬ。是れ彼の誘りなりしも、却つて謙遜の如く見えて人々の心を柔かになし、世間は案外なるほど優しく希士帖を取扱ふに至りたり

大官や賢き人教育ある人等は一般人民よりも早くより希士帖の善良なる感化力を知り居たり。彼等は始め一般人民の僻見に和し、其の僻見に理屈を付けて一途に思ひこみしかば、之を去るには餘程の勞を要したりしが、日を逐ひて彼等の澁く嚴しき顏は次第に慈悲の貌に融けかゝりたり。社會の道德を擁護するといふ地位にある彼等さへ斯かりければ、普通の人は希士帖の惡を全く赦し、進んで彼の緋文字は耻の徽章にはあらで、其の後なせる多くの善き業の徽章なりとするに至りぬ。他國より來りし人に向ひては彼等言ひしならん『君かの刺繍せる徽章つけたる婦人を見るや、彼は我が希士帖なり此の町の希士帖なり、貧しき者に親切に、病めるものに叮嚀に、傷める者に懇ろなり』と。希士帖の緋文字は又却つて身を衛るの印ともなりて、惡人の中に落ちても、之あるが故に害せられざるべく思はれたり。

此の徽章が希士帖自身に及ぼせる功績は又至て深きものあり。彼の性質の凡て花

やかに潤ひある所は、此の燃ゆる徽號のために全く燒き盡されて朽木のやうになり。人目に可憐と見えし容貌さへも同じく變りぬ。一つは衣服の地味ならんことを勉めしにも由らんが、一つは服裝に全く構はぬに由れり。尙又豐かにつや〳〵したりし髮毛さへ切りしや殘れるは分らぬほど帽子にて隱し、一筋だにおくれ毛の輝き出づるを許さぬも悲しき變化なり。されど何よりも希士帖の顏には早人の愛を引き起すものなく、希士帖の姿よしや氣高きにせよ人の情慾を誘ふやうのものなく、希士帖の胸には復た人の情愛に答ふるものなきが此の變化の大原因たり。彼を一個の女たらしめし所は彼より去りぬ。これ斯かる經驗を通り來りし女には有り勝ちのことなり。若し彼にして優しくあらば死ぬべし。若し生き殘らば優しき所は跡方もなく打ち碎かれ居るべし。然り。彼は一たび女たりしも女たらざるに至りしなり。されど何日か又何かの魔力に觸れて一變し、再び女となることなしとも限らざるべし。希士帖が石の如く冷かに見ゆるに至りしは彼が情慾感情の人より思想の人に一變せしに基ゐせり。世間とは全く緣を絕ち、一方は眞子珠を抱へ、如何にしても世間より再び舊の如くあしらはるゝに至るの望みにてはなく又之を願はしき事とも思はぬほど、全く世より獨り立ちせしことなれば、彼は凡ての關係をば殘らず打ち棄て終りたりしなり。彼の心には世の法律はもはや法律に非らざりき。其の時代は劍以て在來の王侯を顚覆せしものの出で來しのみならず、更に膽太き者は其れまで世々傳へて眞理に信じ居れるものは全く間違へる考なりとて根本より之を打ち毀して破天荒の說を唱へければ、大西洋に渡りて米國にまで此の風潮傳はりしもの、米國の祖先たちは之を罪深きことなりとして愼みしを、希士帖は己れの境遇上何にても自由に思想することを得自由思想家を以て居たり。かくて海邊の淋しき小屋は新英洲の他の家には入りも得ぬ此の新客に戸を叩かれしなり

最も際利き思想を有する人は社會が今日のまゝにてあるも別に差し閊えありと思はぬものなり。其の思想を社會にあてはめんとすればこそ衝突も起れ、唯だ忘想のみ

にて裸になし置かば社會の現狀に滿足するを得。希士帖又此の一人なりき。されど若し眞珠子なかりしならば決して斯くはあらざりしなるべく、或は女傑アーン、ハッチンソンと相並んで、新宗派の開山として歷史に現はれしやも知るべからず。彼は女預言者たりしなるべく、而して淸敎徒植民地の基礎を危ふくするものなりとして死刑に處せられしなるべし。されど幼兒の敎育のために以上の思想に關する母の熱心は冷されぬ。神は小さき女兒の身に於て婦德の芽と花とを希士帖に托し、困難の雨風の中に之を養ふの責任を負はせたり。凡ての物彼に逆ひぬ、世界は彼に敵せり。幼兒の心が既に惡しき所を藏めて誤つて生れしものなることを常に表はし、希士帖をして此の兒の生れしは善なりしか惡なりしかを疑はしめしほどなりき。女てふものに付て希士帖は情なき疑問を起すことも屢々なりき。たとひ幸福を極むるとも、女と生れて生き甲斐のあるべきか。已れの身の上より言はば疾くより然らずと決し居りしなり。思想することは男をも女をも靜かにすれど又悲しくす。希士帖は望むべからざることを望み、先づ社會の組み立てを一旦取り崩して立て直さゞるべからずと思へり、其の時は男女と云ふ差別も根本より今とは異れるものとなりて、女も適當の地位を有するを得べし、さて改良は出來るとしても若し女自身にして今一層變化し、其の內にある輕く品やかなる所全く蒸發し去るに至るまでは、女は決して此の改良の利益を享くる能はざるべし、而して此の女の內にある輕く品やかなる點こそ、女の女たる所以をば成し居るものなれ。婦人は決して思想を實行して此等の問題を片付けんとはせず。其等の問題は解決さるべきものならずして、唯だ一方に蟠れるのみ。心が絕頂に上り來りていよ〳〵といふに至れば其等の問題は忽ちに消滅す。心の常ならずなれる希士帖は斯くて迷宮にある如く、乍ちにして登り難き絕壁の下に行きつまり、乍ちにして深き淵に歸り行く思ひなし居たり。見わたせば四面には唯だ凄まじき光景あるのみにて家もなく隱れ家もなし。時には眞珠子を直ちに天に逐ひやり、自ら其の後を追ひて來世にて受くべき相當の報いに任す

る方善からずやといふ恐しき思ひに襲はるゝこともありき

其の頃には緋文字は其の役目を果さゞりし也

さりながら彼の夜田墨底と相合ひて俄かに思ひつけることあり、此に一つの爲さんと志す仕事を見出たせしが、之を達するためには骨折りと犧牲をなすも其の甲斐ありと考へぬ。彼は牧師の苦み闘ひつゝある無限の不幸を目擊し、牧師が心はあはや狂亂といふ間際まで來り居れるを見たり。人知れず悔い痛む情のために非常に影響を受け居れるは勿論なれど、牧師を助けんと申し出でし醫士の手には毒も雜りて差し出だされ居ること疑ふべくもあらず。知らぬ敵は友人補助者の如く裝ひて絶えず彼の傍にあり。田墨底の心を操つり得る機會を攫めり。希士帖は牧師を斯かる地位に置きし原は、我身に眞實と勇氣と忠實との缺け居りしに由らずやと疑ふを禁ずる能はざりき。唯だ希士帖をして之も己むなき次第と思はしめし所以は牧師を彼と同樣なる恥にかゝらざらしめんには老日、知輪沒の計を傍觀するの外に途なきことを見たればなり。かるが故に希士帖は此の時まで二途の内にて實は不幸の甚だしき方を撰び、老醫士の復讎の手に牧師を委せ置きしなるが今や遲蒔ながら、出來得る限り其の誤りを取り戻すの決心を起しぬ。長き年月の間隨分辛き試みに揉まれたれば希士帖今は彼の昔恥露しの夜、半ば狂はしき心もて、老日、知輪沒と獄中にて面會せし時の如くには、もはや醫士に會ふに不都合を感ぜずなれり、實に希士帖は次第に高き方に上り、老日、知輪沒は次第に低き方に下り、今は同じ高さにあるか、或は醫士が其の復讎心のため一層希士帖よりも低かるべしと思はれたり。

終に希士帖弗蘭は其の以前の夫に會ひて、彼が手の内に入れ居れる餌を救ひ出たさんため、己れの力を盡すべしと決心せしが、機會は待つ間程なく出で來りぬ。或日の午後希士帖眞珠子を携へて、半島の人なき所を歩み居りしに老醫士が片手に籠、片手に杖を持ち、身を屈めて藥にすべき根や草を求めつゝありしを見出しぬ。

第十四回　希士帖と醫士

希士帖は眞珠子に『水汀に行きて貝殼や海草を拾ひて遊べかし母は彼方の醫士と暫く話すべきことあれば』と命じければ、眞珠子は鳥の如く駈け行き、裳かゝげて其の小さく白き脛を露はしつゝ汀に下り行きぬ。干汐の後の水は所々に溜りて、鏡をなし居れば眞珠子は之に覗きて我が顏の影を眺めんとせり。溜の中を見れば髮輝き、眼に笑の溢れし小娘の姿あるにぞ、遊び友達なき眞珠子は手招きして共に走り廻らばやと勸めしも、其の小娘も亦彼方より手招きして『此所こそ善けれ、此の水溜に入り來よかし』と言ふか如し。眞珠子は直ちに入り行けば、水は脛の半を沒し、足首は其の底に白く見えしが、尙其れよりも遠き下の方にも、動ける水に搖き浮べる碎けし笑顏ぞ匂はしげに見られける

母の方に醫士は挨拶して『妾は御身に一言したきことあり、我等互ひに取りて重大

の件なり』と言へば、醫士は屈め居りし身を伸して『老日、知輪沒のために一言すと言ひしは希士帖夫人なりしか。其れは恭し、我は御身の噂を所々にて聞きぬ。昨夜のことなり或る總督は御身のことを話し居たるが、窃に我に告げて御身の上のこと今評議中なりと言へり。其所なる緋文字を取り去るべきや否やと今穿議しつゝあるなり。我は之を斷行すべきことを總督に勸め置きたり』と言ふ、希士帖は靜かに『此の徽章を取り去ることは總督の私情に由りてすべきものに非ず。妾にして若し之を去らるゝ價あるものならば緋文字は無意味のものとなるべきなり。然らずんば着けながら他の意味を表はすものと化するなるべし』と言へば『然らば之を着けよ若し御身に似合ふものならば着けよ。女は己が形をつくるために嗜むことをせざるべからず。其の文字に花やかに飾られて、御身の胸には丁度恰好なり』と老日、知輪沒は言ひぬ

希士帖は話しの間つら〳〵老人を見てありしが、過ぐる七年の間の變れるにはいた

く心を打たれたり。之は年のますゝ寄りし故に非ず、固より寄る年波は爭はれぬ跡を印し居れど、彼はよく齡に勝ち尙ほ元氣を保ち居たり。然れど學者らしかりし容貌は全く消え失せて、今は物を獵るが如き色溢れ居れり、彼は笑顏を以て此の色を隱さんとする如かりしも其は隱され果せで、人目にもつくほど顏に現はれ居たり。彼の眼よりは又時々赤き光りのちらつき出づることあり、其の靈燒けて胸の中にていぶり居れるものが、時に或る情熱のために煽られて一時燃え上ることあるが如かりしなり。此の焰を彼は能ふ限り速かに押へつけ、何事も起らざりし体を裝はんと勉めたり

人は適宜の時間に惡魔の仕事をしさへすれば、自ら惡魔を化し得る力あるものなることは、老日、知輪沒に由て明かに證せらるべし。此の不幸なる人は七年の間、田墨底の苦しみに溢れし其の激しき苦みに油を添ふることを力め、之に打ちかゝれるため惡魔に化する如き樣とはなれり。緋文字は希士帖弗蘭の胸の上にて燃えしが、知輪沒の上にも亦墮落あり。而して其の責任は希士帖にありしなり。

『何故然かく一心に我が顏を見入るや』と醫士に問はれ、『泣くの涙ならば妾泣かんとするものゝあればなり。されど其れをば問はずもあれ。妾が一言したきは今一人の不幸なる人のことなり』と言へば知輪沒は左も我が意を得たりと云ふ如き面地をし、此の事に關して唯一人の話對手たる希士帖と語らふを喜ぶものゝ如く『彼に付て何を言はんとするや』と叫び『隱さず言はんに我心は彼の紳士の事を考へて騷ぎ居りし所なり、されば遠慮なく語れかし、我答ふべし』と言ふ。希士帖は『七年の昔、彼等が共に語らひし時、御身は我と御身との以前の關係を人に秘せよと强いて約束せしめたり。彼の人の生命と名譽とが御身の掌中にありしを以て、我は御身の求めに從つて默し居るの外取るべき途なしと思ひしが、さる束縛を受けしは我が過ちなりしなり、何となれば他の人間に對する義務は凡て放棄し去りしも、彼の人への義務のみは殘れり。然るに我は君の言を守るに由て之を取り失ひつゝありしことを感じ

つきぬ。其の時より此の方君ほど彼の人に近づきしものはなく、君は彼の人の跡をひた蹣けに蹣けて、眠れる間も醒めたる間も其の傍に在り、彼の人の思想を探り、彼の人の心の底を覗き見ぬ。君の手は彼の人の生命を捉まへ日々生かし置きて死を味はしめつゝあり。然も彼の人はまだ君を知らぬなり。君を許してかゝることをなさしめし我は誤れることをしたるものなり』と言ひ出でしに、知輪沒は『御身は其れを誤りと思ふか、我れ此の男に指さしせば彼を講壇より引き下して獄に投ずべかりしなり。否恐らくは次で絞首臺に』と言ふを『却つて其れが善かりしなり』と希士帖は答ふ。知輪沒は又『我れ彼に何の惡をなせしぞ。我が此の不幸なる僧侶に盡せし如き盡力は王侯の謝禮を以てしても買ひ能はざる所なり。若し我が助けなりとせば彼は御身と共に罪を犯せしより二年たゝぬ内に死ぬべかりしなり。何となれば彼の精神は御身の如く強からず。緋文字の如き重荷を負ふ力を缺ぎ居たり、我が秘密を發き得べかりき。然も自ら足れりとせり、我れ如何に彼がために力を盡せしぞ。

彼が今尙此の土の上に息をなし、よろぼひ廻れるは全く我が影なり』と言ふを『直ちに死し方が善かりしなり』と希士帖又言へば老日知輪沒は其の目に心の火をちらつかせつ『然り其の通りなり。彼は直ちに死し方が善かりしなり、未だ曾て此の男の如き苦みを受けし者はあらず。而も其の讐敵の目の前に於て受くるなり。彼は我を感づきぬ。一種呪ひの如き力の身に投じかゝるを覺えたり。彼は友人ならぬ者の手に心の糸を操られ、害を加ふべき隙を探せる者に其心を覗かれ居ることを知りたり、されど其の手と其の目とが此の老日、知輪沒の手と目なりとは彼は知らず。僧侶に普通なる迷信もて彼は自ら後世にて受けんとする報いの手初として心を惱まされ苦しまされんため、惡魔の手に付されしなりと思へり。されど其は我影なり。彼がために最も深く害されたる我、唯だ彼に讐を復さんためにのみ生くるに至りたる我の近き影なり。然り、彼の考へし如く彼の影身にそひ居りしは惡魔なり一たびは人の心もちし人間なりしが、其の特別の苦のため惡魔になりしものなり。』

醫士は斯かることを言ひ居りし間に、恐れの色を浮べて其の手を擧げたり。其樣さながら鏡に對して我が影を見んとして却つて知らぬ恐ろしき物の映れるを見たるかの如かりき。これ幾年にして一たびあるか分らぬことなるが、人が己れの心の如何になり居るかを自らありのまゝに見とめし時なり、醫士は今始めて己れを知りしなり。

『君はもはや十分彼を苦しませしに非ずや、彼は既に負債を拂ひ盡せしに非ずや』と希士帖老人の容子を見とめて言へば『否々、彼はます〳〵負債を增せり』と老人は言て常の如く沈める色に復り『希士帖、御身は九年前の我を記憶するか。其の時も我は既に老い居たり、齡傾き居たり、されど我が一生は知識を增さんため、又人類の幸福を進めんために獻げたるものにて、我は熱心、精勤、思考、靜謐をのみ事としたり我よりも平和にして罪なく且つ便利多き生活を送りし人は殆どなかりしなり。御身之を記憶するや、御身は我を冷血の人とすれど我は他人のために多く思ひ、自己のために少く考へ、親切に眞實に、正しく、常に情愛を抱きし人なりしに非ずや、如何と』問ふ『然り其れよりも尙ほ優れたる人なりき』と希士帖いへば、彼は希士帖の顏を見入り、己が內にある凡ての惡念悉く貌の外に流れ出づるを堰きも止めぬ風にて『而して今は如何、我は既に我が何者なるかを悟れり。惡魔なり。誰がかくはせしぞ』と言ふ。希士帖は打ち戰きつゝ『其は我身なり。彼の人よりも我身なり。君何故に我には讐を復し玉はざる』と叫べば『御身をば緋文字に委せたり。緋文字にして我が讐を復さずとすれば、我はもはや讐を復し得ぬなり』と答へ、微笑しつゝ指を文字の上に置けり。希士帖『之は御身の讐を復しぬと言へば『我も然か思ふ、さて御身は彼の男に付て何を我に計るや』と醫士は言ふ。希士帖は確乎として答へぬ『妾は秘密を露はさざるべからず。彼の人は君の正体を知らざるべからず。其の結果如何は妾の知らざる所。然れど妾が彼の人に借れる債は終に拂はざるを得ず。彼の名譽も地位も將た生命も君の手の內にあり。緋文字は妾を敎へて眞理に從

はしめんとせり。其の眞理は固より靈に燒け入る熱鐵の眞理ならんも。妾は又君の憐れみを乞ふほどに彼の人の生き延びることを利益なりと思はぬなり。君の思ふやうになせかし。彼の人に取りても我に取りても君に取りても善てふものは世にあらぬなり。眞珠子のためにも然り。此の不幸の藪の中より我等を引き出だす途とては世にあらぬなり。』流石の知輪士も希士帖の言には全く絶望の中に氣高き所ありしに感じ『御身は憐れむべきかな。御身には大いなる所ありき。我の愛よりも善き愛に早く出會ひ居りしならんには、斯かる惡は起らざりしならん。我は御身の性質の中に徒消せし美所を思ひて御身を憐れむ。』と言ふを、希士帖は『我は又君を憐む。賢く正しき人を惡魔に化したる憎みの念を思ひて。君は之を心より洗ひ出だして再び人間に歸るの心なきか、彼の人のためならずとも君自身のために、人の罪を赦して此の上の罰をば神に委せ玉へ。我は今我等に取りては善なしと言ひしが、實は然らず。君のためには、然り君のためには善をなすの餘地なきにしもあらず。何となれば深く害を蒙りしは君にして、之を赦すの自由君にあればなり。此の唯一の特權を君は棄てんとし玉ふか。此の價の量られぬ利益を取り玉はぬか』と言へば老人は面を嚴しくし『人を赦すといふ如き力は我には與へられ居らず。昔信ぜし信仰を今思ひ出でしが、其れに由て我等の自らなす所、我等の外より受くる所のことは悉く説明せらるゝなり。御身は先づ禍の芽を植ゑたり。されど其の後のことは何もかも自然の勢のみ。御身も我も深く罪有りとすべからず。此れ運命なり。黑き花咲かば咲かせよ、もはや歸れかし、御身の思ふやう彼の男と計れ』斯く言て其手を振り、再び草を集めかゝりぬ。

第十五回　希士帖と眞珠子

斯くて老日、知輪沒は希士帖弗蘭を後にして地上に屈みかゝりつゝ去り行きぬ。其の貌は不具、其の顏はいつまでも人の目につけり、彼は其所此所にて草を集め根を

拔きては之を其の携へし籠に入れしが、其の屈むときには灰色の髯は地に届きぬ。希士帖は老醫士の蹈みし所は初春の柔かき草枯れはせぬか、彼の足跡の列は青き莚の上に燒けたる如くなりて殘りはせぬかと思ひつゝ、暫く彼を見送りぬ。老人が熱心に集むる草は如何なる種類のものならん。地は彼が指の下より有毒の灌木を出しはせずや。或は善き植物も彼の觸れしため惡しきものと化りはせずや。太陽は彼を照らすにや。彼れ身を向きかゆれば何れの方へも氣味惡しき影の共に動き行くやうなるが、そは眞に然るにや。而して今は何處へは行かんとするや。彼れ急に地に沈み入らんとするや、さらば其の暴して殘せし跡には後に至て種々生し得る限りの醜草出來て青々と茂るならん。或は彼れ蝙蝠の翼ひろげて飛び去らんとするか。然らば其の高く上るに從つて其の形はますゝ見苦しくなるべし。希士帖かゝることを思ひ、尙も老人を見やりつゝ『罪か知らねど妾は彼を憎む』と獨り語ぬ。自ら此れは惡しきことなりと思ひて我心を叱りはせしが、此の情を押へも減しもなし得ざりき。されど之を力めて消さんとして希士帖は往にし昔のことを思ひ出でぬ。あゝ此所より遠き國にて其の時に彼は夕暮書齋より出で來り、我が家庭の火の燃え居る所、妻の笑顏の見ゆる所に座り、長き間淋しく書物の中に埋れて心は氷り果てたれば、希士帖の笑顏にて暖まるの要ありなど語りしが、斯かる光景は確かに幸福には相違なかりしに、然るに今や之を最も厭はしき記憶の一つに數へねばならぬ身とはなりにけり、希士帖はよくも斯かる光景のあり得しものかな、よくも彼と結婚し得たりしものかなと怪しみ、何故彼の手に握られ彼の手を握りかへし、彼と笑み合ひなどして後に悔うるやうなる大罪を犯しけん。何よりも希士帖の處女氣に乘じ、甘く說きて希士帖の心を先づ奪ひ取りし老日、知輪沒こそ最も咎むべき科をなせるなりと思ひぬ。

『然り、我は彼を憎む。彼は我をわたしぬ。彼は我が彼に加へしよりも甚だしき惡を我に加へぬ』と希士帖は叫び、暫くは心の中に暗の入り來る思ひして見送り居しが、

齊士の姿はやがて見えずなりしにぞ、聲を揚げて眞珠子を呼び戻しぬ。

眞珠子には水溜に映る我影を招き合ひては樂みしが、其れも暫し、彼は樺の木の皮にて舟を造り、貝殼を載せて之を海に流し、次ては蟹を捉へ、幾つもの章魚の枕にて勳章を造り、又海月を日光に露しなどし、更に滿潮に先駈け來る泡を取りて之を空にまき散らしては再び手にて捕へんとし、又前掛一杯に石を拾ひては鳥を逐ふて岩をつたひ行きぬ。されど彼の投げし石が一羽の鳥にあたりし如く思はれて鳥が羽をかへして落つるを見るや、彼は惡しきことをしてけりと思ひて此の戯を止め、終に海藻を集めかゝりしが、彼は其等を頸や肩や頭にかけて飾りとなし、最後に青き藻を以て胸にAの字の形に着け自ら眺めやりて樂み居たり

丁度此の時母の叫ぶ聲聞えしかば、眞珠子は鳥の如く身輕に飛び立ち希士帖の所に駈け行き、踊りつ笑ひつして我胸の飾りを指しぬ。希士帖は暫く無言の後、『眞珠子、青き文字よな。其は御身の幼き胸につくべきものたらず。されど御身は母が着けさせられたる此の文字の意味を知れるや』と言ふに『知れり、大なるA字なり、母上は讀本にて我に敎へ玉へり』と答ふ、希士帖は幼兒の顏を一心に見入りぬ。果して眞に此の意味を知れる所ありや否や、其れが確かめたさに『何の故に母は此の字を着けるやを知れりや』と言へば幼兒は愉快げに母の顏を見て『眞に知れり。其は牧師が胸の上に手をおくと同じ理由なり』と言ふ『其の理由は何ぞ』と希士帖は幼兒の言の突飛なるに笑ひしが、次で靑くなり『此の文字が母より他の人の心と如何の關係ありや』と問へば、幼兒は眞面目になりて『否我は知れるだけを言へり、母上は今話し居りし彼所の老人に尋ね玉へかし、彼は告げ得べし。されど母上よ、此の文字は何の意味ぞ、何故母上は之を胸につけ、牧師は又手を胸におくや』

幼兒は彼の性質に稀なる熱心を以て母の兩手を取りぬ。あゝ幼兒の心は同情の落ち合ひ塲所を探して、如何にもして之れを見當らんとしつゝあるなりと希士帖は思ひぬ。其れまでは希士帖固より幼兒を愛せしも、幼兒の方よりは唯だ春の微風の賴

み甲斐なきが如きものゝ出でゝ觸るゝを覺えしのみ。是れ幼兒の性質なりと思ひ居しが、今や彼も其の齡に達せしものと見えて、人の心を思ひやり、人の友となり、人と悲しみを共にするほど、心の固まり來りしなり、固より幼兒の性質のまだ定まらぬ時にも、物に恐れぬ所、決斷の强き所、自ら信ずることの深き所、僞りの籠れる物を賤しむる所などは、初めより備はり、又情愛といふものもありたるなり。之と共に母に承けし惡しき所も大きくなる憂ありければ、如何にしても此の兒の心をば高尙なる所に成長せしめざるべからずと希士帖は思ひたり

眞珠子は生れながらにして緋文字の謎を解かんとする癖を有したりしが如く、西東を弁ふる頃より此の天職に取りかゝりしなり。希士帖は之を以て神の正義と應報との攝理なりと思ひしが、之には又惠みの心も籠れるならんとは今が今まで考へ及ばざる所なりき。若し眞珠子を以て天よりの使命をも負ひて生れしものと信せば母の心を墓と化したる悲を和め、且つ昔は激しく今は其の墓の如き心の中に封せられたる情慾を押し殺すの助けとならざるべしとも限らざるなり。

希士帖は今かく思ひ出でしが、此のことは宛から耳に呟かれしことの如く明かに考へられたり、眞珠子は先程より母の兩手を捕へ、其の顏を仰ぎ一度問ひ二度問ひ今又三度目に問ひ居たり『此の文字は何の意味ぞ母上。母上は何故に之を着け玉ふや、而して又牧師は何故に其の手を胸におくや』と、希士帖は心の中にて『何と言はるべき、此の兒の同情を買ふためには之を言はねばならずとせば、我は同情を買はずもよし』と思ひ口に出だして『愚なる兒よ、何たる問ぞ、世には子供の問ふべからざること多きぞかし。牧師の心に何があるや我の知るものかは。緋文字のことを言へば、我は金の糸あるが故に之を着くるなり。』と言ひぬ。七年の間、希帖士弗蘭は決して胸の徽章を言ひ紛らはして僞り者とならざりき、されど此時といふ此時は惡き心の入り來り居りしため、斯く言ひ紛らはしぬ。眞珠子の顏よりは急に其の疑を質さんとする熱心一時消え去れり、

されど眞珠子は此のまゝにては止まざりき。母と家路に歸る途中にて二三回、夕飯の時にも數次、床に寢せつけらるる時にも、又一たびは眠りしかと見えし後にも目を悲しげに見開きて之を問ひぬ。『母上よ。緋文字は何の意ぞ』と。

次の朝目さめて頭を枕より離すや、何よりも先に問ひ出でしは又もや『母上〳〵。牧師は何故に胸の上に手をおくや』との問なりき。母はそれまでになく不機嫌にて『默りぬ愚かの兒よ、母を揶揄する勿れ、言ふこと聞かすば暗き所に閉ぢこむぞかし』と答へぬ。

第十六回　森の逍遙

希士帖、弗蘭は如何にしても田墨底に其の身の間近に寄り居るもの〻正体を知らせたき心に堪へられず、牧師が習慣として海邊や森の中を逍遙することあるを知れば、其の時之を告げんと折りを窺ひ居たり。實は牧師の書齋におとつれて語るも少しも其の名譽を傷くるの憂ひはなかりしなり。何となれば希士帖の緋文字の色よりも尚赤き罪を犯せる者ども〻牧師の密室に至りて懺悔をなし居たればなり、されど希士帖は老日、知輪沒の陰に陽に妨げんことを恐る〻と、また一方には自己の心が人には感せられぬ狐疑を抱けると、今一つは牧師と二人にて語らふには如何にしても窮屈の思ひするやうの狹き所に堪へられぬ心地するとにて、蒼空の下にてこそ會合せめと決心したるなり、

終に折こそ來りたれ。希士帖或る病人をば看護し居りし時、病人に付て祈りのために牧師を聘せしに、折しも牧師は前日より使徒エリオットといふ印度人の改宗者を其の邑に訪ひ行きて在らざりしこと分りたり。明る日の午後には多分歸るべき筈なり。希士帖は此を以て次の日眞珠子を携へて出で行きぬ。此の時は寧ろ眞珠子を伴れずもがなと思ひしも已むを得ざりしなり、

途は唯だ人の通りし跡に過ぎぬものにて、大木蔚々と蔽ひ塞がり、空さへよくは見

えぬ有樣に、そゝろに希士帖をして我が心の迷ひし暗路の樣を思ひ出さしめたり、其の日は冷く物悲しき日にて、頭の上は灰色の雲ひろがりて其れが微風のために少しく搔き亂され、日の光りを時々行くてに落せり。幼兒は言へり『母上よ、日の光は母上を愛せず。母上の胸にある物を恐るゝが故に走り去つて隱るゝなり。見玉へ、少し離れし彼所にては戯れ遊びつゝあり、母上は此に立ち止りて居玉へ、我れ走り行きて捕へん。我は幼兒なれば光りは我をば逃れまじ。何となれば我は胸にまだ何をも着けねば』と『決して着くべからず』と希士帖言へば駈げ出さんとし居りし幼兒は足を止めて『そは何故ぞや。我れ成長して年頃となりても着けまじきにや』と言ふ『走り行きて光を捕へよかし日光は逃げ行かん』と希士帖答ふれば、幼兒は大股に歩み出で、希士帖は其の樣の可笑しさに笑ひしが、幼兒は實際日光を捕へて之を浴びつゝ其の中に笑ひて立てり。光りは暫く幼兒と共に戯るゝを喜ぶ如く母が近づきて其の中に蹈み入らんとするまで一所を照し居しりが、眞珠子には頭をふりつゝ『今に去り行かん』と言ふを、『我は手を伸べて其の幾分を捕へつべし』と希士帖笑つて答へ、捕へんとせしに光は忽ち消えぬ、否眞珠子の姿に涌き立ちつゝあるさえ〳〵しき色より見れば、眞珠子が光を身に吸ひ取りしにやと思はれ、吸ひ取りしものなら、此所よりも一層暗き蔭に入らん時又之を外に出だすの折あるべしと希士帖は思ひぬ。

『來れ森の中に座りて少しく休まん』と希士帖言へば『我は疲れ居らず母上は座り玉ふも可なり、暫く話しをして聞かせ玉はゞ』と幼兒は言ふ『話しとな、何の話ぞや』と言へば幼兒は母の外被を捉らへて『黑き人の話なり、彼は森の中を徘徊し、其の手には重き大いなる書物を提へ、森の中にて逢ふ人ごとに其の書物と鐵のペンとを差出だし、其の人々をして己が血を以て名を之に記入せしめ、而して後黑き人の印を其の人々の胸の上に押すとかや、母上は其の黑き人に會ひしことありや』と言ふ。是れ當時の人々の迷信なりければ、希士帖は『誰が此話を御身に敎へしや』と問へ

ば『昨夜母上が看病せし家の隅にて、或る老婦人が眞珠子は眠り居ること、思ひて傍にて之を語り居たり、其の婦人言ふには多くの人々は此の森にて其の黒き人に會ひ、己が名を記し黒き人の印を受く、彼の意地悪き必賓の如きは其の一人なり、母上の緋文字も其の黒き人の印なり、母上が此の森にて暗夜に其の黒き人に會ふときには緋文字は赤き焔の如く燃え立つ由語りぬ。『眞實なりや母上、母上は夜中に彼と會はんとて出で行き玉ふにや』『御身目さめて母の出で行しを見しことありや』『記憶せず、若し母上が我一人を小屋に殘し行くを恐れ玉はゞ我をも伴ひ玉へ、我れ喜んで行かんと欲す。されど母上、眞にさる黒き人ありや、母上は之に會ひしことあるにや。此れは其の印にや』『若し御身に一度告げなば御身我を安からしむべきか』『然り悉く告げ玉はゞ』『我は生涯中に一度其の黒き人に出會ひぬ。此の緋文字は其の印なり』

斯く語りつゝ若し人の通りて見らるゝこともやとて母子はます〳〵森深く分け入り、昔仆れし大木の今は朽ちて苔むし、地より高くなりたるが上に座しぬ。此所は狹き谷間にて、兩側よりは枝葉茂りて蔽ひかゝり、其の中を一條の流れ、落葉を分けて流れ行き、其れが堰かれては所々に淵をなせり。目を放てば日光を反射して走り行く其の流れが暫くは見やらるれど、直ちに幹や藪や苔むせる大岩の陰になりて行方知れずなり居れり。されど其の咽べる音は靜けく悲げに聞えわたれり、

眞珠子は暫く谷川の咽ぶを耳傾けて聞き居しが『あゝ愚かにして五月蠅き谷川なるかな、何が故に然かく悲むや。心を引き起てよ、いつも〳〵嘆じつぶやくを止めよ』と叫び出だしぬ。されど谷川は其の聲を絶たんともせず。眞珠子は終に『母上、此の悲しげなる谷川は何を語り居るや』と問ひ出でぬ、母は答へて『御身もし悲みを抱くならば谷川は之を御身に告ぐべし。母の悲みをば母に告げ居るぞかし、されど眞珠子よ、今木の枝を押し分けて人の來る音す。御身は暫く獨りにて遊び、母が其の人と語らふ間彼方に行き居れかし』と言へば『黒き人なりや』と眞珠子は問ふ、

母は再び『行きて遊べかし、されどあまり迷ひ行く勿れ、母が一聲呼ばゝ直ちに歸り來るやう心せよ』然り、されど黒き人ならば我をして此に留まつて一目見せしめよ』希士帖はいらつて『可笑しき兒なるかな行きね。黒き人には非らず、木の間より見らるべし、牧師なり』幼兒も『さなり〳〵、母上よ彼は胸の上に手をおけり、牧師が黒き人の書物に名を記せし時、黒き人が彼の胸に其の印をつけたるが故なるか、されど牧師は何故それを胸の外面には着けざるや母上の如くに』と言ふ『行きね〳〵。又いつか母を苛めよかし、されど行くとて遠く迷ひ行くなかれ。谷川の鳴る音の聞ゆる所に居よ』幼兒は流れを傳ひて上り、水の聲に和して歌うたひ行きしが、谷川は慰むる風も見えず、此所に此の深き森に悲しき出來事の起れりと知らすが如くなりければ、眞珠子は谷川には全く取り合はぬ心となり、菫や翁草やを集めかゝりたり。

幼兒の行きし後希士帖は一足二足徑の方に歩み寄りしが、尚木々のために徑とは隔てられ居たり。牧師は途を進み來りしが途上にて切取たるらしき杖に倚り、いとも疲れて、人目の中にては顯はさゞりし氣投けの風をなし、運ぶ足さへもいと懶うさげに、今にも突き座り其のまゝ干物にもならんかと思はれたり。希士帖の目には牧師の苦痛の樣とてはもはや少しも見えず、唯だ胸に手をおけるあるのみ。

第十七回　牧師と會員

希士帖は呼ばんとすれど聲立たず、牧師は遲足ながら行き過ぎんばかりになりし時、辛うじて『亞撒、田墾底〳〵』と始めは微かに後稍高く呼び立つれば『誰か物を言へるか』と答へし牧師は急に心を引き締りて身をも眞直にして立てり。聲せし方に目を放てば晝尚暗き所に立てるは女が影なるか。彼は絶えず我が心の中より脱け出でし幽靈につけ廻され居りしかば、斯く疑ふも理なり。されど近つけば緋文字見えたり。希士帖。希士帖、弗蘭。御身なるか。御身は生き居れるにや』といへば『さ

なり。過ぐる七年間に於けると同じく生けり。而して亞撒、田墨底よ、君は生けるにか』と希士帖は言ひぬ。互に人の身の現實にて此に在りや、否我身さへ現實にて此にありやを疑ひ合へるも理り。二人は此の薄暗き森の中にて出會ひしは、宛がら二つの相親しみてし靈が、黄泉の國にて始めて相會ひ、互ひに相疑ひ恐れて震ひながら佇むにも似たりしなり。これ迄ためしなき斯かる瞬間には忽然として過ぎ去りしことゝ其間に感じたることゝがむら〳〵と思ひ出されしかば、二人は共に心を押し潰さるゝ心地せり。亞撒、田墨底はやう〳〵にして其氷りたる手を差し伸ばし、同じく氷りたる希士帖の手を取りぬ、手を取り交はせば忽ちにして始めの氣味惡しき感じは消え、二人は兎に角同じ世界の人間なりと思ひ合へり。

一語も續いて出でざりしが、熟れが導くともなく、無言に頷き合ひて二人は希士帖の出で行きし木立の陰に入り行き、希士帖母子が腰かけ居りし朽木の上に共に座しぬ。語り出でゝも始めの程は唯今日の天氣のことより、互ひの健康を問ひ合ふ位なりしが、次第に進みて目下二人の心を惱まし居る事に移り行きぬ。是れ久しく運命と事情とに二人の關を隔てられ居りし故、直ちに立ち入りたる事に話しの移らぬなりと知るべし。暫くして後牧師は希士帖弗蘭を見入り『希士帖御身は心安まりしや』と言ひ出づれば、希士帖は氣味惡く打ち笑みさま己が胸を伏し見やりて『御身は』と問ふ。『少しも安きを得ず。唯だ失望の外に何も得ず。我が心と我が生活とを以てしては此の失望の外に何をか望み得べき。我れもし無神論者か良心なき者か獸性を有するものかならば、疾くに心の安まりし筈なり、否始めより平和を失はざりしなり。されど我が心の中には善良なりし所を神より與へられ居たれば、其の所が却て我を苦しむるものとなりぬ。希士帖我れほど不幸なるものはあらじ』と牧師言へば『人々は御身を敬ふ、御身は彼等の中にて善き事をなし玉ふ。其れにても慰めを得ぬにや』牧師は苦き笑ひして『唯だ不幸を加ふのみ。我れ善をなすと雖も我は之を信せず。之は僞りならざるべからず、我が如き墮落せる靈性如何にして他人の靈魂の贖

ひのためになり得べき。汚れたる靈性如何にして人の靈魂を清むるの用をなし得べき、人々に敬はるといへど却て賤め惡まるゝをこそ願へ。我は講壇に立て、人々が天の光を望み得るが如くして我が顏を見る目と見合ひ、眞理を渴望して我言を聖靈の言のやうに聽き入る群を見、而して省みて彼等に崇めらる我が心の中の黑き實狀を見ざるべからず。御身は之をしも慰めと思ひ得るや、我は心の苦しき餘り我が外貌と我が實際との矛盾を笑ひしことあり、サタンも之を笑へり』と言ふ。希士帖はやさしく『其は誤れり、御身はいたく悔改め玉ひぬ、御身の罪は昔ありしもの長き昔ありしものなり。現在の生活は人々の見る如く清し、後悔して斯く善き行をなし玉へるに、其れは何の甲斐もなきにや。平和をも後悔に由て得べき筈なり』『否と よ〳〵。我が働き何ものぞ、我に取りて何にかならん、懺悔は我れ十分之をなせり。されど罪を贖ふの行とては絕えてせざりき。我は今まで斯く無垢の假面をつけ居ることなく、ありのまゝを人々に示すべかりしなり、希士帖御身は公然と緋文字を着けて幸なり。我が緋文字は人の知らぬ所にて燃ゆ。希士帖よ七年の苦痛を經し今、我が眞相を知れる御身と斯く相見かはすことが、如何ほど我を慰むるか、御身は察し得まじ。我れもし一人の友人か大敵かありて、凡ての人に賞讃せられて我心傷める中に、我身のありのまゝにて其の人の目にあらはれ、此上もなき惡人と知られ得ることとありしならば、我が靈は生き居ることを得しならん。これだけにても尙眞實てふもの我を救ひしならん。然れども今は凡て虛僞なり、凡て死なり』

希士帖弗蘭は田墨底の顏を見入りはせしものゝ何をも得言ひ出さでありしが、牧師の言は實に希士帖が語らんとせし問題に觸るゝにぞ、希士帖は心を勵まして『御身の望み玉へる如き友人、即ち御身の罪のために泣くものをば、御身我に於て見玉ふべし。』と言ひてまた言ひ淀みしが、力めて『御身は長き間今言ひ玉ふ如き敵を有し玉へり、而して同じ屋根の下に之と共に住み玉へり』と言へば、牧師は慾いて突つ立ち、呼吸をつまらせて胸を搔きむしり『何と言ふ。一人の敵とや。而して同じ屋

根の下にとや。何の意ぞ其れは』

希士帖今は我が知りながら害意あるもの丶手に此の不幸なる人を委せ置きしことを痛むの心起り居れり。初めの程はあまり之を考へもせず、己れの方が非常に苦み居たれば、牧師をも我よりは輕き苦みに苦まするも可なりと云ふが如き思ひまでしたるやうなりしも、彼の暗夜に彼と會ひてよりは、彼へ對する同情の念湧き出で來りたり、老日、知輪沒が傍にありて、知らぬ内に毒氣を吹きかけ、体の病にも心の病にもいろ〳〵と干渉し、是等の便宜をば一に其の殘忍なる目的のために用ふるが故に、牧師の良心はいつも搔き亂され、終には精神を亂し毀るに至るべく、其の結果此の世にては狂亂の人となり、永生にては善なること眞なること丶全く緣を絕てるものとなるべし。希士帖が曾て非常に愛したる人、否今も非常に愛せる人の果て斯くの如きか。此を以て希士帖は牧師の名譽や進んでは生命をまで犧牲にしても、尙此まゝに牧師を棄て置くに優れりと思へり。あゝ是れまで我が思ひの此に及ばず

して久しく牧師を非常なる不幸に突き放し置きしは、今に至て何と謝すべき。之を口に言ひ出すよりも、牧師の足下にて死ぬるが優なりと希士帖は思ひぬ。

彼は叫び出でたり『亞撒の君よ。我を赦しね、我は何事にも眞實ならんと力めたり、眞實を貫かんとせしは我が一つの德義なりき。而して如何なる時にも之を貫けり。唯だ御身の生命と名譽とが之と天秤にかけられし時、我は眞實を貫き得ざりき。我は僞りに同意せり。されど僞りは決して善きものに非ず。死すとも僞りてはならぬなり。君は驚き至はんが、彼の老人、彼の醫士、即ち人々が老日、知輪沒と呼べる者は、我が夫たりし者なり』

牧師は希士帖を見やりしが、其の情は激動して、顏は言ひ知れぬ澁面をなし、一時は容貌全く別人のやうになりぬ。されど彼の心はもはや非常に弱り居ることゝて、かゝる情さへも力强くは作用かず、彼は手を顏に掩ひて地に突き坐れり。『我は之を知りて居たるらし、我は之を知り居たり。我心はおのづと始めて彼を見しときにも、

又其の後も屢々我に之を告げしものを。あゝ我は何故に覺らざりしか、希士帖、弗蘭御身は此の事の如何ばかり恐ろしきかを知るまじ。病める心罪ある心を覗き居りし目に、之を剝き出しにして見せしこそ、恥辱なれ醜體なれ。女よ〳〵御身に責任あり、我は御身を赦す能はず』と言へば希士帖は傍によりて落葉に身を落して『御身は我を赦さゞるべからず。神をして罰せしめよ。御身は赦さゞるべからず』と言ひ、俄に我が手を伸ばし田墨底を抱きて其の頭をば我が胸に押しつけぬ。田墨底は身を脱れんとすれど得ず、希士帖は之を放さゞりき。何となれば田墨底より嚴しき顏して見らるゝが厭なりしなり。全世界は七年の間此の孤獨の女に向つて苦き面しぬ。されど彼は之を忍び之を睨め返す如きことなかりき。天も亦苦き面しぬ。されど彼は死もせざりき。然はあれど此の弱々しく罪に充ち悲しみに打たれし人の苦き面ばかりは、希士帖の忍び能はざる所、希士帖の向き合ひて生き能はざりし所なり。『御身我を赦すべきか。御身我に苦き面せざるべきか。御身我を赦すべきか』と數多たび繰り返し言へば、田墨底も終に『我は御身を赦す。進んで赦すなり。神は我等二人をも赦すべきか。希士帖よ我等は世界にて罪人の最も惡き者には非ず。此の汚れたる宗教家よりも尙惡しき者あり。彼の老人の復讐は我罪よりも尙暗し。彼は冷たき血を以て人間の心の至聖所を荒したり。御身と我とは決して然ることをせざりき。』と云ふ。『決して然ることなし。我等の爲せしことは其の事自身は神聖なることなり。二人は然か感せしに非ずや。又然か言ひ合へりしに非ずや。御身忘れ玉ひしか』と希士帖言へば、田墨底は立ち上りて『如何で忘れ居らん』と言ひ、再び二人とも倒れし木の苔の上に腰かけたり。此の時ほど面白からぬ時は無かりしも、又一種樂しき所ありて二人は此のまゝにて今暫く〳〵と思ひ合ひぬ、森は薄暗くして吹ま通る强風のために軋り、枝と枝とは突き合ひて、或る老木は氣味惡しく呻りぬ。然も彼等は尙低徊せり。森の中より植民地の方に走り行ける徑は見るも厭はしきかな。希士帖、弗蘭は其の徑を傳ひて彼方に行き、またも恥辱の重荷を負ひ、田墨底

は空虛なる體面を造らざるべからず。此所の光は暗けれど、金色の光よりも尊し、何となれば希士帖も眞の希士帖として、唯だ一對の眼より見られ、田墨底も眞の田墨底をして唯だ一對の眼より見らるればなり。

斯かる間に田墨底は遽に思ひ出で丶叫びぬ『希士帖よ、又恐ろしき事こそ起りたれ、老日、知輪沒は御身我の正體を露はさんと思へるを知れり。我れ尙我等の間柄を秘密になし居るべきか。今後は如何なる復讐の方針を取らんとはするやらん』希士帖は思ひ回らして『彼の性質には不思議に人に陰す所あり、此の性質は復讐を念ふよりして益す增長せり。されば秘密を露すやうのことはあるまじ。必ず他の手段を求めて之を遂げんとするならん』と言へば、田墨底は心に震ひ手にて胸を强く押えつゝ『我は又いつまで此の大敵と同居して生くるにや。我がために計れ。御身は强し。我に代つて決斷せよ』と言ふ『もはや同居し玉ふべからず。もはや彼の目の前に御身の心を露すべからず』と希士帖靜かに且つ確かに言へば『死ぬるよりも尙惡し丶。

されど如何にして之を避くべきか。何として善かるべきか。今程御身に彼の正體を明かされし時の如く、再び此の枯葉の中に突き坐りて、今といふ今死で仕舞ふべきか』と答ふるにぞ、希士帖は涌き出づる涙を止めかね『其れほどまで心傷き弱り玉へるか。其の傷その衰弱のためにのみ死に玉はんとするか。他の原因にて死もこそすべけれ』と言へば『我は神の審判を受けたり。之と張り合ふは我が力に及ばぬことなり』『御身もし其れを善用するの力だけを有し玉はゞ、天は惠を示すべし』『我に代つて雄々しくあれかし、我に爲すべきことを助言せよ』希士帖は此に於て、しかと牧師の目を見入り、牧師のくづをれし靈に電氣の如き力を注ぎかけつ丶『世界は其れほどまでに狹きものにや。つひ近年までは此の森の中と同じかりし彼の町のみが天地かは。此所の途の一端は彼の町に通ずれど、反對の方向に辿り行かば、途はます〳〵細くして、幾哩も行かぬ内に白人の跡とては全く絕え果てぬべし、其所にて御身は自由なり。實に短き里數を行きさへすれば、御身が苦みの土地を離れ

て、幾分の幸福を取り得べきに非ずや。老日、知輪沒の目より御身の心を隱すの陰は此の宏大なる森の中に奚んぞなからんや』と言へば、牧師は悲しげに笑みつゝ『然り、されど然かせば唯だ落葉の下に埋るのみ』『さらば海上には廣き途あり。御身其れを通して此の土地へは來しなれば又其れを通して歸り得べし。英國には人目の枯れし片田舍か左なくば宏大なる倫敦か、或は日耳曼なり佛蘭西なり、伊太利なり、御身は行きて彼の老醫士の手より逃れ得べし。且つ又鐵のやうなる此の地の人々や、其の考へを相手にして御身何をかなさんとはし玉ふや。もはや彼等のために長く束縛せられて御身は隨分盡し玉へり』牧師は夢を實行せよと言はるゝかの如く耳を傾けて『其は出來べからず、我は行くの力なし。斯く患難に逢ひ斯く罪を犯したる身は、唯だ神の攝理にて置かれし地にて此の生命を曳き摺り行かんとこそのみ思へ。斯く靈の亡びたる身は人の靈のためとならんことを盡さんとこそ思ふなれ。我は我が地位を去り得ず。たとへば不忠の咎めを受け居れる番兵の如し。其の立てる所を去る時は即ち死と汚名とを報はるゝ時なれど終りまで立たざるべからず。』希士帖は我が元氣を以て田墨底を刺激せざるべからずと決心し『御身は七年間の不幸のために打ち碎かれ玉へり。されど是までのことは全く棄て玉はざるべからず。此の森の中に深く分け入るとも、又は海をこえて行き玉ふとも、何れにしても此の不幸をば其の起りし所に棄てゝ行き玉へ。今後決して其の縛れのために紓さるべからず。凡てを仕直し玉へ。御身は唯だ此の一の試驗にて凡ての力を費消し去りしか。決して然らず、今後尙試驗山の如く成功海の如し。取り得べき幸福も在り爲すべき善もあり。今の僞りの生活を乞ふ眞の生活と取り換え玉へ。君善しと思はゞ印度人の師となり使徒となり玉へ。左なくは君の性質に一層善く向ける如く開化せる世界の賢き人、進歩せる人の中にて學者となり玉へ。說敎するなり、著作するなり、働くなり、何にても横はつて死ぬといふより外のことをなし玉へ。亞撒、田墨底てふ名をば棄てゝ、全く他人となり玉へ。名乘つて恐れも恥ぢも感ぜぬ名の人となり玉へ。君は

此れほど生命を食ひ取る苦の中、此れほど悔改さへも出來難きものと君をなさんとする苦の中に、何時までも居らざるべからざる理何處にありや、起て去り玉へ』。田墨底は希士帖の熱心のために眼を一閃せしめしが、其れも忽ち消え『あゝ希士帖、御身は膝の震ひて倒れんとしつゝある者に競走せよと言ふなり。我はもはや一人にて曠き異郷に入りこむほどの精力も勇氣もなし』と言ひぬ。是れ精神の自暴自棄を顯はせし最後の言なりき、彼は手の屆く所に在る幸運をも捉ふるの力を缺ぎぬ。再び『一人にては希士帖』と言ふを『御身は一人にて行くべからず』と希士帖は深き所より出づる低聲にて答へたり。あゝ二人とも之にて心のたけを言ひ出だせしなり。

第十八回　一道の光明

亞撒、田墨底は我が心の希士帖に通じ、其れとなく言ひしことを希士帖の方より明らさまに言ひ出でしを見て、望みと喜びとの色を顏に浮せしが、又希士帖の膽太きをば恐ろしくも氣味惡くも感ずる色を浮ばせつゝ、希士帖の面を眺め入りぬ。されど希士帖、弗茴は生れついて勇ましく活潑なる心の女なるが上に、長き間世間より除外物とされ居りしかば、其の考へは宗教家たる田墨底の思ひも初めぬ所ありき。そも希士帖は道德の曠野を案内者もなくさまよひ歩きぬ。彼の心は至て自由にして、絶えて人間社會の法律に據て制裁されざりしかば、疾くより人間社會の外に立て人間社會と其の制度とを觀、印度の野蠻人が新英洲清教徒の儀式や制服や刑法や宗教を批評さると殆ど同じ心を以て是等を批評し居たり。是れ實に緋文字に由て押し遣られたる變化なり。

田墨底の方は之と異り。世間一体に法律として許し居れるものゝ範圍を超して其の外に蹈み出でんなど夢にも考へ及びしことなし。一たび其等法律といふ者の最も神聖なる一つを破りしことはあるも、其れは情慾の罪にして、我が主義に出て行ひしとか、我が手段として行ひしとか云ふものに非ず。其の事ありて後は彼は自ら注意

に注意を加へて、我が意馬心猿を守り、之を身動だにせざらしめんとせり。其の時代の宗教家のことなれば、社會の首たる地位に立てるものから、彼はます〳〵社會の制裁と規則と主義と又僻見さへに搦められぬ。宗教家たる制裁あるが上に、一たび罪を犯して、良心に絶えず之を痛める人なるが故、其身を慎みて德義の境を蹈み外さゞりしこそ、却て始めより罪を犯さでありたらんよりも至れるものありき。斯かれば希士帖、弗商に取りては、今此の地を脱れんとの計劃を目論むこと當然なり。其の恥辱と放浪との七年間は、實に此時に備ふるためなりしと言て可なり。然るに亞撒、田墨底は之と異り、彼にして若しまたも罪を犯さば、其は何とも言ひ免るべきやうなし。唯だ稍酌量すべきは、彼は長く手痛き苦みに由て心打ち碎かれしこと、彼の心は悔恨のために暗くせられ搔き亂されしこと、罪を公けにするか僞善者として過ぐるか、何れも苦しきことなるが、其の何れの苦みの方に着くべきかと、良心惑ひ惱みしこと、死と恥とを避け敵の陰謀を脱れんとするは誰しも願ふべき人情なりしこと、田墨底の如き人生の荒れ果てし行路を行く者が、一朝人間の情愛と同情の光を仄かに望み、是までの苦痛無情に代ゆべき新しき生活、眞の生活の在ることを垣間見しこと。是等の事情あるが故に、田墨底、希士帖の言を納れて此地を脱れ、之に由て再び罪を犯すに至るとも、多少の怨すべき所はあらん。且夫れ罪てふ者が一たび人間の靈魂に穿ちたる穴は決して回復さるゝものに非ず。いつも此所を衛るに非ずんば、惡魔は再び襲ひ入り、甚だしきは更に他の所にまで穴を穿つて入り來るべし。されば注意して此所を守りもすべけれど、壁は毀たれたるまゝに存し、以前の味い忘れかねて再び打ち入らんと覗ひ寄する敵の足跡も其の近邊に存するなり。田墨底は心の中にて左ほど闘ふこともなく、我は此地を脱れん、されど一人にては脱れじと決心せり。自ら思ふやう『此の七年の間に片時にても我心に平和あり、希望ありしことを思ひ出さば、我は尙徐かに忍んで天の惠を待つべし。されど我は如何にしても罪人たるを免れず。處刑を受くる前に與へらるゝ慰めを辭して取らぬべき

理やある。若又希士帖の説くが如く、此れ善き生活に至るの途にてあらば、之を取らぬは此上もなき損なり。且つ夫れ我は希士帖と添はずしては此後生くる能はず。彼は我を勵ますの力と我を慰むるの柔和に富めり。あゝ神よ、汝は我を救し玉ふべきか』と

希士帖は目を見合はせつ静かに『行き玉へ』と言ひぬ。一たび決心すれば、何となく心の爽かになるものにて、之は我が心が胸の獄中より新たに脱れ出でゝ、全く人の蹈みてし事なき土地の自由なる空氣を吸ふに由りて然るなり。田墨底には意氣昂り、全く新天新地を望む心地せしが、性來宗教的の人のことゝて、凡てのすることみな其の色合を帶ぶるを免れざりき。

自ら訝りつゝ叫ぶやう『喜びてふことは根から我が心の中に枯れ果てしと思ひ居りしに我はまた喜ひを感するにや。希士帖よ、我かための天使なり。我は今までの病と罪と悲みとに沈められ居りし己れをは此の木の葉の下に突きこみ了り、萬事全く改まりて、我を惠みし神を崇むるの新精力を持て起き上りしかと思ふ。是すでに今までよりも善き生活なり。何ぞ早く此に氣つかざりしにや』乞ふ後を顧みる勿れ。過去は過去なり。今は其れは兎や角考ふべきに非ず。見玉へ、此の徽章と共に凡ての過去は棄て去り、何もなかりし如くにせん』と言て希士帖は緋文字を留めし鈎針を拔き、緋文字を胸より外して、之を枯葉の中に投げやりぬ。

謎のやうに心にかゝり居りしこと之にて片付きしものから、希士帖は長く深き溜息を吐きぬ。之にて罪と惱みの重荷心の上より取り除かれし心地せり、眞に此の自由を感ぜしまでは、彼は其れまでの重荷が如何ほど重かりしかを知らざりしなり。次に彼は其の髪を結びこみし帽子を外して、髪をば肩にかゝらしむれば、其の黑くして豐かなるにより影をも生せしが又光りをも生じ、其の容貌は我かに美はしさ優しさを添えぬ。彼の口のほとり、目の中よりは、女の心の底より迸しり出づると思はるゝ匂やかなる笑うかび、紅の潮は久しく青白かりし頰にさしかゝれり。女らし

き事、若々しき事、美はしきことは、年を後に取て歸り來り、一時に女らしき望みと、今まで知らざりし幸福とを伴ひ來れり。空合さへ全たく變じ來り、二人の悲みと共に天を閉ざせし雲は、又悲みと共に消えにしか。天は俄に笑顔つくり、日の光りは輝き出で、小暗き森の中に光を射し入れ、綠の葉をば轉た綠を競はしめ、落葉をば黃金に化し、大木の幹をば光らしめ、今までは影にされ居りしものを今度は輝き出でしめ、小川の流れは一條光りて彼方に引けるが故に遠くまで見やらるべくなれり。是れ實に人の氣に染められしことなき此の森の自然が二人の幸福に同情せしなり。愛は始めて起りたる愛にせよ、將た死に似たる眠りより醒め出でし愛にせよ、いつにても日光を造り、心を光りにて充たせ、其の光りは外にまで溢れ出づるほどに一杯に充ちざるべからず。森にしてよしや尙舊の如く薄暗かるも、希士帖の目、はた田墨底の目には輝きて在らざるを得ざりしなり。

希士帖は又一つ別の喜ひにて身を震はせつゝ田墨底を見やり、『御身は眞珠子を知らざるべからず。御身は曾て彼を見たり。されど今は別の目を以て彼を見るならん。彼は奇妙なる兒なり。我は解するに苦む。されど御身は厚く彼を愛して、如何に取り扱ひてよきやを我に助言し玉ふべし』牧師は大分打ちとけて『彼の兒は余を知ることを喜べりと思ふや。我は小兒等をば久しく持て餘せり、我を信用せねばなり。我には懷かすして逃ぐるなり。我は眞珠子のことをも恐れ居りしが』『そは悲しき事なりき。されど眞珠子は御身を、御身は眞珠子を厚く愛するならん。彼遠くに在らず、呼び寄せん。眞珠子よ眞珠子よ』『眞珠子は彼所に在り。小川の向ふの少しく隔れたる所日光の洩れ照らす中に立てり。御身は彼の兒我を愛するならんと考へ玉ふか』

希士帖は微笑し、また眞珠子を呼びぬ。眞珠子は田墨底の言ふ如く、少しく隔たれる所に、日光が木の葉の間より洩れ落つる中に立て、光りの彼方此方へ動く毎に、其影乍ち鮮かに乍ち薄く見られ、忽ち眞の小兒の如きかと思へば、又忽ち小兒の精

靈のやうになりつゝ立ち居たり。母の聲を聞きつけて、徐かに森の中に歩みを移して近づきぬ。

眞珠子は母と牧師とが語らひ居る間を決して待ち遠しく感ずることなかりき。宏大なる黑き森は此の世の罪と煩ひとを心に取り入れたるもの共にこそつれなき所とは見ゆれ。友なき此の幼兒には實に遊び友達となり、出來るだけの心盡しして幼兒を歡迎したり。先づ去年の秋の苺、今は熟しすぎて血の滴るやうになれるを眞珠子に馳走すれば、眞珠子は之を集めて其の味ひを賞し、道より出で行くをも苦とせざりき。山鳥は子をつれて前をかけ行きしが、やがて其の輕卒を悔いて、恐るゝを要せぬ旨を雛に知らせ、鳩は枝の上にありて眞珠子近づくまで靜まり居りしが、眞珠子の下に來るや警戒でもあれば挨拶でもある聲を出だし、栗鼠は其の高き棲所より怒りと喜びとをもて鳴き、去年の胡桃の齒痕に古りたる果一つを眞珠子の頭に落しかけたり。狐も落ち葉を踏み騷がす眞珠子の足音に驚いて睡りより飛び立ちしが、逃げ去るべきか再び假寢すべきかを疑ふものゝ如く眞珠子を窺ひぬ。此の森の守の懷に養はれし此等のものも、その荒き所は此の人の子眞珠子と相通ぜるなり。

町の街道や母の小屋の中に於てよりも眞珠子は森の中にておとなしかりしが、花も之を知るものゝ如く、眞珠子が通り過ぐるときには『我を取て御身の飾りとし玉へ美くしき兒よ』と呟く心地しければ、眞珠子は之を喜ばせんとて、菫花や扇草や若葉の枝などを集め、髮を飾り腰を飾り、かくて昔の物語りにある森の神女の如き子供となりぬ。斯かる樣してありし時に母に呼ばれて歸り行きしが、牧師を見しゆゑ徐かに歩みたり。

第十九回　小川の傍の幼兒

希士帖（ヘスデル）と田墨底（デンメスデール）とは坐したるまゝ眞珠子の近づくを眺め居たるが、希士帖は又『御身は厚く彼を愛し玉ふべし。美しとは見玉はずや。何でもなき花を以て身を飾れる

なれど其の手際善さよ。自づと具はれるなり。彼は華麗なる兒なり。されど我は彼の兒の額の誰に似たるやを知れり』と言へば、田墨底は靜けき笑ひを浮べ『希士帖、此の可愛き兒は御身の側をいつも舞ひ廻り居れることなるが、彼が如何ばかり我を危ましめしかを御身は知るや。彼は常に我が貌の幾分か彼の顏に傳はり、世人が其れを見つけはせずやと思ひて、一方ならず恐れたり。されど彼は最も多く御身に似たり』『否々、最も多くとな。如何で〳〵。今暫く辛抱し玉へ。さすれば彼の顏が誰に似しやてふことの詮窄あればとて御身恐るゝことを要せぬやうなるべし。兎も角も奇妙なるまでに美くしくは見えずや。あの髮毛に花を飾りたる所は、全く神女のやうなり』

二人は今まで覺えざりし感じを以て眞珠子の來るを迎へ眺めぬ。眞珠子には二人を結び着くるの糸あり。七年の間眞珠子は生ける神字として世に呈出せられ居たり。此の神字にて二人が隱さんと力めし秘密書き顯はされ居りしかば、之を讀み得るの預言者ならば忽ち明白に世に露はるべかりしなり。眞珠子は又田墨底と希士帖と二人の一体となれるものなりき。眞珠子の中にて二人の肉體も精神も一つとなり居たることなれば。此の世の生命も未來の運命も結び合へるなり、かゝることを考へての故なるか、眞珠子の進み來しときには二人の心に何となき畏れの情ありき。

『彼の兒に挨拶するに當り何も變りたる容子し給ふ勿れ。眞珠子は非常に鋭敏なり。特に自分には譯の分らぬことに人が感動し居るを見ては、其の理由を究めでは中々承知せぬ質なり。されど彼には強き情愛あり。彼は我を愛す。又御身を愛するならん』『我が心は此の會見を恐れ之を苦しく思へり。されど實は何處の子供も我には懷かず我膝にも登らず、我が耳の側にて囁りもせず、我が笑ひに笑ひ返しもせず、唯だ遠き所に立て疎ましき目付きして我を見るのみ。赤兒さへ我れ抱くときは激しく泣き出づるなり。されど眞珠子のみは今まで二度我に親切なりしことあり。一度は御身よくこれを知る。今一度は彼の總督伯林俄の家に於てなりき』『彼の時御身は眞

珠子のため我がために善く取り繕ひ給はりたり。我は之を記憶す。小さき眞珠子も然らん。何の恐るゝことかは。彼は初めは疎ましく且つ羞みてあらんも、直ちに御身を愛するに至るべし』

此の時眞珠子は小川の向ふの緣に來り、二人を眺めつゝ立てり。其の下には小川が少しく溜りて池をなし、其の面至つて平かなりければ眞珠子の花と若葉にて飾れる姿は頭より足まで之に映り、實物よりも更に清らかに見えたり。之を見て希士帖は何となく己れと眞珠子と遠ざかり行きし心地しぬ。眞珠子は一人森の中をさまよひ行きしため、是れまで希士帖と共に接みし世界よりさすらひ出で、叫べども歸らぬものと化せしに非ずやと思ひなされたり。されど母に遠かりし心地せしむるに至りしは眞珠子の方の罪には非ず、罪希士帖にあり。何となれば眞珠子は森の中にさまよひ去りて後、眞珠子に代つて希子帖の側に寄り來り、希士帖の心にまで入り來りしものあり。眞珠子の歸り來りし時に幼兒をして我が以前の居所を見出ださゞらしめたればなり。

『我は奇なることを思ひ出だせり、此の小川は二つの世界の間の境にて、御身はもはや眞珠子と會はれぬにはあらぬか。或は又眞珠子が小さき精靈にあらぬか。幼き時の物語りに急流を渡ることを許されぬ小さき精靈ありてふことを聞きしが。彼を急がせよ。我は斯く躊躇されては神經震ふなり』希士帖は兩手を差し伸ばし『眞珠子來よかし。實に遲きことよ、今まで其れほど懶うげなることはなかりしに、此に母の友在す。御身の友にてもあるべし。御身は是まで母一人に愛せられしに二倍して愛せらるべし。其所の小川を飛び越えて來よ。御身は鹿のやうに跳ぬ超え得るに非ずや』と奬ませしも、眞珠子はまだ小川の彼方に立てるまゝにて、希士帖と田墨底とをじろ〳〵と見比べ居たり。田墨底はたまらずして、覺えず手を胸にあてぬ。幼兒は終に鷹揚なる容子を以て手を差し出だし、其の小さき人差指にて母の胸の方をゆびさしぬ。其の影は其のまゝ下なる水に映れり。